

インフィニット・エボリューション 最凶の二人の男と最凶の二体の星の狩人

モブトラマン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

嘗て、仮面ライダービルド… 桐生戦兎に敗れ滅んだ、地球外生命体エボルト。

しかし彼は滅びなかった。何故ならば彼を救った者が居た。

エボルトと同じく星々を滅ぼし、己の力とする凶悪な地球外生命体が彼を救ったのだ。

そしてそいつが……。

「エボルト、ゲームをしよう」「ゲーム?」「そうだ」

彼が目指す世界……そこは、女でしか動かせない最強の兵器、インフィニット・ストラトス。

その世界において、ブリュンヒルデと呼ばれ、最強の女である織斑千冬。

彼女の弟であり、男でISを動かす男、織斑一夏。

しかしそんな彼らには、最強の2人の従兄が居る。それも織斑千冬ですら勝てぬ程の最強が……。

目次

第一幕	
序章	1
第一章	7
第二章	34
第三章	69
第四章	110
第五章	124
第二幕	
第六章	139
第七章	165
第八章	194
第九章	220
第十章	258
第十一章	279
第十二章	295
第十三章	314
第十四章	332

第一幕

序章

俺は…… 負けた…… のか？

俺の名はエボルト…… 嘗て、あらゆる星々を喰らって自らの力に変えて生きてきた者だ。そして新たな餌食となる地球において、俺はそこで究極の形態…… ブラックホールフォームを手に入れ、更にはそれよりも強力な怪人態にまで進化して、地球を本格的に消滅させて新たな俺の一部としようとした。だが……。

VORTEX ATTACK!!

仮面ライダービルド「ウオオオオオオオオオオオオ——つ!!!
これで最後だあ!!」

エボルト「この俺が滅びるだとお!? こんな事が在つてたまるかあ!!!
に ん げ ん どもがあああああああああ——つ
あああああああああああ——つ
!!」

そうして俺は…… 終わった……。

.....

.....

所がギツチョンツ!!

エボルト「ハツ!!」

気付いた俺の視界には、宇宙空間が広がっていた。

エボルト「どういう事だ……俺は確かに……」「それは、俺が助けたからだあ……エボルト」……何?」

俺は声がる方へ向く、そこには……。

??? 「よう！エボルトお♪おひさあ♪」

エボルト「お前は…？」

そいつは青黒いモヤモヤの所為でハッキリと見えないが、声で分かる。こいつは……。

エボルト「… 久し振り、だなあ… ネメシス」

??? ↓ネメシス「おお！我が友よお！再会できて俺様超うれぴー♪」

コイツの名はネメシス… コイツは俺と同じ星の生まれで、俺と同じく星々を巡っては滅ぼして自分の力としている者だ。

だがコイツの事を俺は激しく嫌いだ。

何故ならコイツは事ある事に、行く行く星で俺の邪魔ばかりしたり、俺のパンドラボックスを遊び気分で奪おうとしたり、挙句果てには俺が滅ぼそうとした星を先に滅ぼして自分のエネルギーにするなどして、俺にとって最悪の存在だ。そのコイツが何で…？

エボルト「ネメシス… お前が、俺を助けた、のか？」

ネメシス「んう？当たり前前田のクラッカーだろう」

俺が聞いた事に、コイツは「何言ってるのバカなの？」つと言ったような態度を見せやがる。だが信用しない。

ネメシス「でも驚いたなあー。あのエボルトが、人間というチンケ

な存在に敗れるなんてなあー」

エボルト「……」

ネメシス「しかもお！その楯突いていた人間の中に、自分の一部のヤツにまでしてやられてえwwwwww」

エボルト「…… 黙れ」

ネメシス「十年も費やしてまでやったってえのによお…… プウwwwwwwwww」

エボルト「…… うるさい」

ネメシス「だつてよおー、お前調子ぶっこいた結果wwwwwwその結末があwww」

エボルト「黙れえ!!!」

ネメシス「……」

俺は大声で宇宙空間に響く程の怒鳴り、そのまま俺は奴に吼えた。

エボルト「どうせただ何処かで見ていたお前は黙ってるお!!オレがあの地球で十年もの時間を掛けた結果が敗北で終わったのは分かってるっ!!だからお前は黙ってるお!!」

次の俺が言った言葉が “ある出来事の引き金” と知らずに……。

エボルト「〃例え人間に敗れてもなあ!!その人間よりも弱いお前風情には負ける気はないっ!!!”」

ネメシス「……」

エボルト「はあ、はあ、はあ……」

ネメシス「…… へえ、言うね」

エボルト「あゝあゝ?」

ネメシス「そこまで言うなら、やってみようじゃあないかあ!なあ?
?エボルト君♪」

エボルト「……何？」

ネメシスが何か考えたようだ。しかしコイツが考える事はいつもロクでもない。

ネメシス「エボルト、ゲームをしよう」

エボルト「ゲームだと？」

ネメシス「そう！これからある世界において、その弱い人間と組んで潰し合い、殺し合う。どうだ？ん？」

そうネメシスは俺に挑発するような態度を見せる。だが俺は………。

エボルト「……いいだろう。受けよう」

ネメシス「おお♪マジイ!? やったあ♪んじやあ勝った方が、その星を喰う権利を手にいれる……どう？」

エボルト「いいだろう！オレが勝つに決まっている!!」

ネメシス「おおう！また言うね♪んじやあ、その舞台となる世界だ
がねえ……」

エボルト「どこだ……」

ネメシス「あれだ」

ネメシスが指刺した方へ見る………そこには。

エボルト「……ん？な!？」

それは地球だった。まさか……!!

ネメシス「言つとくが、あの地球はお前を倒したビルドが作った新

世界の地球じゃない」

エボルト「何!?!じゃあアレは?!」

ネメシス「あれは全く別の世界。あそこには仮面ライダーはおろか、桐生戦兎は居ない。代わりに面白そうな物がある」

エボルト「面白そうな物? 何だそれは?」

ネメシス「……インフィニット・ストラトス……人間が作り上げた『奴らにとつての』最強の兵器だ」

エボルト「ほう……」

人間が作り上げた兵器ねえ……。

ネメシス「今からあの地球に向かい、あの星で最強の人間を見つけ、組んで互いに潰し合いを始める。いいか?」

エボルト「いいだろう、ネメシス。吠え面かかせて、殺してやるっ」
ネメシス「おおう! いいねえ♪………んじゃあ、行きますかあー?」

エボルト「よかろう!」

そうして俺とネメシスは、そのまま地球に向かった。

これから何が在るかなど知らずに……。

第一章 秋羅

前回、滅んだと思っていた凶悪地球外生命エボルトの前に現れた同じく凶悪地球外生命ネメシスの手によって救われた事を知ったエボルトだったが、彼はネメシスの事を嫌悪していた。

それが切っ掛けでネメシスの提案で、彼の言うゲームにおいて互いを殺し合うという事になったエボルトは、ネメシスと共に今、大気圏の真っ只中に居る。

エボルト「もうすぐ地球だ」

エボルトがそう呟くと、ネメシスがからかって来る。

ネメシス「エボルトおーw w w w、嫌になったのらあw w w w、頭下げてもいいぞらよおー？w w w w」

エボルト「ふざけるなっ!!俺は必ず貴様を殺す程の実力を持った人間を見つけてみせる!!」

これにいつものマイペースで他人を翻弄するようなキャラを取り戻すことはせず、エボルトはネメシスに激昂する。

そんなエボルトに、ネメシスは有る事を口にする。

ネメシス「まあ！お前のからかいは終わるとして、これからのルールを決めよう」

エボルト「ルール？」

ネメシス「ああそうだ！何事も決まりは必要だろうか？」

エボルト「それでそのルールは？」

大気圏突入中だというのに、二人この地獄の中、これからの決め事を話し始める。

ネメシス「ルールは、3つ。ひとつ、互いに人間の中で最強と思える存在を見つけて、パートナーを組む。ふたつ、互いに所有しているパンドラボックスとフルボトルを使い、戦う。みっつ、勝利した者は地球を滅ぼして、そのエネルギーを獲得する権利と相手のパンドラボックスとフルボトル60本の所有出来る」

エボルト「なにっ!?最後のルール聞いていないぞっ!!」

ネメシスのルールにエボルトは抗議する。しかしネメシスはそれをこう返した。

ネメシス「ああん?だつてえー、今あ、考えたんだもおん。ごめんね☆エボちゃん…」

テヘペロ(・ω<)」

エボルト「ふぎけるなっ!!俺のパンドラボックスとフルボトルは、桐生戦兎の手によって新世界創造の為に全て失ったんだぞ!!」

そう、彼の所有物であるパンドラボックスと60本ものフルボトルは、仮面ライダービルド…桐生戦兎によって、新世界の創造の為に使われていた。であるからして今のエボルトが所有しているのは、地球に向かう前にネメシスによって回収されたエボルドライバー、コブラエボルト、ライダーシステムボトル、仮面ライダーローグによって破損したエボルトリガー。

もはや今のエボルトには真面目な物が限られている。そんなエボルトに、ネメシスは懐から何かを取り出す。

エボルト「そ、それは!!」

ネメシスが取り出したのは、エボルトのパンドラボックス。しかもエレメントまでしっかりと宿った状態だ。

ネメシス「フフツ」

ネメシスは不敵に笑いを零して、そのままパンドラボックスをエボルトに返した。

エボルト「どういう事だ!!パンドラボックスは新世界創造の所為で、存在その物が消えた筈だっ!!それが…」

ネメシス「まあ落ち着けよエボルト。理由は単純、俺のパンドラボックスの力で再構築してやったのさっ」

そう言いながら己のパンドラボックスをエボルトに見せる。そのボックスは見た目全てエボルトのと酷似するが、

ボトルはエボルトのとは違う種類がある。(タグのご都合主義のお陰と思ってください)

エボルト「お前のパンドラボックスのお陰… だと?」

ネメシス「ああそうだあ。ん?ああつとお、ボックスや全てのボトルには何の細工はしていないから安心しなさんな」

ネメシスから戻ってきた己のパンドラボックスを隅から隅まで調べてるエボルトに、ネメシスはそう言うが、エボルトは決して彼を信じていない。

エボルト「… それよりも、もうすぐ大気圏を突破するがこの世界の人間に、最強の人間なんているのか?」

ネメシス「フフツ、それに関して問題ナッシングう!オレが調べた中に、なんとお!!ハザードレベル100の持ち主が2人居たのよお!

こ・れ・が・あ！」

エボルト「バカなあ!!そんな事が在る筈があ!!」

ハザードレベル……ネビュラガスという特殊なガスに対する耐久値を段階に分けたものをハザードレベルと呼称していた。ネビュラガスを注入されて直ぐに死に至るのがハザードレベル1、怪人態：スマッシュに変異するのがハザードレベル2である。

だがまれに、ハザードレベル2以上の耐久値を持つ者が居り、そういった人間はネビュラガスを注入されても怪人には変異せず人間の姿、記憶を維持したままで居られる。

そしてハザードレベル2以上……レベル3になるとドライバーと呼ばれるベルトを装備し、仮面ライダーに変身が可能になるのだ。

だが基準値以上、肉体の限界を超えた数値を蓄積すると体が消滅……すなわち死が訪れる。

だがそれは飽く迄ネビュラガスが存在している話しであって、ガス自体が無ければ意味を為さない。

だがネメシスの口から語られたのは、そんなネビュラガスが存在していない筈の世界で、なんとハザードレベル3以上、どころか100以上の化け物がこの地球に居るらしい。

エボルト「……どうやってそんな化け物が存在している……？」
ネメシス「恐らく、この地球にはネビュラガスと同質の物があるのかもな」

エボルト「そいつら以外に、ハザードレベルを検出できたのは？」
ネメシス「いんやあ、それが見つつけられたのがその二名だけで、他は全く屑、ゴミ、ブタ、家畜以下のカス共だけだあ。その二人だけだったんだよ」

エボルト「……………」

ネメシス「まあ、そんなこんなで大気圏突入完了！…あとは互いに、その基準値を超えた化け物人間くんたちを探すのが、第一ステップだ」

エボルト「ああ… そうだな」

ネメシス「今、お前の思考にその片割れ君の現在位置を送っておいたから、あとは自力で探してくれやあ。俺も既に決めている奴の下へ向かうからさあ」

エボルト「……………」

そうここからようやく彼らのゲームが始まるのだ、故にここからは互いに敵同士なのである。

ネメシス「じゃあなあ♪」

そう言い残して、ネメシスは光の速さでその場から居なくなった。

エボルト「… まあいい。俺も探すとするかあ」

そしてエボルトもまた消えた……………。

インフィニットストラトス……………。

それは、宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツ。

だが初めは、余り周囲に注目どころか聞く耳を立てる者は一人も居なかった。

しかし、「白騎士事件」という出来事でそれは一変したのだ。

従来のあらゆる兵器が I S 前では、意味を為さないガラクタへと成り果てる。人々は瞬時に I S に目が行ったが、I S には欠陥があった。それは、女性でしか動かすことが出来ないということだ。その為、世界は一気に歪んで行った。

そんな I S を “新たに” 男で動かす事が出来る者が表れた。この私、織斑千冬の弟…… 織斑一夏。

だが…… 一夏よりも前、私が I S 学園に在学時のことだった。世界が震撼した。そしてそれは I S の生みの親であり、私の親友でもある篠ノ之束と、そして私すらも驚愕した。

私や束が素直に慕い、実の兄の様に想っていた歳が二つ上の二人の従兄で、双子の兄弟…… おりむらしゆんが 織斑春我、おりむらあきら 織斑秋羅。この 2 人は何をやっても完璧に熟す、正に完璧超人みたいな人たちだった。

無論それはISにおいてもそうだった。彼らは直ぐにISに順応し、圧倒的に次々と学園内で最強を誇っていた。

2人の性格としては、春我兄さんは喋りが上手で良くクラスの女子から慕われ、生徒会などに入って学園をより良くしてくれた。対照的に秋羅兄さんの方は春我兄さんとは違い、余り多くを語る様な人では無い。

だがそれでも行動で相手を支えたりして、クラスの柱ような役割をしていた。

そんな私と束、それに一夏、束の妹の箒に、そして春我兄さんと秋羅さんの実の妹であるマドカも同じく、あの人たちを目標にしていた位、彼らを慕っていた。

特に秋羅兄さんは… 私が密かに想い続ける大切で掛け替えのない永遠の初恋の人だ。あの人以外に好きになる男など存在しないし、有り得ない。

そんな私は今、長年の想い人である秋羅兄さんに会いに行く為、彼が居る沖繩に来ていた。

なぜ私が沖繩にいるかと言うと、一夏をあらゆる脅威から守る為だ。春我兄さんと秋羅兄さんの二人はISだけでなく身体能力も異常に強かった。それに怪我の回復が常人よりも早く、最早普通の間人という言葉が似合わない程に…。

私は剣道や体術において二人に一本も取る事が出来ず、惨敗だった。ISにおいても勝つことができなかった。彼らはそれだけの身を守る程の実力を有しているが、それに引き替え私の弟の一夏はそれがない。

このままでは女尊男卑主義の団体や、それに準ずる組織に命を狙われる。

現在一夏は、私が学生時代の友人であるオータムに預けてある。アイツは専用のIS「アラクネ」を持っている。それに見合う程の実力も備わっている。

それに……彼女も私と同じく秋羅兄さんの事を今でも好きなのだ。それ故、同じ男を好いた者同士であるからこそ、信じられる。だから預けた。

まあ、私やオータムだけではない。他にも居るが、それはまたにしよう。

秋羅兄さんは、ISから離れて医療の道に進んだ。それには当時の周囲の人たちは反対し、ISの世界大会「モンド・グロツソ」に出場し、チャンピオンにもなれると言われてISから離れる事を良しとしなかった。

それは私や束、他の者たちもそうだったが、それでも秋羅兄さん、そして春我兄さんも断固として譲らず互いの進みたい道へと行く。この時、兄さんたちの実の妹であるマドカを私に託して連絡が取れなくなっていた。

だが、一度だけ、秋羅兄さんと再会した事がある。それは私が第二回モンド・グロツソに出場する時、何者かによって当時私の応援に向かう筈だった一夏が誘拐された時である。

誘拐犯の目的は私の優勝阻止であったが、日本政府は私にそれを伝えなかった為、気づけなかった。私は絶望に暮れた時、私の携帯に束

が掛けてこう言った。

東『ちーちゃん！安心してっ！アキ兄ちゃんが、いっくんを助けてくれたからっ!!』

千冬『え?!』

東は秋瀬兄さんに頼んで、一夏を助けて欲しいと伝えてくれたそうだった。(その時も春我兄さんに連絡したが、繋がらなかったそうだ) 東からISを借りた兄さんは、一夏を救出してくれた。その時、ドイツ軍が兄さんの助力したそうで、事件解決後、兄さんはドイツに借りを返す為、IS部隊の一年間限定の教導官を引き受け日本を発つ。その時に漸くの再会と、再度の別れである。

《回想》

千冬『兄さん……』

秋邏『… そんな顔をするな、千冬。マドカの事…… これからも頼むぞ』

千冬『…… 分かった』

秋邏『… マドカ』

マドカ『… 兄さん』

そう秋邏は、無愛想な顔でマドカの頭を撫でてやった。

マドカ『あ…… / / /』

彼女にこれに頬を赤く染める。それに秋邏は、自らの手を彼女の頭から離して一夏に向く。

一夏『秋兄……』

自分の所為でと重い表情をする一夏に、秋邏は言う。

秋邏『… 一夏、今は弱くていい。だがお前も男なのだから、いつかは守れる位はなっておけ』

一夏『秋兄…… うん!! 約束する!!』

一夏の力強い頷きに秋邏は満足したのか、そのまま何も言わずにド

イツ行きの飛行機に乗り、行ってしまった。

千冬『…………… 兄さん』

《回想終了》

そして、ドイツでの一年間の教導官任期を終えた兄さんは、誰にも告げず再び行方を眩ます。

だが秋羅兄さんが沖縄に居る事が東のお陰で分かった。が、春我兄さんの所在が未だに分からずのままである。

東も懸命に探してはいるが以前掴めない。他人の事を興味など持たなかった東が、あそこまで一生懸命なのは、私と同じ気持ちで居るからだ。

ただ想い人が違う。束は昔から春我兄さんの事が大好きだった、likeではなく当然のloveのほうである。

そう思いながらに進んでいると、小さい診療所がある。

千冬「あそこに…… 秋瀬兄さんが」

やっと会える。大好きだった秋瀬兄さんに……。

私は逸る気持ちを落ち着かせながらに、診療所の玄関口までたどり着き、一度深呼吸をする。

千冬「スウ…… ハア…… よし！」

さあ!!行くぞ!!

その時……。

??? 「… 人の診療所の前で、一体何が良しなんだ… 千冬」

千冬「っ!？」

この声… 鋭く突き刺さる様なこの声は… !私はゆっくりと背後へと向く。そこには…。

??? 「……………」

ボサボサの髪、それに対をなすように尖ったアホ毛、身長190以上あり、鋭い眼つきでこちらを見る白衣を着た男… この人こそ、一夏よりも前にISを動かし、私が敵うことない強さを持った最強の人間… 織斑秋羅である。

千冬「… あ…」

??? ↓秋羅 「… あ？」

千冬「秋羅にいさああああああんっ!!」

私はそのまま彼の胸に飛びつき、彼の背に手を回して泣きついていった。

千冬「秋羅… 兄さん… っ… ぐす… ううっ」

秋羅「… 全くお前は…」

嬉しさの余り、暫く泣くのが止まらなかつた。しかし秋羅兄さんは私を拒まず、私の頭を撫でてくれていた。

ようやく落ち着いた私を兄さんは、そのまま診療所にある応接する部屋に案内してくれた。

ここから本題の方に移らないといけない。

千冬「まったく……」

そう言いながら、千冬の口元は嬉々として上がっている。そして秋
羅から頂いた麦茶を直ぐに飲む。

秋羅「……で、何しに来た？と言いたいが……テレビで見たぞ」

千冬「っ!!」

彼女の反応に、鋭い表情の秋羅は話しを続けた。

秋羅「……大方、一夏を護ってほしいという事なのだろうが、敢て
言わせて貰う………本州に帰れ」

ガタっ!!

この答えに、千冬は立ち上がり秋羅の事を動揺しながら見つめ
る。しかし秋羅は座ったまま、彼女を鋭く見る。

千冬「何故っ!?!」

秋羅「……俺はもう、束が作り上げたISに対して関わりたくない。
それにISの所為で大勢の人間たちの人生が滅茶苦茶になって破綻
してしまっている。それに関してお前と束は、どういう気持ちで居る
んだ?」

千冬「……それは……」

秋羅「…別にもう白騎士でなくなったお前に対して責めるつもりはない、だが考えて見る。お前と束が変えた世界で一体どれだけの無力な人間が…犬死にをしたか」

千冬「……………」

白騎士事件…………それはISの、真の誕生の日と言っても過言ではない。突如日本に攻撃可能な各国のミサイル2000発以上が発射され、それを突如現れた白銀のISを纏った1人の女性によって無力化された。

なぜそれらのミサイルが突如発射されたのか、それは何者かのハッキングよつての物だった。その後、ISの有用性を見せられた各国は軍を派遣したが、戦闘機、戦艦、軍事衛星なども全て無力化された。しかも一人の犠牲なく、だ。

それほどの騒動の切っ掛け…ミサイルをハッキングを行ったのは、篠ノ之束。そして彼女が作り上げた白騎士…それに乗り込み、その圧倒的な力を見せたのが彼の目の前に居る女性、織斑千冬。彼女こそが白騎士の操縦士だったのだ。

秋羅「……………」
「ISは究極の機動兵器」
「ISを倒せるのはISだけ」
当時の束の言葉によつて世界はISを受け入れた。その結果…無慈悲で、理不尽な、性別差別社会が始まった。医療に携わっているとなあ、聞こえてくるんだよ。妊娠した女性が待望の赤ん坊を生んだが、その赤ん坊が男だった為、女性医師に母親が殺処分を依頼し、生まれたばかりの赤ん坊はそのまま…………人体実験の玩具にされたとな」

千冬「そ…そんな……………」

これに彼女は、瞳の焦点が合っていない。だがそういつた話が他にもある。

ISの存在の所為で、多くの男性が身勝手に、理不尽に、社会的に潰されている。全部が全部と言う訳ではないが、それでも重病を患った子供が男だった為、病院側から拒否されたとか、ただぶつかっただけで痴漢、強姦と擦り付けられ逮捕されるなどの物や、女性集団で男性一人を精神的、また物理的にもリンチを仕掛けて潰すなどがある。

そう言った人々が居る中、秋羅は内心、IS学園に居た時から千冬や束を少しばかり失望していた。

秋羅「…これだけの人間が不幸になっている中、まさかお前と束は知らぬ存ぜぬを決め込み続けるつもりか？だとしたらお前と束、そういう酷いものだぞ」

千冬「に…兄さん…」

自分の想い人からの罵倒に千冬は一瞬意識を失いそうになっていたが、それでも踏ん張り彼の話を聞き続ける。

秋羅「…だから俺は、学園を卒業してからは医学の道に進み、ISに関わらないように連絡を絶っていたのだが…」

千冬「……………」

秋羅から語られる言葉に、千冬は立っているのが辛くなっていた。そして……………。

バタンツ!!

秋羅 「っ!?!千冬っ!!」

彼の前で千冬は倒れてしまった。

千冬 「……………っ……………う……………うう……………ん……………」

秋羅 「……………眼が覚めたか」

千冬 「あれ……………私……………」

彼女が起きた場所は、診察室の簡易ベッドだった。

秋羅 「…意識を失い、倒れたんだ」

千冬 「兄さん…」

秋羅 「…お前、真面に仕事を休んだのか？」

彼女は首を横に振る。

千冬 「ここ暫くは働きづめ…だったから」

秋羅 「…一夏の件でか？」

千冬 「…うん」

彼女の言う通り、真面に仕事を休んでなど出来なかった。自身の弟が秋羅や春我のようにISを動かした事により、各方面から対応に追われ、それ処では無かった。

秋羅 「…」

千冬 「…」

2人の間に、沈黙が漂う。それを破ったのは秋羅であった。

秋羅 「…今、一夏はどうしている」

千冬 「え…？今は、オータムに預けてる、彼女もIS学園の教師なんだ」

秋羅 「…オータム、か。懐かしいな」

千冬「よく兄さんに喧嘩を吹っ掛けては、ボコボコされてな。フツ」

秋羅「…確かにそうだったな。俺に返り討ちにされるのがオチなのに、アイツはゾンビのように這い上がって来たことがあったものだ」

千冬「フツ、そうだな…」

懐かしい話のお陰か、2人の間に柔らかさが徐々に戻る。

秋羅「…千冬、マドカはどうしてる」

織斑マドカ：秋羅と春我の実の妹である。しかし今は、千冬に託している。

千冬「マドカは一夏と共に、オータムの所だ。一夏と共に元気だよ」
秋羅「…そうか、いつもマドカには不憫な想いをさせている。あれだけの事を言っておいて、俺も人の事が言えない屑だ… すまない、千冬」

千冬「兄さん…」

自身の従妹に頭を下げる秋羅に、千冬はこう言う。

千冬「兄さん、いいんだ。私や東がこの世界を変えたことへの重みや罪は、今もこの胸の中にある。だけどまた同じことを繰り返すようなら、兄さんが止めてくれ。だから…」

彼女の瞳が、秋羅を捉える。

秋羅「……」

千冬「お願いだ、秋羅兄さん。私と一緒にIS学園に来てくれ！もう私たちには、秋羅兄さんしか頼れる人が居ないんだあ!!」

千冬「……っ」

彼女はそう告げたまま秋羅をしつかりと見つめて寸分も逸らさない。対して秋羅も彼女の瞳を見つめ返して……。

秋羅「……千冬」

千冬「はい……」

秋羅「……すまない」

返って来たのは否定の謝罪であった。二度目の拒否に、千冬の瞳の焦点が再び揺らぐ。

千冬「……どうして」

それしか口に出来なかった。これに罪悪感が募る秋羅は言う。

秋羅「……明日、在る場所に案内する。そこで俺と一緒に行けない理由が在る」

千冬「……分かった」

彼女の返答を聞いた秋羅は、椅子から立ち上がって診察室から出ようと扉の前まで歩く。そこで一旦止まって在る事を尋ねた。

秋羅「……春我には、連絡は……？」

千冬「……いや、全然連絡が着かないんだ。東ですら参っているよ」

秋羅「……そうか……。今日はもうウチに泊まっていけ。もう夜になる」

彼の言った通り、外はもう夕方から夜へと変わりつつあった。

千冬「……でも……。分かった。ならお邪魔させてもらう」

秋羅「……この診察室から出て奥に、俺のリビングに繋がってるから、荷物をもってまっけていろ」

千冬「分かった……。ありがとう秋羅兄さん」

彼女の合意を聞いた秋羅は診察室から出る。

診療所から外に出た秋羅は、懐から煙草とライターを取り出して喫煙を始めた。

秋羅「……」

彼をある人物の事を思い出していた。

秋羅「……春我」

自身の双子の兄、織斑春我。IS学園を卒業した後から未だ行方が知れない。

秋羅「…」

《回想》

秋羅「… 春我、お前卒業したらどうするんだ？」

秋羅は自分とIS学園の制服を纏った双子の兄に問いかけていた。

春我「んん？どうするって… まあ、そうだなあ… 1人ぶらり旅いく、どうだあ？（ドヤア）」

嬉々とした様相で質問を質問で返す彼に、秋羅は呆れた。

秋羅「… ドヤ顔で質問を質問でかえすなバカ。全くお前は…」

春我「おいおい、それが兄貴に対しての口かあ？泣くぞ」

秋羅「… 泣け勝手に。俺は知らん」

腕を組んで背後の木にもたれ掛る様に知らんふりをする秋羅。

春我「へいへいそうですか… まあ、実際決まってるんだ。それに…」

秋羅「ん？」

春我の雰囲気が変わった。

春我『……秋羅』

秋羅『……なんだ』

春我『もし……自分ってのが、この世界にとって……』

秋羅『?……春我?』

振り向く春我の顔は……。

春我『……なーんちゃって♪(ゲス顔)』

秋羅『……』

双子の間に冷たい風が通る。風「ハイハイ、通りますよー」

秋羅『……春我』

秋羅「……」

海を見ながら過去に浸り、煙草吸う秋羅は黄昏ているようにも見える。

秋羅「お前は今どうしている？俺も人の事は言えないが、連絡位したらどうだ」……バカが」

彼がそう呟いた瞬間、彼の視界に赤い光が見えた。

秋羅「ん？何だ」

その赤い光は大きさにサッカーボールと同じ位な物である。それが秋羅に目掛けて突っ込んできた。が、発行体は彼の一步手前で止まり、そのまま地面に着陸した。

秋羅「……何だ、こいつは」

すると……。

??? 「お前かあ、ハザードレベル100の化け物ってのはあ」

秋羅「……はあ？」

発行体が再び宙に浮いたと思ったら、形が変わり、その姿が何かの、

そうまるで蛇みたいな化け物が現れた。

エボルト「俺の名はエボルト。今日からお前の……相棒だ」

秋羅「……………」

とうとう出会ってしまった秋羅とエボルト。これがこの先、壮絶で凄まじい戦いのロードへと繋がる事を、この時の秋羅は、まだ分らない。

第貳章 略奪

エボルト「俺の名はエボルト。今日からお前の……相棒だ」

秋羅「……………」

前回、地球外生命体エボルトと邂逅してしまった織斑秋羅。その彼は唯淡々として、エボルトに話しかける。

秋羅「……エボルト、つと言ったな」

エボルト「ああそうだ。こっちは名乗ったんだ、そちらも名乗ってくれても罰は当たらんだろう？」

秋羅「……そうだな。俺の名は織斑おりむらあきら秋羅」

エボルト「秋羅……か、いい名前だな。それに俺のような存在と遭遇したにも関わらず、汗の一つも掻かず、怯え発狂せずにいるとは大物だなあ」

エボルトの言う通り、仮に此处で秋羅以外の第三者がエボルトと遭遇したならば、間違いなく驚愕、悲鳴、恐怖したに違いないだろう。そんな中、エボルトと秋羅の会話が続く。

秋羅「……お前、俺の事を、相棒さうぼうつと言ったな？」

エボルト「ああ言ったぞ」

秋羅「……いきなり相棒宣言されても此方が困る。それにお前が何物なのか聞いていない」

これにエボルトはバツが悪そうに「しまった」っと言わんばかりに語る。

エボルト「あー、そいつはすまん。まあ、端的に言うとなあ……俺は地球外生命体だ」

秋羅「……ようはただのエイリアンということだろうか？」

エボルト「まあな」

秋羅「……ならばそのエイリアンが何故に、相棒と抜かすのか聞きたいのだが？」

煙草を再び吸い始めながらに聞く秋羅。これにエボルトは若干イラツとしたが、これからのネメシスとの「ゲーム」に勝つためには目の前の男が必要なので堪えた。

エボルト「実はな……」

エボルトは話した。ネメシスとのデスゲームの事を……。ただし勝てばこの世界を滅ぼす事に関して言わなかった。言えば間違いなく断られる、そう思った。

秋羅「……」

エボルト「どうだ？このままだと地球はネメシスの奴の手によって滅ぼされるぞ。だが俺と組めば、奴に勝てる」

秋羅「……どうやってだ」

エボルト「この俺が持つパンドラボックスと、そしてこの……」

彼が取り出したるは……赤・青・黄色を基調とし、レバーのような物が付けられているベルトのようにも見える物体であった。

エボルト「この『エボルドライバー』を使えば、この世界でお前は無敵となる。どうだ？欲しくなったか？」

秋羅「……」

これに秋羅は暫く黙っていたが、喫煙していた煙草がもう無くなりかけていた為、吸い殻を足下に落として足底で擦り付けて火を消し、再度エボルトへ視線を向き直して……。

秋羅「……話しは終わりか？」

エボルト「……何？」

秋羅「……確かにそのエボルドライバーとパンドラボックスとやらが在れば、正に無敵なのだろう」

エボルト「ならあ」

エボルトが反論しようと食って掛かろうとするが、秋羅が手を前に翳して止める。

秋羅「……だが俺は貴様と組む理由、並びにメリットがない。そんな状況で貴様と組んでも何の意味がない」

エボルト「だがなあ「それに…俺には貴様が何かを重要な事を伏せているようにも見える」…例えば…？」

エボルトは内心、緊張しながら秋邏に問う。本来エボルトに感情と言う物が、心と言う物が無かった。しかし桐生戦兎のジーニアスポルトの力によって、彼の中で感情、そして心が芽生えた。

あの時は、自らの新たな変化に喜んだが、今になつては邪魔でしかない。

秋邏「… そうだな、例えば… “世界を滅ぼす”、とかか？」

エボルト「……………」

秋邏の指摘にエボルトは黙ってしまう。秋邏の、全て凍つかせられるような鋭い黒い瞳に睨まれて、何故かどうする事も出来ないど錯覚してしまう。

そんなエボルトに秋邏は喋り続ける。

秋邏「… 沈黙は肯定と見なす。そんな危険極まりない存在と手を組んでも、厄介事しか来ないのは明白だ。故に俺は断らせてもらう」

そう言つて秋邏はエボルトに背を向け、診療所に戻ろうとする。しかしそこへエボルトが待ったをかけた。

エボルト「… 待て」

秋邏「…………… 何だ」

エボルト「お前見た所、医者をやっているのか？」

秋羅「……それがどうした」

エボルト「それにしても、診療所付近には生活する人間はおろか建物すら無い。なのにこんな何もない土地に住むなど、変わり者だと思っただけであ……」

エボルトはわざと逆撫をするような口調で、自身に背を向けた状態の秋羅に問う。確かに彼の言う通り、周りに人口建造物がほとんど無いと言っている。

しかしエボルトは、ある事を思い出した。

エボルト「……いや、そういえば在ったなあ。建物が一件」

秋羅「……」

エボルト「飛んでいる途中見えたがあ……ここから近い所に教会があ……『黙れ』……ん？」

エボルトは秋羅の顔を見ると、その彼の表情が怒りに満ちていた。

秋羅「……次その薄汚い声を吐いてみる……コロスッ」

エボルト「……ほう」

彼の虚ろにも見える黒い瞳から放たれた殺意を受けた感覚が、エボルトの全身へと行き渡る。そうして秋羅は半ば会話を無理やり終わ

らせて、診療所に戻って行った。

彼の背を見つめているエボルトは1人呟く。

エボルト「…… ハザードレベル120…… か。まさかキレただけでこれほどに上がるとは、アイツは万丈以上の奴だなあ」

秋瀬「……………」

診療所に戻った秋瀬は、先ほどのエイリアン…… エボルトの事を忘れようと思いながら、診療所に戻り、そのまま奥に向かう。彼の診療所は、自宅と一体となっているのだ。

そして自宅のリビングに入った秋羅は、リビングに居るであろう千冬に声をかける。

秋羅「・・・ただいま、千冬。いるのか？」

「ああーもうちょっと待っててくれ」

どうやら彼女の声がキッチンから聞こえてくる。

秋羅「何故キッチンから声が・・・まさかアイツが料理を・・・いや無いか」

すると・・・。

千冬「すまない、キッチンを借りていたぞ。兄さん」

秋羅「……………」

彼の視界に現れた千冬は、エプロンを身に着けていた。そしてその表情は恥ずかしげである。

秋羅「・・・お前、漸く家事が出来る様になったのか」

彼の言葉・・・まるで彼女が今まで出来なかったと言っているような口ぶり。だが実は事実なのである。

彼女は今まで家事や炊事が全然ダメダメだったのだ。

千冬「む！その言い方は何だ兄さん！私だって女なんだぞ。料理な

んて出来て当然だ」

秋羅「… いやIS学園に居た頃、作って貰った奴が余りに酷かったのだな」

千冬「何を言っているんだ！その時、自分が食べる前に『大義の為の犠牲となれ』って言って、春我兄さんに無理矢理食わせて保健室送りした秋羅兄さんが言う言葉か！」

秋羅「… そんな事があつたな。懐かしい」

学園時代の懐かしい過去を思い出した。彼にとつて最初、居心地が良い物ではなかったが、自分と同じく学園に入れられた兄の春我、千冬やオータム、他にも自分と関わった人間が居たからか、それが良くなった。

彼がそれに浸っていると…。

千冬「兄さん、兄さんっ!!」

秋羅「ん？ああ、すまない。で？何を作ったんだ？」

千冬「え、あ… そのオムライスを… 作ってみたんだ」

彼女が指差す方へ見ると確かにオムライスがある、それもちゃんと2人分。

秋羅「… お前、一体どうやってこれほどまでに出来る様になったんだ」

これに彼女はモジモジしながら答える。

千冬「… えっと／＼／＼… 一夏や東や箒に教えて貰って… それで、ようやく／＼／＼」

秋羅「… そ、そうか。頑張ったようだな」

千冬「っ／＼／＼あ、ああ／＼／＼頑張った／＼／＼頑張ったんだ！ 兄さんに会える時に絶対にご馳走してあげたいって！」

顔を赤くしながらに言う千冬に、秋羅は彼女の頭に己の手を乗せて撫でてやる。

千冬「に／＼／＼兄さん／＼／＼」

秋羅「… いや、なんだ。頑張ったお前に撫でてやっただけのことだ。気にするな」

千冬「でも… 嬉しい、嬉しいよ… 兄さん／＼／＼」

秋羅に撫でて貰っている千冬にとって最早至福の時と言ってもいい。

秋羅「… それよりも食べよう」

千冬「あ！ ああ、そうだな！ 食べよう、兄さん」

秋羅「ああ」

そうして食事に入った2人。秋羅が食べる姿を見る千冬は、彼に味を聞いた。

千冬「どうだ？兄さん……美味しいか？」

秋羅「……ああ、美味しい。よく頑張ったな千冬」

彼の賞賛に千冬は素直に喜ぶ。

千冬「本当に!?「ああ」よかったあ……」

そうして無事に夕食は終わり、2人で皿洗いを一緒に始めた。その後ろ姿はまるで新婚夫婦と言っても過言ではない。

千冬「〜♪」

秋羅「……」

隣で皿を磨く千冬は上機嫌だ。対する秋羅は、淡々と皿を洗い食器乾燥機に置く。そんな作業の中、上機嫌だった千冬が真剣な表情で秋羅に問いかける。

千冬「……秋羅兄さん」

秋羅「……何だ」

千冬「明日案内してくれる場所に、兄さんがIS学園に来れない事情があるんだな？」

秋羅「……ああ、そうだ」

千冬「……そうか」

秋羅「……詳しくは聞かなくていいのか？」

千冬「明日案内してくれるなら、聞く必要はないさ。だが……」

秋羅「……どうした」

千冬「……明日、その場所に行つて、兄さんが来れない事情が私や学園側で解決出来るものなら、来てくれるか？」

彼女の眼差しが秋羅を捉え、離さない。

秋羅「……解決出来れば、の話しならば、な」

それに対して淡々と返して千冬の事を見ず、皿を洗い続けた。その後、後片付けを終わらした秋羅は、千冬に……

秋羅「……千冬、風呂沸いてるから、先に入れ」

千冬「え、兄さん、は？」

秋羅「……俺は後からでもいい。今日ここまで来るのに大変だったはずだぞ」

千冬「いや、でも……分かった、なら甘えさせて貰う」

彼女は、秋羅からバスタオルを借りたが、少しばかり黙って何かを思考し始めた。

秋羅「……どうした」

千冬「あの……ワイシャツとかあるか？」

秋羅「…何」

彼女は秋羅に、ワイシャツを要求し始めた。

秋羅「… 在るには在るが、何故だ？」

千冬「そ、そのう… 実は下着の替えは在るんだが、その…」

彼女が何を言いたいのか分かった。

秋羅「… お前まさか、下着の替えは在れど、今着ている服以外の変えは無いのか」

秋羅の問いに、彼女は無言で俯いたまま首を縦に振った。これには秋羅の反応は当然の溜息である。

秋羅「ハア… 千冬、何故にそういう…」

千冬「そのう… 別に一日だけ、旅館にでも泊まれば浴衣があると思っていたし、だから…」

秋羅「はあ… 分かった。ワイシャツ位寝間着に使っていい」

秋羅の了承に、千冬は驚きと嬉しさが入り混じった顔で聞く。

千冬「い、いいのか?! 兄さん!」

秋羅「… ああ、いいから早く入ってこいっ」

千冬「あ、ああ!」

彼女は嬉々として風呂場へと向かって行った。その様子を見届けた秋瀬は、片手で顔を覆う様にしながら三度目の溜息を吐いたのだ。た。

秋瀬「……ハア」

千冬「〜♪」

風呂場から上機嫌な鼻歌が聞える。その鼻歌の主は、隅々まで自身の体を洗っている。その彼女のプロポーションは、全て女性が羨み、嫉妬し、そして全ての男からすれば、性の欲望を掻き立てる程の魅惑かつ艶美で、引き締まった体、くびれたラインがハッキリして、そして女性の象徴とも言うべき豊かな胸。それらを兼ね備えた彼女は正に美の女神と言うべきだろう。

千冬「〜♪」

そんな彼女にとって想い人である従兄、兄のような人の家でこうして一緒に居るのが夢のような気分なのだろう。

千冬「〜♪……兄さん」

鼻歌を途中止めた彼女は呟く。

千冬「…明日、IS学園に行くって言って欲しい、なあ…」

そうして彼女は風呂場を後にし、洗面所にて彼から頂いたワイシャツを下着の上から着る。

千冬「あ…」

ワイシャツを着た瞬間、彼女は何かに気付いたようだ。

千冬「秋羅兄さんの…香りが、する」

そう彼女は自分が着た秋羅のワイシャツを…。

千冬「／／／」

彼女は少しの間、彼の残り香を堪能することになった。

千冬「(はあ／／／兄さん／／／)」

その時…。

秋羅「…千冬」

千冬「きゃ!!に、兄さんっ!?!」

洗面所の扉の外側から秋羅の声が聞こえてきた。それに反応し、可愛らしい悲鳴を上げる今の彼女は、ブリュンヒルデと呼ばれている世

翌日

木の上で寝ていたエボルトは、秋羅と千冬が診療所から出てくると同時に起き、2人が移動すると間違いないと見て尾行を開始する。これに2人は気づいていない。

エボルト「うーむ、まさか昨日見た『教会』に向かっているのか？」

しかし2人を尾行していたエボルトであったが途中野犬と遭遇し、追われて尾行どころでは無くなった。

エボルト「だあああつ!!なんなんだあー!!」

千冬「兄さん、何か聞えなかったか？」

秋羅 「… 気のせいだろう」

そんな小さな事をスルーし、千冬は秋羅の案内で、彼がIS学園に行けない理由が在る場所に向かっている。

千冬 「秋羅兄さん、その場所ってというのはどういう所なんだ？」

秋羅 「… 付いて来れば分かる」

そう言われ暫く歩く事20分。その目的地に着いた。

千冬 「ここは…」

彼らがたどり着いたのは、一件の教会であった。

千冬 「秋羅兄さん、ここって教会、なんだが…」

秋羅 「… ああ、教会だ。この教会に居る人たちが理由だ」

千冬 「え？それって… 「あー！秋羅センサーだあー！」… え？」

第三者の声が聞こえる、それもまだ幼い子供の声。千冬はその声が出た方角へ向くと…。

「「「「秋羅センサー!!」」」」

10人は居る子供たちが、皆秋羅に向かって走ってきた。

「秋羅先生、今日は早いね！」

秋羅「・・・ ああ」

「先生！俺ね、昨日先生に教えてもらった通りに問題を解いたら、100点満点だったんだよお！」

秋羅「・・・ そうか、やれば出来るじゃあないか」

「先生、私ね！昨日シスターと一緒にカレー作ったんだあ♪」

秋羅「・・・ ほう、凄いなあ。今度また作る時は、ご馳走してくれ」

「センサー、レナねえー、イイこにしてたよお」

レナという幼子が、ピョンピョンと跳ねて秋羅に構って貰おうとしている。

秋羅「・・・ おお、そうか」

秋羅がそう聞くと、レナという幼い少女はニコニコしながらに元気よく頷いた。

レナ「うん♪」

子供たちに接する秋羅は、何処となく優しい微笑を見せる。それを

千冬までもが温かい気持ちに包まれる。

そんな彼女に気付いた子供の1人が、声を掛ける。

「お姉さん、誰え？」

千冬「え？私は・・・」

「あー！分かったあ！秋瀬先生の恋人だあ！」

千冬「えっ!?ここここここ恋人お!!？」

「お姉さんキレイ！すっごい美人!!」

千冬「え?!いやあ・・・」

秋瀬「フツ」

子供の対応が初めてだろう千冬は、困惑しながらも傷つけないように一生懸命である。それを見ていた秋瀬は再び笑みを見せる。

そんな時、子供たちよりも遅く現れ、こちらにやって来る人物が1人。どうやら大人のようなようだ。

???「皆さん、秋瀬先生を困らしたらダメですよ」

レナ「しすたあー！」

トテトテと可愛らしい歩きで、シスターと呼ばれる修道女の服を着た女性に近寄るレナに、シスターは抱き上げて此方に近寄って来た。

シスター「織斑先生、おはようございます」

秋羅「… おはようございます」

千冬「お、おはようございます！」

秋羅に釣られるように、千冬も挨拶をする。それに対してシスターは千冬の顔を近くまで寄ってじっくりと見つめる。

シスター「ん〜？」

千冬「あ、あのう…。」

シスター「貴方は、もしかしてブリュンヒルデの、織斑千冬さんですか？」

千冬「あ、あのう、はい…。」

シスター「やっぱいい！あ！すみません、私は此処のシスターを務めている黒江愛紗といます」

シスター愛紗は丁寧に辞儀をし、それに千冬は慌てながらに頭を下げるのだった。

千冬「よ、よろしく！」

「え！お姉さん、あの世界最強の人?!」

「スゴオイ！」

「カッコいいー！」

千冬に対して、その場に居た子供たちは大いに騒いだ。だがそれを

秋邏によつて鎮められる。

秋邏「… お前達、いつまでもシスターや、お姉さんを困らすんじゃない」

「「「「はい」」」」

彼らが返事したのを確認したシスターが…。

シスター愛紗「それでは皆さん。教会の学び舎に戻ってください。織斑先生に宿題を見せなきやですよー」

「「「「はい」」」」

秋邏「… 出来なかった奴は居ない筈だな？もし居たら作文10枚の罰だぞ」

「「「「えー！」」」」

皆が叫ぶ中、シスターに抱っこされているレナが手を上げて声を出す。

レナ「レナもおー！しゅくだい、やったよお」

秋邏「… そうか、偉いぞお」

秋邏はレナの頭を撫でてやり、彼女も嬉しそうに頬を赤く染める。

レナ「えへへへ／＼／＼」

レナを撫でてやっていると、他の子供たちが秋羅に教室に行くよう急かす。

「先生！早く行こう！」

「勉強教えて！」

「早く早くう！」

秋羅「……分かったから……千冬すまない。終わりまで待っててくれ」

千冬「ああ！分かった。待ってるから、兄さん」

子供たちと共に秋羅が教会の方へ歩いて行く。それを見届ける千冬に、シスターから声をかけられる。

シスター愛紗「兄さんと呼んでましたが……」

千冬「ああ！いえ、私と彼は従兄妹なんです」

シスター愛紗「ああ！そうだったんですか。秋羅先生には、私達いつも助けられっぱで、本当に感謝してます」

千冬「そうだったのですか……あのう、ここはまさか……」

千冬の聞きたい事が分かったのか、シスターは複雑な表情で答えた。

シスター「はい……ここは身寄りのない子供たちの抛り所なんです。ここの子供たちは皆、親に捨てられたり、親を事故で失ったり……最近ではISの登場で、仕事を失い家族に酷い虐待をする父親から逃げるように、家出とかしたりする子もいます」

千冬「そう……なのですか」

この時千冬は、昨日秋羅に言われた言葉を思い出す。

『ISの所為で大勢の人間たちの人生が滅茶苦茶になって破綻してしまっている。それに関してお前と束は、どういう気持ちで居るんだ？』

千冬「……………」

シスター愛紗「あのう… 織斑さん？」

千冬「あ！いえ！何でも… ありません」

千冬の重苦しい表情に、シスターに抱っこされているレナが声をかける。

レナ「おねえちゃん」

千冬「…？」

レナ「にー」

千冬の前でニコツと明るい笑顔を見せるレナ。これに千冬は「え」っとなるが、次にこの少女はこう言う。

レナ「あのねえ、あきらセンサーがねえ、かなしいときはわらったほうがいいって、いってたよお」

千冬「兄さん……が？」

シスター愛紗「秋瀬先生、自分は余り笑わないのに、この子供には必ず言っているんですよ。ねー」

レナ「ねー」

シスターの話しに、千冬は微笑で言う。

千冬「ほんと……自分は余り笑わなくせしてそんな事を言うなんて、まったく……フフツ」

シスター愛紗「そうだ！良かったら秋瀬先生の授業風景を見てみま
すか？」

千冬「え？いいんですか？」

シスター愛紗「はい、全然構いませんよ。どうですか？」

シスターの申し出に、千冬は頷いた。

千冬「はい、是非！」

シスターと共に、千冬は教会の中に入る。

シスターの案内の中、千冬が口を開く。

千冬「何故医者である秋瀬兄さんが、子供たちの勉強を教えているんですか？」

シスター愛紗「実は……」

シスターは徐にレナを見る。

シスター愛紗「キツカケは、この子が酷い熱を出した時でした」

内容はこうだ。ある日、レナが突然高熱を出して苦しんでいた。シスターは近くの病院を駆け巡ったが、何処も診てくれる者など居なかった。そんな時、シスターが居ない間に他の子供たちが、教会の近くに秋邏が居る診療所の存在を知って助けを求め、それを聞いた秋邏本人も了承して治療用意を済ませてレナを助けた。

シスターが急いで戻って来た時には、熱がすっかり良くなった。そんな大事が収束した事で皆安心した後、此処の事情を聞いた秋邏が子供たちの授業を教えると提案し、シスターや子供たちはそれを受け入れた。

千冬「……そうだったのですか」

シスター愛紗「はい。今では皆、秋邏先生のお陰であんなに元気です……その前は余り陽気に外で遊んだりとか無かったです」

千冬「それは……子供たちが受けてきた過去の所為、ですか？」

シスター愛紗「はい、皆今とは違って、暗かったんです。でも！秋邏先生が来てからは……」

子供たちの事を語るシスターの瞳からは涙が出ていた。彼女が此処の子供たちの事を、どれだけ愛しているのかと言うのが千冬から見ても理解出来た。

話しをした後、千冬は秋邏が行う授業風景を見ていた。皆嬉々として聞いて頑張っている。それに秋邏の方も何処となく子供たちと接

しているのが嬉しい様に見える。

千冬「(兄さん、凄いな…。やっぱりこれでは一緒にIS学園には…。)」

こんな賑やかで幸せな光景を見せられては、秋邏を連れて行く事は出来ないと感じる千冬。その時、シスターが近寄って来た。

シスター愛紗「織斑さん」

千冬「は、はい」

シスター愛紗「あの、少し二人でお話したいので宜しいですか？」

千冬「え？でもレナちゃんは？」

シスターが先ほどまで抱っこしていたレナは今、自分の事をいつも面倒を見てくれる女の子たちの傍で、一緒に秋邏の授業に参加しているようだ。

シスター愛紗「レナはまだ小さい子ですが、いつも面倒見てくれる女の子と居るので大丈夫です。それに目の前には秋邏先生が居ますし」

千冬「分かりました…。兄さん、今からシスターと話が在るから」

秋邏「…。そうか、分かった」

秋邏の返答を聞いた2人は教室を後にし、シスターと共に教会へと向かった。そんな時、外には何者かの影が、どうやらエボルトでは無

い様だが……。

??? 「……」

その者、何処か仮面ライダービルドの世界に存在していたブラッドスタークに似ているが、違うのはコブラではなく、サメのような意匠を思わせるデザインを持った怪人。

黒いバイザーに覆われた頭部。

左手には嘗てブラッドスタークやナイトローグが所有していたトランススチームガン”

??? 「ふうむ、此処にアイツが……か」

その声はまるでテレビとかでよく聞くモザイク音声のように低い。次にバイザーが光り、怪人の視界に映る教会が、透けて中の状態が見える。そこには通路を歩くシスターと千冬。

??? 「いやあ、違うなあ…… うーん、ん？ おお♪居た居たあ♪」

千冬たちが来た方向へ視点を向けると、そこには子供たちと一緒に

居る秋羅であつた。それを見て謎の怪人は喜ぶ。

??? 「ハハハツ、みーけつた♪で、どうやってアイツを覚醒させるかだ。エボルトも居ないし…… ん？ そうだ！ さっきの…… フフツ」

何かよからぬ事を考えた怪人は、姿を消す。

千冬「それで…… 話しとは？」

シスター愛紗「あの、織斑さんが来られたのは…… 秋羅先生をIS学園に連れて行く為、ですよね……？」

私に、不安げに問うシスターに隠す事は出来ないと思ひ……。

千冬「はい…… その通り、です」

私も複雑な面持ちで答えた。

シスター愛紗「やっぱり、ですか。以前、貴方の弟さんがISを動かしたというニュースを見て、〃嘗ての秋羅さんの時〃と同じくIS学園に行くのは分かってました。きつと秋羅さんに誰かしらの接触が在るのも……」

彼女の言葉に直ぐに違和感が湧いた私は問いかける。

千冬「〃嘗て〃って……すみませんがシスター、貴方は秋羅兄さんとは、ここで出会ったのでは……？」

これにシスターは首を左右にゆっくりと振って答えてくれた。

シスター愛紗「いえ、実は私もIS学園を卒業した者です。貴方や秋羅先生とはクラスが違いますが……」

千冬「そうだったのですか!?!」

まさかシスターが私と同じIS学園のOGだったとは……。

シスター愛紗「はい。当時は遠目で見ていても、違う世界の人って感じで近寄れなかったんです……でも」

千冬「!」

シスター愛紗「私はそれでも、見ているのが好きだった」

それを語るシスターの表情は幸せに染まっている。それを見た私は「もしかしたら」と思い、シスターに尋ねた。

千冬「もしかして…シスターは、愛紗さんは、秋瀬兄さんの事を…」

彼女は私の問いに対して、肯定するように頷き答えてくれた。

「イメージBGM：仮面ライダー龍騎BGM：クライマックス10」（YouTubeに上がっていますが、この曲がどういう物かを知っている方は居ると思います。お手元に龍騎のCD-BOXがあれば、この曲をリピートで聞いてみてください）」

シスター愛紗「はい、好きでした。今でもその想いは消えていません…助けて貰ったんです。その時から」

千冬「助けて貰った？ 一体」

シスター愛紗「…私、小学生の時から剣道ばかりしていて、碌に友達も作れませんでした。それが中学でも続き、IS学園に来てもうでした。まあ、その当時の私がいけなかったのですけどね」

千冬「それはどういう…。」

シスター愛紗「強くなりたかった…誰よりも強く…強くなればきつと、周りが見てくれると勘違いしてたんです。それがいつしか歪に傲慢になって…それが周りの人たちにとっては嫌な物だったようで、直ぐに虐めの対象になりました。でもそこへ…。」

千冬「秋瀬兄さんが…助けてくれた」

シスター愛紗「はい。どうすれば良いか分からず自暴自棄になっていた私を、彼が救ってくれた。そして彼にこう言われたんです…。 ”辛い時こそ顔をあげるんだ。地べたに希望は転がってないぞ” っ て…。」

千冬「兄さんらしい…。」

シスターの話しに私は感慨深く聞いた。秋瀬兄さんはいつも何だかんだ言って、キツイ事や冷たい事を平気で言う人だけど、でも最後には必ず助けてくれた。周りに兄さんの事を恐がりする者が居て、兄さんの事を悪く言う者も居た。

でも…それでも兄さんは、決して誰かを助けられないなんて絶対じゃない人だった。そんな兄さんだから、私も好きになったんだ…きつと。だからシスターも…。

シスター愛紗「…でも」

千冬「シスター？」

彼女の表情が悲しい物へと変わる。

シスター愛紗「でももう、これ以上あの人を此処に縛り付けるのは良くないと言う思いが、いつしか心の片隅に生まれてました……だからもう、秋羅さんには広い場所に戻って欲しいんです」

そんなあ!!… 私は「兄さんにIS学園に来てほしい」傍に戻って来て欲しい」という思いを忘れて、シスターの言葉に納得出来ず食って掛かってしまった。

千冬「何故!? 貴方は兄さんの事を想い続けてきた筈?!なのに…!!」

しかしシスターの返答は変わらなかった。

シスター愛紗「いいんです…この沖縄で、この場所で、あの人と同じ時間を共に居られただけでも、十分幸せ過ぎる程の思い出を貰いました…… だからもういいんです」

千冬「兄さんは… 貴方の事を覚えて…?」

シスター愛紗「… きつと覚えていると思います。以前にも会いませんでしたか? って聞かれた時は焦りました。「どうして!? その時に言えば良かった筈?!」… ううん、もういいんです」

そんな切なそうに言わないで… どうして…。

シスター愛紗「… 織斑さん、いえ… 千冬さん」

千冬「はい」

シスター愛紗「秋羅さんは、私が説得します。そしてあの人とIS

学園に戻った時に、こう伝えてください」

千冬「はい、約束します」

シスター愛紗「私は……………」

その言葉を聞いて、私の心に深く辛い痛みが走る。私以上に、こんなにも秋瀬兄さんの事を想って……。

千冬「分かりました……必ず秋瀬兄さんに伝えます」

私は心から誓った。それにシスターは微笑を見せて「良かった」つ
と言って安心してくれた。

??? 「いやあー、正に聖母の鏡だねえー。思わず俺、涙が流れた
よおー、ガチで……ハハハッ」

2人「っ!？」

私とシスター以外の声が教会内に響いた。そしてその方へ向くと、人間ではない者が参列席に寛ぐ様に座って居た。

この時の私は知らない、秋瀬兄さんが背負う悲しき宿命を……。

??? 「感動的だったよおー、だが………無意味だ。フハハツ♪」

そして今……秋瀬兄さんの穏やかな日常が……終わろうとしている。

第三章 生誕

前回、千冬とシスターの前に謎の怪人が現れた所から、物語が始まる。

??? 「いやあー、正に聖母の鏡だねえー。思わず俺、涙が流れたよおー、ガチで…ハハハッ」

2人「っ!？」

千冬とシスター以外の声が教会内に響いた。そしてその方へ向くと、人間ではない者が参列席に寛ぐ様に座って居た。

??? 「感動的だったよおー、だが……………無意味だ。フハハッ♪」

千冬「シスター！私の後ろへ「は、はい！」貴様は何者だっ!!」

千冬はシスターを下がれせ、目の前の者に対して敵意を向ける。その彼女からの敵意に、怪人は立ち上がって彼女たちにゆっくりとじり寄ってくる。それに合わせて距離を離すつもりで千冬たちも通路口まで下がって行くが、怪人は距離を詰めてくる。

怪人「そんな怒つてると綺麗な顔が台無しだなあ。もう少し可愛げを見せても罰は当たらんと思うがねえ…」

千冬「残念だが、そういうのは惚れた男の前だけにしている。貴様のような薄汚い者には無いと知れっ！」

怪人「おうおう、凄いなえ、恋する乙女は最強つかあ？流石は世界最強の女……ブリュンヒルデの織斑千冬。だがあ……」

その瞬間、怪人は一気に距離を詰める為、ジャンプして襲いかかる。

千冬「シスター!!こっちへ!!」

シスター愛紗「は、はい!!」

千冬とシスターは全力で駆け出したお陰か、怪人の襲撃を躲して教会から通路へと走る。

2人が先ほどまで居た位置には怪人が立っており、その場が見事粉々になっている。そして二人の走る姿を確認した怪人は、不敵に笑い声を漏らしながらゆっくりと追跡を行う。

怪人「アハハハツ、大いに逃げればいい。ゲームは始まったばかりなのだからなあ……フフツ」

千冬「ハア、ハア……」

シスター愛紗「ハア、ハア、ハア……千冬さんっ！どちらへっ?!」

千冬「秋羅兄さんの所に行きます！この騒動にまだ気づいていない

筈、一刻も早く伝えて、皆で此処を逃げましょう!!」

シスター愛紗「は、はい!!」

千冬とシスターは全力で走り、秋瀬と子供たちが居る教室まで向かっていった。そんな中、千冬はシスターの代わりに自分が殿で彼女を前へ行かせて、背後から怪人が追って来ないか、走りながら振り向いて確認する。どうやらまだ追いついていないようだが……。

千冬「(まだ追いついていない。だが何故だ?先ほどの跳躍を見た限りでは、奴の方が早いと思っていたが……)」

……
そう。千冬の見解は正しい……とその時である。

??? 「みーけったー♪」

千冬「な?!がっ!!」

シスター愛紗「っ!千冬さんっ!!」

怪人「あらあ、俺から逃げ切れると思ってた所、ごめんね……
フツッ♪」

突如、怪人が通路の窓から割って入り、素早い動きで千冬に何の抵抗もさせずに、彼女の首を片腕で鷲掴んだ。これには苦悶に満ちた表情を見せる千冬である。

しかしそんな状況に居る筈の千冬は、シスターに逃げるよう告げる。

千冬「シスターあー!!にげてえ!!」

シスター愛紗「そ、そんなあ!!ダメです!!貴方を置いていけませんっ!!」

しかしシスターはそれを拒む。やはり修道女をしていた彼女に目の前の命を見捨てる事は難しい。

千冬「貴方が逃げて…ぐう!：秋羅・兄さんに…伝え…がっ!!」

シスター愛紗「千冬さん!!」

怪人によってどんどんと真面に喋る事が困難になってきたようだ。その証拠に、彼女の表情が徐々に青くなってきた。今にも息を引き取りそうだ。

それを怪人は面白可笑しく口を開く。

怪人「あらあらあwww?どうしたのwww?おいおいwww
天下のブリュンヒルデとも在ろう者があwww、まさかこの程度で死ぬのかあwww?」

千冬「き…きさ…まあ…！」

苦しみながらも尚も敵意は消えておらず、怪人に屈しない証なのか鋭く睨む。しかしそれを嘲笑うように怪人は見下してくる。

怪人「確かあゝ、男と女が戦争をすれば、三日で女が勝つんだろうwwww?それほど強いんだらうwwww?どうしたあwwww?まさかISが無いと何も出来ないのかあゝwwww?おいおいww、そりやあ無いよおwwww」

千冬「があ…ハア…ハア…あ」

今にも死にかけの千冬、その時…。

シスター愛紗「はあああああああああああああああつ!!!」

怪人「ん?おつとお!!」

シスターが近くに在ったモップで武器として使い、怪人に攻撃する。その奇襲に怪人は回避したが、その動作に一瞬気を取られて千冬の首を絞める力を弱めてしまう。

そのお陰で千冬は間一髪助かった。

千冬「ガハッ!ごほっ!…はあはあはあ」

シスター愛紗「千冬さん!!大丈夫ですか?!」

千冬「はあはあ…は、はいっ…ありがとう」

シスター愛紗「良かったあ…千冬さん、私の後ろへ！」

シスターは千冬に背後にいるよう指示し、彼女は情けないと思いがらも後ろに下がった。それを確認するシスターが怪人に敵意を向け、モップを竹刀代わりに構える。

怪人「ありやりや、怖いねえ、シスターwwwwww」

怪人の態度を無視し、シスターは尚も千冬を守る様に怪人と対峙する。

シスター愛紗「黙れ外道!!貴様に掛ける慈悲は無いと知れっ!!」

怪人「おう!こっわっ!」

シスター愛紗「いぎ、参る!!はあああああつ!!」

シスターは一気に間合いを詰めて鋭く早い攻撃を仕掛ける。

シスター愛紗「ハア!!でやあ!!でえい!!」

怪人「おうおう、中々に鋭い剣捌きい、いいねえwww」

シスター愛紗「その余裕が命取りだツ!!でやあ!!」

シスターの攻撃に、怪人は紙一重で躲し続けるが壁に誘導され、最早身動き不可能。

怪人「あら？」

シスター愛紗「すきありい!!! ハアアアアアアアアアアアアアアアア——っ!!」

シスターの渾身の一撃が放たれる……………
が。

怪人「……………バカが、この劣等種が」

その次の瞬間怪人の右手に持っていたのは、バルブが付けられた奇妙な片手剣……スチームブレード。それをもってシスターのモツプを真つ二つに切り裂く。

千冬「っ!?!なんだと?!」

シスター愛紗「そ、そんなあ……!」

2人は驚愕するが、その間に怪人はシスターに近寄って命を奪うモーションに入る。

??? 「それを貴様が決める権利はないっ」

怪人「なにっ!?グハッ!!!」

怪人の横から何者かが襲いかかる。それに対応できず、蹴り飛ばされて地面に転がってしまふ怪人であった。

シスター愛紗「え？」

千冬「あ… あき… ら… 兄さん」

2人の視界に現れたのは、秋羅であった。

シスター愛紗「秋羅… さん」

秋羅「… シスター、離れてください」

シスター愛紗「で、でも！子供たちは?!」

秋羅「… 子供たちは、外に避難させてます。だから二人も逃げてください」

千冬「に、兄さんっ！そいつは普通じゃないんだっ!!いくら兄さんでも危険すぎるっ!!」

千冬は秋羅に駆け寄って、共に逃げる様促す。が、それを秋羅は断った。

秋羅「… ダメだ。こいつは間違いなく、俺たちを殺すまで諦めない」

秋羅の言葉に答える為、怪人は起き上った。

怪人「ああ、その通り。君らを殺すまでは諦めないよ〜？」

秋羅「…：… 貴様、何者だ」

秋羅は射殺するような眼で睨みながら、怪人に問い質す。それに怪人は先ほどの殺気から、再びふざけた口調で自身の紹介をする。

怪人「おう♪これはすまないねえ、俺の名は… デイザスター。英語で「災い」を意味する、以後よろしく♪ま、君が生きていたらだけどねwwwwww」

秋羅「… ふざけた奴だな。ただの糞な変態野郎だろうが」

秋羅の罵倒に困ったといった感じで、怪人……デイザスターは答え
た。

怪人↓デイザスター「侵害だなあ…… まあ、行動変更。狙いは元か
ら君だったからなあ」

秋羅「……何？」

デイザスター「まあ、今から君が俺の相手を務めるってことさ。で
ないと、後ろの彼女たちを…… フフツ」

スチームブレイドを千冬とシスターに向けて不敵な笑い声を漏ら
す。それに対して秋羅は明確な殺気を放ち……。

秋羅「……さっさと来い、屑が」

デイザスター「いいねえ♪そういうの嫌いじゃない」

デイザスターに挑む体制に入る。そしてそのまま秋羅は千冬たち
に逃げるように告げる。

秋羅「……千冬、シスター、2人はさっさと行けっ」

千冬「兄さんっ!!」

シスター愛紗「ダメです!!秋羅さん!!一緒に逃げてえ!!」

秋羅「……逃げた所で無駄だ。こいつは俺を狙っている様だし、こ
のままだと外に居る子供たちにも危害が及ぶ。それならば此処で此

奴を足止める必要がある。大丈夫だ、必ずそっちへ合流する……約束だ」

千冬「兄さん……」

そう安心させるかのように千冬に向けて微笑を見せる秋邏。そして直ぐにその顔が険しく変わり、彼の声が木霊する。

秋邏「行けっ!!」

千冬「兄さん……くっ、シスター!!行きましょう!!」

そう千冬は噛み締めながら、シスターの手を掴みその場を後にしようとする。そんな千冬に連れてかれながらにシスターは涙ぐみ叫ぶ。

シスター愛紗「秋邏さあんっ!!!」

2人が逃げて行くのを確認した秋邏は、再びディザスターに対峙する。

ディザスター「いいねえ、カッコいいねえ。正に正義のヒーローって奴だあ♪ハハッ♪」

秋邏「……ミッ◯ーマウスみたいな笑い方はやめろ。吐き気がする」

デイザスター「ええ、俺これ気に入ってるのになあ……
まあ、いいか。始めよう」

秋羅「……」

無言で両の拳を構える秋羅。それに対するデイザスターはスチー
ムブレイドを携えて、いつでも攻撃を行える体制に入る。

デイザスター「俺の期待通りに動いてくれよお?…… 秋羅」

秋羅「気安く、俺の名を…… 呼ぶなあ!!!」

秋羅が飛び膝蹴りを繰り出した瞬間、戦いが始まった。

秋邏がディザスターと戦闘を行っている中、エボルトは漸く教会にたどり着いた。

エボルト「はあ… はあ… あの糞犬に、この俺と在ろう者が… ん？何だ」

教会の外に避難している子供たちの姿を確認する。

エボルト「何だあ？つて、一度身を変えて状況を探るか」

このままでは自分の姿を見られるのは不味いと感じたのか、エボルトは自身の体を液体状に変えて、バレない様に子供たちの近くに寄る。

エボルト「秋邏ここが奴が関わっている教会かあ、ん？だが待て。何故教会の外に子供たちが居るんだあ？それにこの子供たちの表情… 随分不安げじゃあないか。ん！教会の中から誰か出て来たぞ。あれは、今朝秋邏と一緒に居た女と、もう一人は此処のシスターか？一体何であんな逃げるように… 何か在ったのか？」

そのまま子供たちと合流した千冬とシスター。

「シスター!!」

シスター愛紗「皆！無事だった?！」

「「「「はこ二!」」」」」

千冬「良かったあ……」

子供たちの無事な姿を確認した千冬は、皆の顔を見ていた……が。

千冬「あれ?… レナちゃんは?！」

シスター愛紗「え?!皆!レナは何処行ったの?!」

「え?!さっきまで居たのに!!」

「そう言えば、さっきまで〃秋瀬先生が居ないって〃ぐずってました!まさか……」

子供たちの話しに、千冬とシスターは青ざめながら教会の方へ向く。きつとレナは秋瀬を探す為、幼い体で入って行ったに違いない。

シスター愛紗「… 千冬さん、子供たちをお願いします!」

千冬「待つてください!!危険です!!私が行きます!!ですからシスターは此処で……!」

シスター愛紗「レナは私にとって大事な子供の1人なんです!!私がお助けに行きますっ!!」

千冬「待つてっ!!シスター!!」

千冬の制止を無視して、シスターは衝動的に教会の方へ走って向かったのだった。これに放っておけないと千冬も後を追いかける為、子供の1人に自身の携帯電話を貸す。

千冬「これで警察に電話するんだっ!出来るな?」

「うん!!」

「でもお姉さんは?!」

千冬「私はシスターとレナちゃんを助けに行くっ!」

そう言い残し、千冬もまた教会の方へ走って行く。これを見ていたエボルトは……。

エボルト「(どうやら、今秋邏はとんでもない状況に居る様だ。だが一体、どんな……っ!!まさかネメシスの奴!!先手を討って来たのか?!糞があ!!何がルールだあ!!ふざけるな!!漸く見つけた奴を此処で殺されて堪るかあ!!!)」

エボルトも教会の方へ向かう為、子供たちや千冬にバレないように教会内部へと侵入するのだった。

その頃……教会内部では……。

秋邏 「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオつ!!!」

秋邏は素早い動きからの1、2と、パンチを繰り出し、デイザスターにそれを躲された瞬間の擦れ違いからの回し蹴りを食らわす。

デイザスター 「がぐっ!!ぐうっ!!」

これが見事顔面に直撃し、デイザスターは壁に激突する。しかしこの状況、今とてもあり得ない形で白熱している。生身の人間が、怪人相手に素手で圧倒しているのだ、これは異常どころか尋常ではない。

壁に激突し、少しよろめくデイザスターに秋邏は反撃の機会など

形勢逆転……デイザスターは秋邏を見下ろす。

デイザスター「まさかこれ程までに、お前は成長していたとはな……流石だ秋邏」

秋邏「ぐっ…… はあ…… はあ…… 何を……？」

デイザスターが吐く言葉の意味がサッパリ理解出来ずに居る秋邏は、自分の体を支え何とか立ち上がる事と、どうすれば良いかとしてか頭に入っていない。

デイザスター「お前は自分の価値というものを、まだ理解していないのか…… ならば、俺と来い秋邏」

突然、デイザスターが秋邏に手を差し伸べる。このいきなりの意味不明な行動に、秋邏は理解に苦しむ。

秋邏「はあ…… はあ…… なんだと……？」

デイザスター「お前は本来、こんなくだらん場所に居るべき者ではない。お前はもつと最上位の存在なのだ！だから俺と来い秋邏！そして共に世界を滅ぼし、「ニューワールド」を築こうじゃあないかあ！！」

両腕を天に掲げる様に高らかに豪語するデイザスターに、秋羅は……。

秋羅「……そうか、だったら俺の答えは……これだ」

デイザスター「……ほう？」

デイザスターに見せた答え……それは奴の視界にハッキリと見える様に拳を翳し、中指を突き立てる。

デイザスター「……」

秋羅「ハッキリ言おう……糞喰らえ」

デイザスター「……」

デイザスターは秋羅に対して、無言で顔目掛けて強烈な蹴りをお見舞いする。そしてそのまま仰向けになったところを片足で踏みつけ抑え込む。

秋羅「があっ!!がはっ!!」

デイザスター「調子に乗るなよ？分を弁えろ」

秋羅「が…… あう…… はあ…… はあ……」

デイザスター「…… はあ、もういい。ガツカリだよ、秋羅」

そしてデイザスターが秋羅の目の前でトランスチームガンを構え、その銃口を自分の足下で苦しんでる秋羅の顔面に向ける。

秋羅「ぐっ!!」

その時である。

「あきらみせんせー、どーおー?」

デイザスター「ん?」

秋羅「なっ!?!レナっ?!」

レナ「あ！あきらせんせー、いたあー♪」

そこに現れたのは、あどけなく無邪気に秋羅の方へヨチヨチ歩きで向かってくるレナであった。それを見たデイザスターは不敵な笑い声を吐く。

デイザスター「フフツ… 秋羅、今からお前に “最悪の贈り物” をあげよう。絶望という贈り物を… ハハツ♪」

奴の言葉に直ぐに秋羅は理解し、自分の体を尚も踏みつけて押さえつけてる足を退かそうと猛烈に足掻く。

秋羅「やめろお!!どけえ!!やめろおー!!!」

デイザスター「ム・リィー☆じゃあお別れだあ♪」

デイザスターはトランスチームガンにボトルを差し込む。

シャーク
Shark!

秋羅「よせえーっ!!」

レナ「せんせー?」

デザスター「ハハッ♪」

レナは幼いなりに感覚で理解したのか、自分に銃口を向けるデザスターに対して後ずさる。が、最早間に合わない。

秋瀬「レナア—っ!!逃げろお——っ!!!」

デザスター「ハハッ♪…死ね」

STE^スAM^{チー}BRE^ムAK^ブ!!SH^{レイ}AR^クK!^ク

そして、トランスチームガンの銃口から放たれたエネルギー状の弾丸が吸い込まれる様に、レナ目掛けて一直線に向かっていく。

…
…
…
だが。

秋羅「え……？」

ディザスター「はあ？」

千冬「はあ！はあ！あ!!……え？」

レナ「……しすたあ？」

レナは無事だった、なぜなら……。

シスター愛紗「……っ……よ、かったあ……れ……な……怪我は、ない？」

エボルト「たくつ、何だつてこの俺がこんなコソコソと……これも全部、ルールとか言っておきながら卑怯にもこつちがまだコンビを組む前のパートナーを潰しにきやがったネメシスの糞の所為だ!!」

そう愚痴りながらも目標の場所に近づきつつあった。そして……。

エボルト「ふうー、何とか気づかれず侵入できたが……ん？ありやあ……」

現場にたどり着いたエボルト。しかし彼の視界に映ったのは……。

【イメージBGM：仮面ライダー龍騎BGM：クライマックス10】

デイズスターの攻撃で瀕死の重傷を負ってしまったシスターに駆け寄り、声をかける秋瀬たちが居た。

千冬「シスター!!」

レナ「しすたあ！しすたあ！」

シスター愛紗「はあ… はあ… はあ…」

秋羅「シスター！だめだあ!!しっかりしろ!!」

秋羅に抱き抱えられたシスターは、もう虫の息であったが、しかしレナの無事な姿に苦しみながらもそれ以上に嬉しさが勝ったように笑みを溢す。

シスター愛紗「レ、ナア… よかったあ… 無事で…」

レナ「しすたあ！」

幼いレナには今のこの状況に付いて来れないという思いで涙が溢れていた。

シスター愛紗「だい… じょう… ぶだからね… もう…」

シスターなりに心配を解こうと伝えようとするが、それでももう体が思う様に動かない。そんな彼女の姿に、千冬もまた涙を堪えきれない。

千冬「シスター… つ… どうして… こんなあ!… ううつ…」

シスター愛紗「はあ… つ… ち、ふ… ゆ… さん…」

千冬「シスター!!」

自分と呼ぶ声に千冬は彼女の手を取る。

シスター愛紗「ちふ…ゆ、さん…どうかこの子を…」

千冬「シスタア……」

レナ「しすたあ！」

シスター愛紗「おね…がい……」

彼女の頼みに、千冬は涙を流しながらもレナを抱き寄せる。それでもレナは未だ泣き止む事が出来ず、尚もシスターに叫ぶ。

レナ「しすたあ！レナもいつしよにいるっ!!」

シスター愛紗「ごめん…ね?…レナと一緒に…いられ…なくて……」

レナ「しすたあ！」

シスターはそのまま秋羅へと視線を変える。

シスター愛紗「あき…ら…さん……」

秋羅「っ！シスター!!」

シスター愛紗「秋羅…さん…どうか…憎しみで…心を…すてないで……」

彼女は僅かな力を振り絞って、自身の手を秋羅の頬に触れる。秋羅

はその手を強く掴み、決して離さない。

秋羅「だめだ…」

シスター愛紗「秋羅…さん…」

秋羅「だめだっ!! やつと! やつと君は此処で、子供たちと言う希望を見つけたばかりなんだぞ!? それなのにこんな…!!」

彼の言葉に、千冬は気づいた。

千冬「兄さん… やっぱり彼女の事を覚えて…」

秋羅「〃辛い時こそ顔をあげるんだ。地べたに希望は転がってないっ!!」

彼の悲しい叫びに、シスターは嬉しそうに言う。

シスター愛紗「やっぱり… 私… のこと… 覚えて… て… くれて… たんだ…」

彼女に答えるかのように、秋羅は何度も首を縦に強く振る。

秋羅「ああ!! だからこれからも… ここでえ!! 愛紗あ!!」

シスター愛紗「うれ… しい… あき… ら…」

秋羅「っ！」

千冬「シスタア!!」

レナ「しすたあ！」

人の命とは何と儚いのか。

人の命とは何故こんな単純に失うのか。

人の命とは何故こうも理不尽に奪われるのか。

彼女はただ愛する者を救おうとしただけなのに。

彼女はただ誠実に、何処にでも居る優しい女性だと言うのに。

彼女はただ心に、仕舞っていた嘗ての淡い想いを胸に抱いて居ただけだと言うのに。

彼女はただ… 幸せに生きようとしていただけだと言うのに…。

レナ「ぐす…… おねえちゃん？」

千冬はレナの顔を見て、自分が如何に冷静さを無くしていたか気づくが、秋邏に共に逃げる様告げる。

千冬「だったら兄さんも逃げよう!!このままでは兄さんも死んでしまおう!!」

千冬の提案に、秋邏は静かに断る。

秋邏「…… いや、俺はコイツを野放しには出来ない」

千冬「兄さんっ!!」

秋邏「安心しろ…… こいつを倒す方法が一つだけある」

千冬「兄さん……」

悲しみの表情を浮かべる千冬。レナもまた千冬につられてまた涙を流しそうになる。

レナ「ぐす…… せんせー」

秋邏「信じて待ってろ…… 千冬」

この状況下で見せる彼の笑みに、千冬はもう秋邏の言葉を聞いてレナと共に脱出するしかない。故にレナを強く抱き上げ、立ち上がる。

千冬「兄さん…… 必ず、帰って来てくれっ!」

レナ「せんせえ!!」

そう言い残し、彼女はレナを連れて脱出する。もう此処に残っているのは秋羅とデイザスター……。

秋羅「……」

デイザスター「ハハツ♪秋羅あ♪悪い事は言わない。今からでも俺と共に来い」

秋羅「……言った筈だ。糞喰らえ」

デイザスター「……はあ、仕方ない。やはり殺してでもお前を連れて行くしかないか……それに『方法』って奴も無そうだしなあ」

秋羅「……」

デイザスター「この状況で、俺に勝てる可能性なんて『在るぞ』ん？誰……貴様」

デイザスターのセリフに割り込む第三者の声。

秋羅「……やっぱり来ていたか」

秋羅とデイザスターの視界に現れたのは蛇のような怪人……エボルトであった。現れた彼はそのまま、シスターの亡骸を静かに置いた秋羅の隣に並ぶ。

エボルト「……」

秋羅「…… てっきり奴に付くのかと思ったんだが……」

エボルト「冗談言わんでくれ。俺にだって吐き気を催す程の物があ
る」

秋羅「…… それは？」

エボルト「俺以上の外道、ゲス」

秋羅「…… フツ、そうかい」

互いの顔を見ずに喋る2人。その中でエボルトが切り出す。

エボルト「正直に言おう。ネメシスとのゲーム、勝った方が地球を
滅ぼしても良いと言う権利がある」

秋羅「…… そうかい」

エボルト「…… だが」

秋羅「？」

エボルト「もう…… それがどうでもいいと思えてきた」

秋羅「お前……」

エボルト「… 秋羅… お前がもし、その気が在るのなら言っておく、俺の力は全てを滅ぼす。その所為で世界中がお前を敵と見なす可能性が… 「だとしても… 俺は止まらない」… 秋羅」

秋羅「… 俺は別に正義のヒーローを気取るつもりや、皆を守るなどと言った糞な綺麗事を言うつもりも無い」

エボルト「… 秋羅」

秋羅の瞳には何の躊躇いや迷いと言った物が無く、在るのはただ一つ。それは…

秋羅「この世に、悪でしか殺せない悪が在るのなら… 俺はそれら全ての悪を皆殺しにする邪悪と化すっ!!」

ただ眼前に居る「悪」を殺す為に… 秋羅の覚悟を見たエボルトは、最早語るまいと決意する。

エボルト「秋羅、今から俺はお前の体に同化する。そして俺の力、パンドラボックス、フルボトル全てをお前の好きに使え」

秋羅「分かった」

エボルト「行くぞ… 秋羅」

秋羅「ぐっ!!」

エボルトは秋邏の体の中へと溶け込こみ、その影響なのか、秋邏の髪が白髪と化し、両眼も真つ赤な血のように染まっていた。それに對してデイザスターは喜びだした。

デイザスター「おー！遂に!!」

秋邏「……………行くぞ」

その瞬間、秋邏の手に赤・青・黄色を基調とし、レバーのような物が付けられているベルト……エボルドライバーが在る。そして一気に腰に翳した。

エボルドライバー
E V O L D R I V E R !!

エボルトの渋い声が響くと、同時にアジャストバインドによつて巻かれる。

そして次に、蛇のマークが入った赤いボトル……コブラエボルボトルと、歯車のマークが入った黒いボトル……ライダーエボルボトル。二つのボトルを上下に振り、振ったのち蓋の部分……シールドイングキヤップを回して、それらをドライバーのボトルスロットへと差し込む。

COBRA!! RIDERSYSTEM!!

EVOLUTION!!

秋羅 「……」

秋羅は無言でベルトに取り付けられているレバー……エボルレバーを回し始める。クラシックを感じさせるBGMが其の場合全体に流れ、その次、秋羅の前後に、高速ファクトリー展開装置……エボルモジュールが展開され、更にレバーの回転を利用してボトルをシェイクし、ボトル内の物質……トランジエルソリッドをドライバーに取り込み、そこから変身用のボディが形成される。

そして……。

Are You Ready?

秋羅「……………」

それに答える前に振り向き、後ろにあるシスターの亡骸を見つめたが、それからまた前へと向き直し……………。

秋羅「…変…身」

彼が口にした時、前後のハーフボディがスライドして秋羅の体と一つに重なり、新たな姿に形成される。

COBRA! COBRA! EVOL^エCOBRA^ボ!!
ハッハッハッ!
ハッハッハッ!

EVOL… PHASE I

複眼は血のように赤く、形状は口を開き舌を出して蛇の横姿を写しだしている。

その禍々しい程の戦士は周りの炎をモノともせず、ゆっくりとだが確実に殺すべき対象の前まで力強く歩き、デイザスターの近くまで立ち止まる。そして、その凶戦士・仮面ライダーエボルの姿に、迎え撃つデイザスターはこう言った。

デイザスター「ハハッ♪… 生誕、おめでとう♪… エボル！」

仮面ライダーエボル「……………」

今此処に最凶の凶戦士の戦いが、始まる……………。

第四章 闘い

【イメージBGM：仮面ライダーアマゾンズ主題歌：Armor Zone】

凶戦士： 仮面ライダーエボルの姿に、迎え撃つデイズスターはこう言った。

デイズスター「ハハッ♪… 生誕、おめでとう♪… エボル！」

仮面ライダーエボル「……………」

周りは既に炎に包まれ、今にも2人を呑みこもうと勢いよく立ち昇っている。その中で対峙する形で並びたち両者。

既に闘いは始まっている。そこへデイズスターが仕掛ける。

デイズスター「じゃあ♪… 始めよう、エボルウ!!」

デイズスターの鋭く素早い拳がエボルの顔面に放たれた、が…………。

ガシッ!!

デイズスター「っ!!」

仮面ライダーエボル「……………」

エボルは寸前で、余裕をもって片手で受け止めたのだ。これにデイズスターは尚も拳に力を込めるが、何の効果は表れない、寧ろ余計奴

の拳を捕えて離さないエボルの握力が更に増して、それがデイザスターを苦しめる。

デイザスター「ぐっ!!があ!!なんて…力、だっ!!」

仮面ライダーエボル「……」

自身の目の前で苦しむデイザスターの姿にエボルはどうとう……。

仮面ライダーエボル「…どんな気分だ? デイザスター。先ほどまでの余裕を保つ事が出来ないってのは?」

デイザスター「っ!?!お前は!!あ、秋邏!?!」

仮面ライダーエボル「……」

嘗て、エボルトが憑依した石動惣一の時は、エボルトが彼の意識を封じるなどして自らが行動していた。それはまた変身時でもある。が、今回…秋邏という存在と同化した場合は違った。何故か?それは、エボルトが秋邏と同化したのにも関わらず、全ての権利を秋邏に渡して、自身は彼の体内でサポートするという事にした。

そのエボルトが、秋邏の頭の中に話しかける。

エボルト『どうよ秋邏!これがお前さんの力…仮面ライダーエボルだあ!』

これに秋邏は、デイザスターの拳を握りしめながら同じく頭の中で会話する。

秋羅『… まあ、確かに力は強いのだろうか』

エボルト『おいおい！ 力は〃ってなんだ！ 力は〃って！』

秋羅『… 未だどう言った能力かは分からない中での戦闘だ。当然だろう』

エボルト『まあ、確かに』

秋羅『… そんなことより、奴を… 狩るぞ』

エボルト『了解だ、相棒♪』

秋羅『… ちゃっかりしてやがる』

呆れ声を漏らす秋羅。そんな彼にエボルトは真面目な声を発した。

エボルト『… 秋羅』

秋羅『… なんだ？』

エボルト『今は何も難しい事は考えるな。ただ、己の中の怒りと憎しみの全てを吐き出せ。それらをずっとこれから引きずるのは、あのシスターの願いではないだろう…？』

秋羅『……………』

幼い命を庇って死んでしまったシスター愛紗の、彼女の安らかな顔

デイズスター「っ!!」

「またも、デイズスターの攻撃を難なく再び掴んで防ぎ、今度は蹴りのラッシュをくりだす。」

仮面ライダーエボル「ヌオオオオオオーッ!!」

的確に蹴りという蹴りが、まるでゴールネットに吸い込まれるサッカーボールかのようにデイズスターの体へとヒットする。その内の一撃が奴の鳩尾（腹の上方中央にある窪んだ部位）に見事クリンヒットし、堪らず地面に膝をつき苦しむ。

デイズスター「うが… があああ… ああッ!!」

仮面ライダーのパンチ、キックの威力はどれもが15t以上の物ばかりで、このエボルに関してはパンチ力58t、キック力63tという初期形態にしては中々の物である。（公式のデータです）

そんなエボルの攻撃を、まともに食らってしまったデイズスターは尚も苦しむが、それでも何とか立ち上がる。

デイズスター「はあ… はあ… はあ」

仮面ライダーエボル「…」

それに対して、ただ攻撃してくるのを待っているように悠然と構えているエボル。そして片手を前に翳してデイズスターにハッキリ見えるように手招きする。

仮面ライダーエボル「…」

デイズスター「… き、さまあ…」

そのサインに自分がエボルに嘗められ、見下されてるのが分かる
と、デイザスターの怒りが有頂天になり理性を捨てて、暴れ狂うよう
な連続攻撃をくりだす。

デイザスター「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
!!!」

一撃一撃が強力な殺傷力を高められた物ばかり。しかしどれもエ
ボルの体に直撃することはなく、虚しく彼の片腕一本で防がれて全く
通じていない。どころか相手にもなっていないようだ。

仮面ライダーエボル「…この程度、か」

ここまでの流れで、自分とデイザスターの力量差が理解できた。そ
れでもエボルは、簡単に戦いを終わらせるつもりはない。何故なら彼
の胸中は怒り、憎しみ、憎悪、狂気によって染まって居ると言っ
て過言ではないのだ。目の前で大切な者が殺されたのに赦してやるよう
な、お人好しのバカがこの世の何処に居ようか？

エボルト『言っただろう？無敵だと』

秋羅『…だとしても、簡単には終わらせない』

エボルト『…秋羅』

今の秋羅を止められる者はこの場には誰も居ない、彼は今、激情に
駆られ闘争本能のみ戦う野獣。それを体現するかの如く、素早く容赦
のないパンチ。

デイザスター「がはっ!!ぐはっ!!がっはあ!!」

仮面ライダーエボル「ウゝっ!!」

デイズター「調子に乗りやがってえ!!」

仮面ライダーエボル「ぐはっ!!」

次々と体中に裂傷と、その傷に纏わりつくように氷が現れる。その所為で氷の冷たさと、斬られたダメージがエボルから体力を徐々に奪っていく。

仮面ライダーエボル「…はあ…はあ」

デイズター「随分と痛めつけてくれたねえ、秋羅あ」

仮面ライダーエボル「……」

デイズター「この際しようがないよねえ。『あの男』に殺されたくないしな、それに殺したしても死体を回収すればいいし」

デイズターの言葉に奇妙なワードが出て来たのを、エボルは聞き逃さなかった。

仮面ライダーエボル「…あの…男？」

デイズター「ハハッ、君が気にする必要はない、よお！」

デイズターはスチームブレイドとトランススチームガンを連結させて、ライフルモードへと形を変える。

RラIイFフLルE
MモOドDドE!!

FULL BOTTLE!!

連結させたトランスチームガンをエボルに狙いを定め、そのまま一
気にトリガーを引く。

デイズター「グツバイ♪EVOL♪」

仮面ライダーエボル「っ?!」

STEAM ATTACK!!

放たれた弾丸は、エボルの居る場所に直撃。ものの見事に爆発し、
先ほどよりも激しい炎の海が周りを燃やし尽くす。流星にこれでは
幾らエボルでもタダでは済まないだろう。

デイズター「あーあ、やつちやたあー。まあ仕方ない、あの男
からは死体になっても回収は絶対って言われてたし、ちやつちやつ
とやりますかー。で、死体はー……………つと…え?」

デイズターの視界に映るモノに、まず「有り得ない!」という言葉
葉が真っ先に浮かんだ。何故なら……………。

発狂するデイザスターを無視しながら、歩き近づくエボル。だが途中、その足は力強い走りへと変わって行く。そんなエボルが真っ直ぐ此方へ走ってくる事に恐怖を抱き始めたデイザスターは、無闇やたらにトランスチームガンを乱射する。が、最早自分のペースを忘れ、挙句どの弾もエボルに命中していない。奴がそんな状態の中、エボルは眼にも捉えきれない高速移動をもってデイザスターの視界から消えた。

「デイザスター「っ!!ど!どこだあ!!秋羅あ!!」

四方八方、東西南北に眼を向けるが、何処にもエボルは居ない。その所為か更に苛立ちスチームガンを周囲に発射。当り散らしに打つて出るが此れも意味が無い。そうして居ると……。

「…… 此処だぞ?小物」

「デイザスター「っ!」」

「思いつき振り向いた瞬間……。」

「仮面ライダーエボル「フッ!!」」

これにより、織斑秋羅……仮面ライダーエボルの初戦闘は見事勝利に終わった……そして。

デイザスター「がっ!!……ゴボツ!!……ぐえ!!……」

マスクの口部分から多量の吐血するデイザスター。そんな奴に、エボルはゆっくりと冷静に近寄って来た。

仮面ライダーエボル「……」

デイザスター「ハア……がはっ!!……どう、したん……だあ?……あき……ら……ウハツ!!」

仮面ライダーエボル「……」

これにエボルは無言。が、そんな時である。エボルトが秋羅に何かを伝える。

エボル『おい!秋羅、地面に落ちてる奴のトランスチームガンを見ろ!』

仮面ライダーエボル「ん?」

エボルが視界に映ったのは、自壊を始めるデザスターのトランスチームガンであった。トランスチームガンだけでは無い。スチームブレイドや、奴が所持していたと思われるボトルすらも自壊を始めていたのだ。

エボルは、自身の足下に転げ落ちていた自壊を始めている一本… シャークのボトルを拾い見た。

仮面ライダーエボル「…これはネメシスという奴のボトルか？」

エボルト『いや、これは…』

エボルトは直ぐにそのボトルについて何か気づいたようだ。

仮面ライダーエボル「…何だ」

エボルト『こいつは…人為的に作られたボトル…つまり本物を似せただけの模造品だ』

仮面ライダーエボル「…何だと？」

エボルト『恐らくだが…此処に居るデザスターは…』

彼が何かを言おうとしたが…背後、壁に埋め込まれて虫の息であるデザスターが嗤う。

デザスター「…は、ハ…ハッ♪」

仮面ライダーエボル「…貴様あ」

デイズスター「は…ハハッ…そう…俺はただ命じられて…来た…ただだあ…ハハッ♪」

仮面ライダーエボル「…黒幕は何処に居る」

デイズスター「…ハアハア…ガホッ！…あ…？」

エボルは殺気を隠さず、デイズスターに問い詰める。

デイズスター「ざんねえ…ん…彼は…この沖縄には…居ない」

仮面ライダーエボル「…ん！」

するとデイズスターの体が発光した、つと思ったら…壁に埋め込まれていたデイズスターの姿が、1人の男に変わっていた。男の見てくれば平凡、何処にでも居る様な「普通」という言葉がお似合いの人物であった。

仮面ライダーエボル「…こいつ、人間っ」

エボルト『当然だあ。何せトランスチームガンはお前さんのエボルドライバーと同様に、人間が使って変身する物だ。だが…』

仮面ライダーエボル「だが…何だ」

エボルト『変身するには本来、必要な物がある』

仮面ライダーエボル「…何だそれは？」

エボルト『ネビュラガス…そしてハザードレベルだ』

エボルは、エボルトからネビュラガスの存在と性質、ならびにそれに対し尚且つライダーシステムなどに決して欠かせないハザードレベルの事を伝えた。

仮面ライダーエボル「…なるほど、すなわちネビュラガスの影響を受けていなければ、ハザードレベルは発生しないし、その所為で変身すら出来ない」と

エボルト『その通り。だがネメシスは言っていた、この星には、ネビュラガスと同質の物がある』つと…。秋邏、それに触れた、または何かのキツカケで体の中に入ったとか、記憶にあるか？』

仮面ライダーエボル「…それは…っ!？」

エボルト『ん?!どうした?!』

仮面ライダーエボル「ぐっ!急に頭が…あ!!」

何かを思いだそうとしたエボルが突如苦しみだした。しかしそれでもエボル…秋邏の頭の中に何かイメージのようなビジョンが現れる。

仮面ライダーエボル「っ!?!」

……すばらしい!!……お前たちは私の……!!

……お前たちは地球の……そして何れは人類を……

!!

仮面ライダーエボル「なん…だ…これ、は……」

謎のビジョンに苦しむエボルにデイザスターの正体である男が言う。

デイザスター「言った…だろう。君は最上位…の存在なんだ……」

仮面ライダーエボル「…ッ」

エボルト『秋羅!大丈夫か!』

仮面ライダーエボル「…ああ、大丈夫だ」

エボルトに安否を伝えたエボルは、デイザスターに問いかける。

仮面ライダーエボル「…貴様は何を知っている」

デイザスター「…フフツ、俺が知っているのは…何れこの世界は劣等種どもと共に終わる”つてことさあハハツ♪”」

勝利者である筈のエボルが嘲笑れているという可笑しい中、デイザスターは……。

デイズスター「君に…… 良い事を…… 伝えよう…… 同族としての…… ね……」

仮面ライダーエボル「同族？だと…… どういう……」

デイズスター「そ、それは…… いずれ君自身が…… 知らなければ…… がはっ！…… ならないこと…… だよ…… それよりもねえ…… 近々、彼…… 君の言う黒幕は…… “ある場所”で…… 実験を行うよ……」

デイズスターから重要なヒントが与えられた。それに関して問い詰めるエボル。

仮面ライダーエボル「…… それは何処だ」

デイズスター「それは…… 自分で…… 考えな…… フフツ」

仮面ライダーエボル「……」

デイズスター「フフツ…… 僕はねえ、以前は…… 何処にでも居る…… 普通のサラリーマンだった…… だがISの所為で、妻や娘たちは変わってしまった…… 僕に暴力を…… 行うようになった…… 昔は皆優しく…… 幸せだった…… それを…… それをおお!! ISなんていう糞なガラクタの所為でえ!!」

仮面ライダーエボル「……」

デイズスターは、この女性至上主義の世界で起きている迫害の被害者だったようだ。しかし、だとしても……。

千冬「レナちゃん……」

私に抱っこされているレナちゃんの涙で濡れている顔を見るのは心苦しい。それにこの子の目の前でシスターは……。私はこの悲しき事実をどう伝えればいいんだ……。それに、兄さんが未だ戻ってこない。

そんな時、子供たちの連絡で駆け付けた警察や救急隊の人たちが私の所までやってきた。

警官「織斑さん……。もうこれ以上は……」

千冬「ですが……」

救命士「これ以上此処に留まれば、我々や貴方方も被害を被ります。ですので此処は一旦病院に行きましょう」

千冬「……」

確かに、ここに居れば二次被害だって起きかねないだろう。けど……その時だった。

救命士「おい!!アレを見ろ!!」

警官「な!?!アレは!?!」

「お姉さん!!アレ!!」

警官や救命士の人たちや子供たちが指差す教会の方を見ると、そこには……。

秋羅「……………」

千冬「っ!!… あ… グスツ… ああ… に… 兄さん… 兄さんっ!!」

炎に包まれた教会から出てきたのは、秋羅兄さんだった!そして兄さんに両腕で抱き上げられているのは、シスターの亡骸だった……。

千冬「兄さんっ!!無事だったんだな!」

秋羅「…………… ああ」

だが兄さんは先ほどまでとは違い、髪が白髪になっていて、瞳の色まで血のような赤く染まっているのは何故だ……?

千冬「兄さん…… 一体何が……?」

私が問いを口にした時、子供たちが兄さんに抱き上げられているシスターの亡骸を見て、声を荒げる。

「秋羅先生!!シスターどうしちゃったの?!」

「シスター!!起きてよお!!ねえ!ねえってばあ!!」

「シスター!!やだよお…… やだよお!!」

「シスター!!死なないでえ!!私達を置いて何処にも行かないでえ!!」

「シスター!!」

レナ「しすたあ!レナ、イイ子になるからおきてえ!ねえ!しすたあ!」

救命士「皆さん!落ち着いて... なっ!!」

子供たちを落ち着かせようと声を掛けた救命士の1人が、秋羅兄さんを見て驚く表情を見せた。だがそれは他の救命士や警官たちも同じ顔となつている。しかしそれが段々恐怖に縛られたような怯えたモノになつていく。それに気づき、子供たちも秋羅兄さんを見て怯える。

千冬「何故みんなそんな... 怯えるような...」兄さん、一体... っ!？」

だが、皆が怯える意味が分かった、何故なら...

秋羅「.....」

兄さんの両腕、そして左頬に赤い血が染まつていた。それはまるで誰かの返り血のようだった。此処には兄さんとシスターが居る、つまり.....

千冬「に……兄さん……あの怪人は……？」

すると兄さんは、答えた。

秋羅「…………… ああ、殺した」

千冬「兄さん……」

私はこう思った。この返り血がああ、奴は人間だったという事になる。ならつまり……兄さんは人を……。そんな私達の反応に対し、冷静に、冷徹に兄さんは語る。

秋羅「…………… 千冬」

千冬「兄さん……」

【イメージBGM：仮面ライダー四号主題歌：time】

秋羅「俺は…… IS学園に行く」

千冬「……え？」

本当はその言葉を聞いたなら、私は直ぐに喜んでいただろう。だが……そうはならなかった、なぜなら……。

千冬「兄……さん……」

いつの間にか涙で歪む私の瞳に映ったのは……。

秋瀬「……」

赤黒く、虚ろになったにも関わらず、憎悪に満ちたかのような鋭い瞳をした兄さんが……そこに居た。

第二幕 第六章 渴望

前回、デイザスターとの闘いに勝利した仮面ライダーエボルこと…織斑秋羅は、奴から情報の一部を聞き出した。だがその後、憎しみのあまりに彼は人間であったデイザスターを無慈悲に殺してしまった。そしてシスター愛紗の亡骸と共に千冬の下へ戻り、彼は冷たく決意した想いを冷静に、冷徹に告げるのであった。

秋羅「…千冬」

千冬「兄さん…」

秋羅「俺は… IS 学園に行く」

千冬「……え？」

そして突然ではあるが、物語は数か月が経つ。

春……それは始まりを告げる季節。日本ならではの四季の一つで、学生たちにとって重要な季節とも言えよう。

そして此処…… I S 学園でもそうである。此処もまた他の学校同様、新入生を迎えて新たな学園物語が始まろうとしている。

I S 学園…… アラスカ条約に基づき日本に設置された I S 操縦者育成の特殊国立高等学校である。操縦に限らず専門のメカニクなども存在しており、I S 関連の人材はこの学園で育成・輩出されるのだ。また、学園の土地はあらゆる国家・組織など属することはせず、いかなる国や機関であろうと学園に干渉することは全て否なのだ。故

にこれに関して国際条約に記載されており、他の国でのISとの比較・新技術の試験に適している為、こういう面で重宝されている。

だが、この国からの干渉に関しての規約は、半ば有名無実化…名目上存在しているが実際には意味を為していないのが実情なのだ。

敷地内にはIS訓練用のアリーナ、2人一部屋の学生寮、並びに学生や教職員に人気の食堂、他には大浴場という何とも学園というより何処かのホテルではと錯覚してしまう。

IS学園の売りの一つは何も学園の設備だけではない。学生たちが着ている制服は個人の意思で自由にカスタム出来るのだ。その為か、中には自分なりに可愛くしたり、ワイルドにしてカッコよくしたりする者が居る。

他にはIS学園ならではのイベントが存在する。

そんな突然の始まりは、学園のトップ… 学園長室から行われるのだった。

その部屋にはとても始まりの季節には不釣り合いであると共に、重苦しい空気が流れている。

千冬「……………」

千冬は今、気まずいと言った表情で、とある2人を見つめていた。

秋羅「……………」

スーツ姿の男は、この物語の主人公の1人、織斑秋羅。彼はこの地球に舞い降りてきた凶悪地球外生命体「エボルト」と遭遇し、今ではそのエボルトを体に宿して凶戦士…仮面ライダーエボルトに変身できるとなった人物である。

???「……………」

そしてその秋羅と対峙し、VIP用のリクライニングチェアに座っている壮年の男。この者の名は…くつわぎじゆうぞう轡木十蔵、このIS学園の学園長を務めている。男で女性でしか使えないISの育成機関の責任者なのは可笑しいと思うが、しかし彼は列記としたこのIS学園の最高責任者である。

そんな2人の沈黙が、学園長が口を開いた事で破られたのだった。

???↓轡木「お久しぶりですね、秋羅君」

秋羅 「… お久しぶりです、轡木学園長」

轡木 「相変わらずですね、君は。つと言いたいのですが…。」

轡木は秋羅の白髪と赤い瞳を見た。

轡木 「変わった…： ようですね？」

秋羅 「… まあ、一度きりの人生なので」

そんな秋羅の脳内に、エボルトが語りかける。

エボルト 『まあ、確かに地球外生命体と同化するなんて、一度きりしかないもんなあ？』

秋羅 『喧しい』

エボルトにツツコみを入れる際、顔を険しくしてしまう。

轡木 「どうかしましたか？」

秋羅 「… いえ、なんでもありません」

轡木 「そうですか…： それにしても」

秋羅 「… 何か」

轡木 「相変わらさず表情が険しいですねえ秋羅君。もう少し気を緩めても大丈夫ですよ？」

秋羅 「… 必要ありません。そんなことより、自分の学園での待遇

は…?」

轡木の言葉を踏みにじるかの如く、秋羅は仕事の話しに入ろうとする。これに千冬が慌て声を荒げるのだった。

千冬「に！兄さん!!学園長に対して…」

轡木「いいですよ、織斑先生。そうですね、では秋羅君…今後君はIS学園の実技担当官を務めて頂きますが、宜しいですね?」

秋羅「…構いません。で?自分はクラスを持たずで良いのでしょうか?」

轡木「いえ、実技担当官と兼用していただきます。貴方は今年の新入生の面倒を…クラスは『一年一組』。副担任には三名、まず一人は千冬君を。もう一人は今、一組に先に行っており、今頃HRを始めていると思われます。そしてもう一人は…おや?来たようですね?どうぞ!お入りなさい」

秋羅「?」

学園長室の扉の外からノックが鳴らされ、轡木は了承して入るよう促す。それに対して来訪者は礼をもってから入ってくる。

??? 「失礼します」

扉が開かれ、入って来たのはオレンジ髪で、少し短い丈のスカート、上二つのボタンが開いたYシャツ、そこからでも垣間見える千冬に負けず劣らずの素晴らしいボディ、今すぐにも男たちが性的に襲いたいぐらいの体を有している女性である。

秋羅「……」

千冬「はあく、お前なあ、少しラフ過ぎやしないか？」

千冬はそんな女性のファッションに対して異を唱える。が、女性は何処吹く風と言わんばかりにシレッとし、むしろ堂々としている。

???「ん？そうかあ？俺はこのファッション気に入ってるんだけどお？」

千冬「だからと言って、お前は教師なんだぞ。それに学園長の前で……」

???「はいはい、お小言は後で聞いてやるよおく……それより」

オレンジ髪の女性は、千冬との会話を一方的に終わらして秋羅の方へ向く。秋羅も彼女の瞳から決して眼を離さないで居る。そんな秋羅に向かって、オレンジ髪の女性は凜とした歩きで彼に近づき、そして……。

???「フンっ！」

千冬「ちよ!!オータムっ!?!何を!!」

女性は秋羅の顔面目掛け、思いつきりの良いパンチを放つ。が、秋羅は淡々とこれを片手で鷲掴んで防いだ。しかし女性はそのまま鋭い眼つきで睨む。そんな彼女に秋羅はこう言った。

秋羅「… 久し振りだな… オータム。元気そうで何よりだ」

オレンジ髪の女性↓オータム「『元気そうでなにより』 だあ?… :ふぎけんな!!このバカ!!卒業と同時にいきなり行方を暗ましやがつてっ!!俺や千冬、それに他の奴らだつてどんだけ心配してたかテメエは知ってるかっ!!」

秋羅「… ああ、知っている。だが此処に戻ってきた」

オータム「そうやってお前は！なにシレッとしてやがんだッ!!いいかあ!!お前といい春我といい、勝手に決めて突き進んでこっちが追いかけようとしてんのに、突然居なくなると俺たちは嫌なんだよ!!」

いつの間にか、オータムの瞳に涙が溢れていた。その様子に秋羅は黙り、千冬は彼女の心中を察した。

千冬「オータム…」

秋羅「…」

オータム「俺はお前が好きだ。例えお前に女が居ても、それでも好きなんだ!!お前以上に好きになれる男なんて、この世に居やしないっ!!」

千冬「はあ!!おい!!オータム!!なにを!?!」

轡木「ほほう」

秋羅に対しての突然の愛の告白。これに千冬は動揺し、轡木は面白く笑みを見せて「いやあく、若さとは良いものですなあ」つと感慨

に耽っている。

秋羅「… オータム」

オータム「… 何だよ」

未だ涙流すオータムに秋羅は口を開いた。

秋羅「… 俺がこの学園に来たのは、俺個人の目的があるからだ。その事に関してお前や千冬を巻き込む事つもりはない。だから…」

オータム「だから… 余り仕事以外で関わるなっか？」

秋羅「… いやそうじゃない。プライベートで何かしらの用が俺に在るなら相手はしてやる。だが俺の目的には干渉するな… いいな？」

オータム「… その目的ってなんだよ？」

秋羅「… それは言えん「なんで?!」言っただろ？干渉するな…」

オータム「秋羅…」

秋羅「…」

千冬「兄さん…」

千冬は秋羅を見ながら、数か月前の事を想いだす。

千冬 s i d e

数か月前…… デイザスターの襲撃により孤児院と学校の兼用に使われていた教会は全焼して、最早見る影すらない。だがそれでも生き残った子供たちのこれからを考えねばならなかった。そう、シスター…… 愛紗さんが居なくなり、もう帰る家や待つてくれる親同然の人が居ない子供たちが、どうなるかが私は気がかりであった。だがそんな思いに駆られている中、兄さんは違った。

千冬 「兄さん…… それは本当なのか？」

秋羅 「…… ああ、あの子たちは皆同じ施設に預かってくれる施設が見つかった。相手にも連絡し面談して、その施設になら預けられると決断した」

千冬 「そうか…… よかった…… あの子たちはそれを知っているの

か？」

秋羅「… ああ、だが…」

千冬「？」

何か複雑な表情を見せる兄さんに、私は不安げに聞いた。

千冬「まさか… あの子たちは嫌がっているのか…？」

秋羅「… ああ。この俺に引き取って欲しいそうさ。だがそれは出来ないと伝えた」

千冬「そんな… どうして…？」

秋羅「… 俺とてアイツらのこと引き取ってやりたい。だができない」

千冬「何故なんだ?! どうして!？」

秋羅「… デイザスターは死に間際に言っていた、*“*黒幕が在る場所*”*で実験を行う*”*って…」

千冬「黒幕?! そんな奴が居るのか?! それに *“*在る場所*”* って、何処なんだ?!」

あんな冷酷な奴がタダの刺客なんて… そんな。しかし兄さんは冷静に私に話してくれた。

秋羅「… 俺の推測だが、恐らくI S学園だ」

千冬「え?!理由は?」

秋羅「: : IS学園であれば何かしらの事が出来ると思う。それにもしIS学園が無くなれば、世界規模での混乱はまず間逃れない」

千冬「バカな: : :」

確かにIS学園が無くなれば、世界的に混乱が生じる。あのデザイナーを送り込んだ者がそれを狙っているのなら: : :。

千冬「兄さん!なら私も共に「要らん、邪魔になるだけだ」兄さん?!事は重大な規模になる可能性が在るんだぞ?!個人の力で何とか出来るレベルではないっ!!」

声を荒げる私に、兄さんは冷徹に口にした。

秋羅「: : ISがもし通用出来なかったら: : お前どうする?」

千冬「: : : : え?」

秋羅「: : いいか?デザイナーの装備は、これまでのISの概念とはまるでもって違い過ぎていたんだぞ?その所為でIS自身役に立たない可能性だつて生まれる」

千冬「そ、それでも!!絶対防御が「ああ、確かにな。だがアレは緊急時の救命処置であつて、戦闘時無敵を発揮するものではない」: : :」

秋羅「: : それに奴が持っていたあの妙なボトル: : アレ1個でとんでもないパワーが在った。アレ一発で絶対防御は意味をなくす。つまりISは、デザイナーや奴に類する者たちにとって: : : ただのガラクタの玩具でしかない」

兄さんの容赦ない言葉に、私はこれ以上何も言い返せなかった。生身であそこまで歯が立たなかったんだ、きつとISも……ん？待て。

千冬「兄さん」

秋羅「……何だ」

千冬「兄さんはどうやって、あの凶悪なデイズターを倒したんだ？確かあの時、〃奴を倒せる方法がある〃って言っていたが……？」

そう。あの時兄さんは確かにそう言った。そして現に兄さんは奴を……殺した。私がそう言うと、兄さんは徐おもむろに懐から何かを取り出す。それは赤と青、黄色を基調としたベルトのみたいな物であった。

千冬「兄さん……それは？」

秋羅「……これは〃エボルドライバー〃」

千冬「エボル……ドライバー」

秋羅「……これを身に着けて変身すると、デイズターと互角の力を持った戦士になれる。こいつ（あとエボルト）のお陰で奴を殺す事が出来た」

千冬「それは……私にも使えるか？」

秋羅「……いや無理だ。『どうして？』こいつを使うには条件がある」

千冬「条件？」

秋羅「… ああ、だからこいつは俺でしか使えない。だから無理だ」

千冬「……」

私は兄さんの持つエボルドライバーを見て、言葉では嗚呼は言ったが何か不安を感じる。あのドライバーが兄さんに危害を及ぶんじゃないかと……。

それに兄さん自身、未だ憎しみに囚われているんじゃないかと……。

千冬 s i d e e n d

千冬「……」

千冬は秋羅との会話を思い出して不安になっていた。そんな彼女に轡木が話しかける。

轡木「織斑先生、織斑先生！」

千冬「え……アツハイ！」

轡木「大丈夫ですか？」

顔を上げた千冬に、轡木は心配して声をかけた。

千冬「は、はい！大丈夫です」

轡木「ならばいいですが……では秋羅君、いや秋羅先生、貴方はこれから1年1組に向かい、最初のHRを始めてください。オータム先生、織斑千冬先生、それと此処には居ない山田先生の三人で、副担任として秋羅先生を補佐、サポートしてください」

オータム「はい！」

千冬「分かりました！」

2人の返事に轡木は満足げに笑みを溢し、秋羅に視線を向ける。

轡木「ではよろしくお願いたしますよ？織斑秋羅先生」

秋羅「……了解しました」

そうして秋羅は、オータムと千冬を伴って自分たちが担当するクラ

周囲に居る女子生徒から過剰に見られているのは、織斑一夏。彼は織斑千冬の実の弟であり、秋瀬と春我の次にISを動かした男である。

そんな彼を見て溜息を吐く女子が2人。

「はあ〜」

1人は千冬似の髪型でしており、もう一人はポニーテールをしている。二人共、大人の女性にも負けずな体に、そして艶美さを持っている。

千冬似の女子「箒、アイツがまさか同じクラスになるなんて想っていたか？」

ポニーテールの女子「いいや円夏。それとお前、字が違うぞ、訂正しろ」

千冬似の女子↓円夏「何故だ？お前はアイツの事を好きだったのではなかったのか？」

ポニーテールの女子↓箒「ふざけるなマドカ。誰が、あんな万年残念思考の鈍感バカなんぞを好きになるか！それだったら私はモツプに恋するわ！」

円夏「ほう？箒だけに？」

箒「喧しい！それと上手くないぞ！」

この漫才をしている2人、ポニーテールの女子は…篠ノ之 箒。実家は剣術道場でもある篠ノ之神社という場所にある。その所為か幼い頃から剣道を嗜み、その実力はかーりなモノである。しかし高校生である筈なのに年齢不相応な胸と体がコンプレックスを抱く。そして彼女は、ISの生みの親である篠ノ之 束の実の妹である。

もう一人、千冬似の少女、箒と同じような体と胸を有しているこの彼女は、織斑おりむらまど円夏。嘗てIS学園において最凶を誇っていた2人の男、春我しゅんがと秋邏あきらの実の妹である。しかし彼らがIS学園卒業と共に、円夏を千冬に託して居なくなった為、現在は千冬と一夏と暮らしていた。

その為か、千冬の事を尊敬している証で彼女と同じ髪型をしている。だがそれを周囲の人間は、円夏と千冬を本当の姉妹では？と思いを違える事が幾度もあったそう。

そんな彼女らが互いに言い合っている中、1組の担任が来るまで間、千冬、オータムと同じく副担任を務める山田真耶が教壇に立った。

真耶「全員揃ってますねえ。じゃあSHRを始めましょうー」

教壇に立つ真耶は微笑んで挨拶を行う。

真耶「今日からこの一年一組の副担任を務める山田真耶です。これから三年間楽しい学園生活にしましょうねー」

「「「「「……………」」」」」」

しかし悲しきかな、彼女の自己紹介は誰も聞いておらず、女子生徒たちは皆一夏をじーっと見ている。その為、だあれも彼女の説明を聞いておらんだ。しかし、その程度でめげる彼女ではない。

真耶「えっと…じゃ！じゃあ！出席番号順で…」

その間皆の視線を受けている一夏は、六年ぶりに再会した幼馴染の筈と、そして共に暮らしてきた従兄妹である円夏に助けを求める視線を送る、が、彼の切なる思いは真耶の声に引き裂かれた。

真耶「織斑君…織斑一夏君！」

一夏「は！はい！」

真耶「大声出してごめんなさい。でも自己紹介で、「あ」から始まって今「お」なんだよね。自己紹介してくれるかなあ？だめかなあ？」

一夏「あ、いやあ、そんなに謝らなくても…」

彼は立ち上がって、深呼吸をし、己の名を…。

一夏「え、ええっと…織斑一夏です、よろしくお願いします」

シー——ンと時間が流れる。だがこの自己紹介に教室内の女子は不満そうである。それ故か、女子たちの鋭い視線が一夏に突き刺さる。

一夏「(不味い!!これだけだと暗い奴のレッテルを貼られてしま
うっ!!)」

これには流石に危険と判断したのか、一夏は再び口を開く……
そして。

一夏「以上です!!」

決まったと言うような顔を見せるが、周りや真耶は思わずコケる。
そして彼の力説めいた言葉に、箒と円夏も同じようにコケたのだっ
た。この皆の反応に一夏は「えっ!!」っと言うような顔で見渡すの
だった。

一夏「え?!だめでした?!… がふっ!!」

「「「「「「っ!?!」「」」」」」

千冬「全く、お前は満足に自己紹介の一つも出来ないのか」

突然現れ、素早く一夏の頭部に拳骨を食らわした千冬。そんな彼女
の姿に、背後に居たオータムは苦笑いを見せ、真耶は慌てながらに状
況を見守るしかなかった。そんな中、箒と円夏が口を開いた。

箒「千冬さんが私たちの担任ということか…」

円夏「多分。それに副担任にもう一人、オータムまで来てる」

「千冬様よ！本物の千冬様よお!!」「私！お姉さまに会うために北九州から来ました!!」「私！お姉さまに会えただけでも感無量です!!」「お姉さまあ!!こっちを見てえ!!」

千冬はこの状態に呆れて言う。

千冬「全く、例年においていつもだが、どうしてこう私のクラスにバカが集中しているんだあ？」

「お姉さまあ！もつと叱って、罵ってえ!!」「それでその後、優しく可愛がつてえ!!」「お姉さま、抱いてえ!!私を下僕にしてえ!!」

キヤーキヤーと騒ぐ中、千冬は……。

千冬「貴様等に言っておく、私はこのクラスの担任では無い。此処に居るオータム先生と山田先生と同じく『副担任』だ!」

「「「「「えっ?!」」」」」」

これには流石に皆静かになり、一夏や箒、円夏も驚く。

一夏「え?」

箒「千冬さん……」

円夏「じゃない……じゃあ誰?」

三人の問いに答える様に、千冬が喋り続ける。

千冬「その方は、私でも到底敵わない程の人だ。決して無礼の無い様に!!」

一夏「え?!」

箒「千冬さんが敵わないって……」

一夏と箒、並びにクラス内の女子たちも耳を疑った。あの世界最強とも謳われる織斑千冬ですら勝てないなど有り得ないと……だが、円夏だけは違った。

円夏「ま……まさ……か」

箒「ま、円夏……?」

彼女の様子が変わったのに気づいた箒は、円夏の異常な動揺にまだ分からずで居るようだ。そんな中、千冬は廊下に向けて大きく声を上げる。

千冬「それではどうぞ!!お入りください!!」

彼女の言葉と同時に扉が開かれ、それを見た一夏と箒、円夏は……………。

一夏「え……………」

箒「まさか……………そんな……………」

円夏「あ……………ああ……………グスツ……………に……………さ……………」

一夏は驚愕し、箒と円夏は涙を露わにする。

ビシツと完璧に決まったスーツ姿の男、髪は白髪、瞳は血の様に赤い。そして彼はそのまま教壇に立つと、突然いきなり黒板に、在る名前を書きだした……………それは。

秋羅「……今日から、この一年一組の担任、並びに実技担当官を務める織斑秋羅だ。これから一年、貴様等を厳しく指導する。が、これに耐え切れないと自分で思える者は今すぐにも名乗り出て、この教室、いや……この学園から……失せろ」

彼から放たれた身も凍りつく程の恐怖にも似た感覚を味あわせる眼が、生徒たちに突き刺さる。そんな凍りつく雰囲気の中、千冬は秋羅を見て、彼との会話を思いだす。

千冬「……」

千冬「兄さん……」

秋羅「……何だ」

千冬「兄さんは今、何を求めているんだ」

秋羅「……………」

千冬の願うような瞳に秋羅は答えた。

秋羅「…………… I need more power」

千冬「え…………？」

【イメージBGM：仮面ライダーアマゾンズセカンドシーズン主題歌：
DIE SET DOWN】

それを語る秋羅の渴望するような眼に、千冬はこれ以上何も言えな
かった…………。

千冬「兄さん……………」

続く…………。

第七章 再会

前回、IS学園に戻ってきた地球外生命エボルトと同化した男。仮面ライダーエボルトこと織斑秋羅。彼は今自分が担任を勤める1年1組の教室に入る。

千冬「それではどうぞ!!お入りください!!」

彼女の言葉と同時に扉が開かれ、それを見た一夏と箒、円夏は……………。

一夏「え…?」

箒「まさか…そんな…」

円夏「あ…ああ…グスツ…に…さ…」

一夏は驚愕し、箒と円夏は涙を露わにする。

ビシツと完璧に決まったスーツ姿の男、髪は白髪と尖ったアホ毛、瞳は血の様に赤い。そして彼はそのまま教壇に立つと、突然いきなり黒板に、在る名前を書きだした……それは。

秋羅「……今日から、この一年一組の担任、並びに実技担当官を務める織斑秋羅だ。これから一年、貴様等を厳しく指導する。が、これに耐え切れないと自分で思える者は今すぐにも名乗り出て、この教室、いや……この学園から……失せろ」

彼から放たれた身も凍りつく程の恐怖にも似た感覚を味あわせる眼が生徒たちに突き刺さる。そんな最中、一人の女の子が涙ぐみながらに席から立ち上がる。

秋羅「……ん？」

円夏「……に……兄さ……ん、なんだよね？」

秋羅「… 円夏」

彼は久しぶりに見る自分の実の妹の姿を。彼女は秋羅が知る以前の子供の姿から、美しく凛とした大人の女と見間違う程に…。そんな彼女に秋羅は自分が出来る最低限の微笑みを見せて口を開いた。

秋羅「… 綺麗に、なったな… 円夏」

円夏「ツ!!… ずっと… 逢いたかった…」

秋羅「…」

円夏「グスツ… 兄さんたちが居なくなつて… 本当に寂しかった… 特に秋羅兄さんと… 離れ離れが… 嫌だつた…」

千冬「円夏…」

秋羅から預り、妹同然に可愛がつてきた円夏の悲しむ姿に、千冬は勿論、箒、オータム、真耶、それに先ほどまで秋羅の凍てつく殺気に怯えていた生徒たちまで感涙していた。そして円夏は…。

円夏「これからは… いつも一緒、だよね?… 秋羅兄さん」

秋羅「… ああ」

円夏「ツ!!… 兄さん… 秋羅兄さあんツ!! ああああああ
ああツツツ!!」

彼の肯定の返事に、円夏はどうとう居ても立ってもいられず、秋羅の胸の中へ抱きつき泣いた。これに秋羅はただ黙って彼女の頭を撫でてやる。その後、暫くしてから円夏は落ち着きを取り戻し、頬を赤く染め上げ自身の行動に恥じ入るばかりとなった。

円夏「うゝ／＼／＼／＼」

秋羅「… 円夏、もう落ち着いたのなら席に座れ。話は後でも時間を設けてやるから…」

円夏「… 分かった。きつと… だよ？」

秋羅「… ああ」

円夏と秋羅の会話が終わったのを見て、1人の女子が問いかけてきた。

「あのー織斑円夏さんと織斑秋羅先生って… もしかして…」

秋羅「… ああ、そうだ。俺とこの円夏は、実の兄妹だ」

「でもー織斑君と千冬様も、同じ織斑って名字ですけど… ？」

千冬「私と一夏、秋羅先生と円夏、そして此処には居ない織斑春我とは従兄妹同士だ」

「『『『『なくるほどおー』』』』』」

生徒たちは皆納得したように頷く。だが此処で、1人の生徒が秋羅と春我の名を聞いて何かを思いだしたようだ。

「待って!!織斑秋邏と織斑春我ってっ!？」

「あー!そうだ!!織斑君よりも前に、ISを動かした男で有名になった双子の兄弟!!」

「そうよ!!しかも当時共に学生だった千冬様でも勝てないと言わしめたくらいの実力を以って、IS学園に君臨していた最凶の2人の男っ!!」

「うん!そう!!そしてどの国の代表候補や国家代表が挑んでも、結果誰も勝てなかったってっ!!」

「それで付いた異名が「スカーレットジエミニ」っ!!」

真耶 「み、皆さん!!まだHR中です!!静かに!!」

しかし時既に遅し。真耶の注意も虚しく教室内はザワザワと賑わい、注意一つで収まらなくなってしまう。

「嘘お!?あの織斑秋邏様が私たちの担任っ?!」「これ夢...だよね?」

「夢じゃないよお!!千冬様が副担任っただけでも嬉しいのに、その上あの秋邏様が担任なんてえ!!」

「あー!此処に秋邏様のお兄様である、春我様も居れば揃うのにいっ!!」

「お母さん!お父さん!夜の営みの結果、私を産んでくれてありがとう!!」「あ...やば、私、濡れたかも...」

真耶 「み!皆さん!!し「おい」あ、秋邏先生...」

が安心して学園生活を送らせるのも俺の務めだ」

一夏「あ……え……？」

箒「秋瀬さん……」

円夏「に……兄さん」

オータム「あ……き……ら……？」

真耶「せん……ぱい……」

千冬「……」

秋瀬「……だが俺とてそこまで悪魔ではない。貴様等が自分自身の意思で強く変わろうと足掻いて努力するならば、俺も貴様等を支え、助けよう」

「」「」「」「」「」「」「」

その言葉を聞いて皆、胸を撫で下ろす。

その時、チャイムが鳴ってしまった。

キーンコーンカーンコーン

秋羅「ん?… チャイムが鳴ってしまったか。今より小休止に入るが、まだ自己紹介をしていない者は各々それぞれやる事… いいな！」

「「「「「はい!!」「」」」」」

秋羅「… この後の授業に関して、必ず準備をしておくように！」

「「「「「はい!!」「」」」」」

生徒たちの返事を聞いた秋羅は千冬たちと共に、教室から出て行く。秋羅が教室から出て来たのを見て、千冬、オータム、真耶の三人と共に一度職員室へ向かう。その中で千冬が秋羅に対して、先ほどの事で話しが在るようだ。

千冬「兄さん、もう少し他に無かったのか」

秋羅「… 何がだ？」

オータム「さっきお前が話してた事だ！何だアレ!？」

千冬と同じ気持ちで問い詰めてくるオータムに、秋羅は答えた。

秋羅「… 何だも何も、事実を言ったままでだぞ？ 浮ついた気持ちで来られても学園にとって迷惑なだけだ。違うか？」

オータム「そ、そりゃあ…。」

言い返されたオータムとは反対に、真耶が口を開く。

真耶「で、でも！ 秋羅せんぱ… 先生、あんな言い方では生徒たちが納得しないと思います…。」

秋羅「… 納得などせんでない、ただそれに従えば良いだけの事だ。それと山田先生… いや、真耶… 久し振りだな」

真耶「はい… 秋羅先輩」

秋羅の再会の挨拶に対して、真耶は素直に笑みで返す。

オータム「そう言えば学生時代、真耶は秋羅の世話になっていたんだっけか」

真耶「はい… 虐められていた時助けて頂いて… その頃から、秋羅先輩にお世話になりっぱなしでした。だから、少しでも秋羅先輩のお礼がしたいと思っていましたのですけど…。」

千冬「だが結局、兄さんが卒業と同時に行方を暗ました所為で、それが出来なくなっただけ…」

千冬の言葉に寂しそうな笑みで頷く真耶、そんな彼女を見ていた秋
邏にオータムが耳元で囁く。

オータム「(ヒソヒソ) おい！秋邏！お前何ボウつとしてんだ！」

秋邏「(ヒソヒソ)… 何が？」

オータム「(ヒソヒソ) 何が？じゃあねえぞこのバカッ！真耶もお前
に会えるってんで、一生懸命ここまで頑張つて慣れないオシヤレをし
たんだぞ!!」

秋邏「(ヒソヒソ)… 確かに、オシヤレだな」

オータム「(ヒソヒソ) てめえ、早く褒めるなりしろっ!!」

秋邏「(ヒソヒソ)… うるさい奴だ」

オータムとの密談を終らせて、秋邏は真耶に話しかける。

秋邏「… あー、真耶」

真耶「は、はい！」

秋邏「… そのだな」

真耶「？」

千冬「(あー、なるほどー) 兄さん、ちゃんと行ってやったらどうだ
？」

秋邏「黙れ… あー、可愛くなったな」

真耶「っ!?!／／／」

そっぽ向いて言う秋羅に、真耶は顔を赤くして呆然していたが彼女は何とか声を出す。

真耶「あ／／／あの／／／あ、ありがとうございます／／／…秋羅先輩／／／」

秋羅「… ああ」

先ほどの寂しそうな雰囲気と違って、今は確実に嬉しそうにしている。それに対しての秋羅は無愛想にしている。が、千冬が彼の傍まで近寄り不敵に笑って話しかける。

千冬「フフツ、どうだ？ 兄さん」

秋羅「… うるさい」

秋瀬たちが居なくなった教室では……。

一夏「秋兄が……俺たちの担任……」

箒「秋瀬さんが帰って来たのは凄く嬉しい……が」

円夏「ああ、これまで何処で何をしていたのか……それにあの白髪と赤目、一体何が遭ったんだ……」

一か所に集まって話し合う一夏、箒、円夏の三人。そんな時……。

??? 「ちよつとよろしくて？」

三人「「ん？」」

一夏たちに近寄る女子生徒が現れる。優雅な足取りでツカツカと歩み寄って来た人物は、輝くような金髪のロングヘア、上流階級の貴族の娘という言葉をそのまま形作り生み出されたかのような上品な少女がそこに居た。

??? 「まあ！何ですの!?!その態度は!!わたくしに声をかけられるだけでも光栄だというのに、それに相応しい態度が御座いますでしょう!?!」

一夏「えつと……」

いきなりの事に対応できていない一夏の代わりに、円夏と箒が彼女の応対をする。

円夏「いきなり来てのその態度、余り褒められたものではないぞ?」

箒「ああ、正直器が知れるぞ?」

???「貴方に用はありませんわ!わたくしはその男に話が在るのですから!」

円夏「だとしてもだ、貴様の態度は少し改める必要が在るのではないか?」

箒「ああ。それに秋瀬先生が言っていただろう? 女尊男卑に染まっている者も叩きだす”つと、”と言う事は……」

円夏「貴様はその対象と言う事になる。そう解釈して先生に告げてもいいのだな?」

???「ぐっ!!たかがあのような冷血な男の言葉に、このセシリア・オルコットが怯むとでも思つてえ!!」

一夏「オルコット?うん?確か……」

箒「入試試験において首席で合格した者の名だ」

金髪の女子生徒の名を聞いて、一夏が思い出そうとするが思い出せず代わりに筈が答え、彼に教えてあげた。それを耳にした金髪の女子……セシリア・オルコットが優雅に髪をかきあげて語るのだった。

??? ↓セシリア「そう！入試試験において首席で合格を為した、このわたくし！セシリア・オルコット！筆記は勿論、実技での模擬戦闘においても首席で合格したのですわあ！」

一夏「実技で合格って事は……つまり」

セシリア「ええ！担当の教官を倒しましたわ♪」

一夏「ああ！なら俺も同じだぜ？」

一夏の一言に、セシリアは青筋を立てて徐に問いかける。

セシリア「……ど、どういう、意味ですの……？」

一夏「どういうって、俺も教官を倒したんだよ」

セシリア「わたくしだけと、聞いていたのですが……」

一夏「女の中でって事じゃないか？」

尚も喰い付こうしたが、チャイムが鳴ったのと同時に秋瀬たちが入って来た、

セシリア「また来ますわ！逃げない事ね！」

どこかの三下がほざく様な捨て台詞を置いて、彼女は自身の席に戻って行く。それを見た一夏たちも己の席に戻り、皆授業を受ける態勢に入る。そんな中、一夏は内心こう思い呟く。

一夏「(秋兄が、担任……これはもしかしたら、今の俺を見て貰えるチャンスじゃないか!? よーし!! なら頑張るぞ!! 今の俺を見て貰って、秋兄に認めて貰える程の一人前の男になるんだあ!!)」

何処でそうなれば、そんな思考に行きつくのか不明である。それに現実とは常に、本人が望むモノを決して簡単に用意などしてくれないのが、現実と言う非情である。これは別に一夏に限った事では無い。先ほどのセシリア・オルコットにも言える事だ。

初日での授業、これを教えるのは担任となった秋邏である。彼は黒板に正確に尚且つ、生徒たちに理解できるように書きながら教えてい

る。その様は正に何処にでも居る高校教師そのモノである。

秋瀬「： IS、正式名称： Infinite Stratos。
これの本来の開発目的は、宇宙空間での活動を主目的としたマルチ
フォーム・スーツだが、現在の所ではどの国も宇宙への介入は暫し止
めて、「兵器」として転用されているのは君たちも知っているだろう」

オータム「ふ、ふうん、教えるの上手いじゃん／＼」

真耶「(秋瀬先輩、カッコいい／＼)」

千冬「(兄さん：／／)」

そんな中、副担任であることを忘れているのか、この三人は授業の
邪魔にならん様に生徒たちの後ろ：： 教室の隅で秋瀬の教師ぶりを
拝見していた。生徒たちも真剣に聞いているようだが、その中で千冬
たち三人と同じような状態になっている者が2人居た。

箒「(秋瀬さん／／素敵だあ／／)」

円夏「(フフツ／／グフフツ／／大好きな秋瀬兄さんの授業
／／♪グフフフツ／／)」

ご覧の有様である。しかしそれでも何ら問題なく授業が進む。

秋羅「…そして、現在ISの動力であるコアは、開発者である篠ノ之 束博士が作っていた。だが途中博士はコアの作成を中断、今世界で保有しているISコアの総数は467機だ」

「先生！質問があります！」

秋羅「…許可する」

「各国で量産は出来ないのですか？」

秋羅「…残念だがそれは無理だ。何故ならばISコアは非常に難解な部分がある」

「難解？」

秋羅「そうだ。コアの全ては束博士が1人で作り上げたモノだ、その為それら全てがブラックボックス…つまり未だ誰も解析・解明が出来てない。仮に国でコアを作成したとしてもだ。起動出来なければタダのゴミだ」

秋羅の教師ぶりに、彼の中に居る地球外生命体「エボルト」が、秋羅の脳内に話しかける。

エボルト『しかもお、ISは本来女でしか使えないっていうデメリットが在る訳か……こりゃあ粗大ゴミに捨てたほうがいいんじゃないか？』

秋羅『…エボルト、もしパンドラボックスの力でISと戦うとどうなる？』

秋羅はくだらないジョークを言うエボルトに問いかけた。

エボルト『どうなるってお前… パンドラボックスの前じゃあ何の意味もなく無に消えるのみだ。それにボックスから作られたボトルを使っても同じさあ、つまりISはあ…』

秋羅『… タダのゴミ、ガラクタ、か』

エボルト『E x a c t l y !!さすが相棒♪』

秋羅『… じゃあこの事をネメシスは…』

エボルト『恐らくもう知っているだろうなあ、だが奴は一気にISや人間を潰しはしない『何故』奴はな秋羅、楽しんで相手を滅ぼしたいっていう主義で動くタイプなんだ『お前も似たようなもんだろう』喧しい！俺は奴よりかずつと『優しい方だ！』』

秋羅『……………』

エボルト『なんか言えっ!!』

珍しくツツコみを入れるエボルト。そんなエボルトとの思考会話を終らせて秋羅は授業に戻り、生徒たちに質問を求めた。

秋羅『… 誰か質問したい者は居るか「はい！」ん？』

秋羅のすぐ近くで手をあげて力強く声を出す者が居た… 一夏

だ。その眼は力強く、揺るぎの無い瞳をしている。

秋羅「……織斑、どうした？聞きたい事が在るのか？（ほう……一夏、何処までやれるか見てやろう。楽しみだ）」

一夏「秋兄！見ててくれ！俺の積極性を!!）はい！分からない所が！」

秋羅「……分からない、だと？（俺の説明不足か？多分それもあるだろうが、一夏は此処に来てまだ日が浅い。昔の俺や、兄の春我しゅんがのように独学で覚えるなんてのは、一夏には少しばかり無理がある、か……）」

彼の言う通り、一夏は学園に入学する間、ずっと千冬とオータムの下で匿われていた為、ろくに覚える暇がなかった……のが理由らしい。じゃあそれなら一緒に住んでいた円夏はと突き付けられれば、何も言えない。だが止まるんじゃねえぞ。

秋羅「（仕方ない、少し優しくしてやるか）」

エボルト『従弟に甘くないか?』

秋羅「……まあ、今回だけだ。それにずっと行方を暗まして円夏や千冬同様、アイツにも寂しい思いをさせたからな、その詫びだ。だが次以降は許さんがな、やれば鉄拳制裁、体罰は教育だ」

彼の話聞いたエボルトは…………。

エボルト『… すまん。甘いと言った俺がバカだった、お前は鬼…
いや悪魔だ』

エボルトの言葉を見殺して、秋羅は一夏に問うた。

秋羅「… で？何処が分からないんだ？織斑」

そう聞く秋羅に、一夏はハッキリと強く言う。

一夏「はい!!全部です!! (^ ▽ ^)」

秋羅

「……………」

千冬「……………」

オータム「……………」

真耶「……………」

箒「……………」

円夏「……………」

セシリア「……………」

生徒たち「……………」

その日……一組の教室から、ホラー映画でよく聞く男性の断末魔が聞えたと、隣の二組から証言が遭ったそうなの……。

その日の放課後。秋羅と千冬、それにオータムは、学園の敷地内にある噴水広場において一夏たちを待っていた。

一夏「秋兄！千冬姉！オータム姉！」

秋羅「…来たか」

千冬「一夏、頭の痛みは消えたか？」

一夏「え!?!あ、はい…」

そう言つて一夏の頭部に出来ているタンコブを見る千冬の眼は何処か呆れていた。それに指摘された一夏は両手で労わる様に自身の頭にあるタンコブをさする。

オータム「まあ、揃ったって事でいいか？秋羅」

秋羅「…ああ」

オータムの問い掛けに答えた秋羅。その返事を引き金に、円夏と箒

が問いかけてくるのだった。

円夏「秋邏兄さん!!今まで一体何処に居たんだ!？」

箒「そうです!!それに秋邏さんの髪と眼の色は一体!!」

彼女らが瞳を潤ませて言う姿に、秋邏は内心罪悪感を抱えながら答える。

秋邏「… お前らの問いに、俺は全てを答える事は出来ない「どうして?!」言えぬ事情がある」

一夏「言えない事情って…?」

秋邏「… それも言えん」

この秋邏の言葉に納得できず、一夏たちは食い下がる。当然であるう、今まで居なくなっていた身内が何も理由を話してくれないのは…。しかし秋邏は、自分とエボルトが立ち向かうべき存在…。ネメシスとの闘いに、千冬たちを巻き込むのは絶対にしないし、させない。そう決意しているのだ彼は…。

例え見限られ… 嫌われようとも…。

しかしそれでも一夏たちは納得はしていない。

一夏「そんなあ!!俺たち家族だろ!!なのに言えないなんて… 納得できない!!」

円夏「そうだ!!兄さん何故!?!どうして話してくれないの!?!私や… 箒や… 一夏は?それに千冬姉さんだって、まだ兄さんにとってそん

なに頼りにならないの!!」

箒「秋邏さんっ!!」

秋邏に食い掛る三人。しかしそれを見ていたオータムが割って入り諫める。

オータム「お前ら、久しぶりに会えたからってそう興奮して秋邏を困らせるな「でも！オータム姉!!」一夏、落ち着け、円夏と箒もな。俺だって未だに納得してねえよ、だけど秋邏には秋邏の目的があるんだ」

円夏「目的？それって一体……」

オータム「それはオレにも分からない。だが秋邏が、オレや千冬、一夏に箒、それにお前を傷付させまいと考えているんじゃないかと、オレは思う」

オータムの説明に、千冬が口を開く。

千冬「オータムの言う通りだ。兄さんは決してお前たちを巻き込みたくないんだ。それは円夏、兄さんの実の妹であるお前が一番分かっている筈だぞ」

円夏「……」

千冬に諭されて黙って円夏、そして暫く黙った彼女は顔を上げて、秋邏の瞳を見て呟く。

円夏「兄さん、これだけは聞かせて」

秋羅「…何だ」

円夏「兄さんはもう何処にも行かない？もう私たちの傍から居なくならない？もう私を…！」

そういう円夏の眼に再び涙が溢れ、一筋の雫が零れた。秋羅はそつと彼女の涙を指で拭ってやる。

円夏「に…兄さん…？」

秋羅「…：…約束だ。何処にも行かん」

円夏「ツ!!に、兄さあんっ!!あああああアツツ!!うああああっ!!」

彼の返答が嬉しかったのか、円夏は朝の時と同じように泣いてしまい、秋羅に再び抱き着き泣き続けた。秋羅も彼女の事をタダ静かに受け入れて抱きしめるのだった。

円夏「ご、ごめんね／＼／兄さん／＼」

一夏「ほんと、円夏は秋兄に甘えん坊だな、アハハッ」

秋羅「…全くだぞ、お前といい千冬といい、どうして俺離れ出来ない」

千冬「いいだろう別に…（私だって本当なら、沖縄で再会した時

みたくもう一度抱き着きたいのに……)」

秋羅の言葉に賛同するように、オータムと箒が喋る。

オータム「秋羅の言う通りだな（オレだって本当は秋羅に抱きしめてほしいのに……）」

箒「ええ、全くその通り（うゝ！円夏の奴ゝ！今朝といい、今といい、ズルいぞ!!）」

まあ、本心は完全に千冬と同意見のようだが、それよりも秋羅が円夏に対して何か聞きたい事があるようだ。

秋羅「……円夏、お前の所に春我から連絡は来てないか？」

円夏「え？春我兄さんから？」「ああ」えつと……」

秋羅「……どうした？」

気まずそうにする円夏。その理由は……。

【イメージBGM：仮面ライダーディケイド：サウンドトラック曲 怪奇の時間】

円夏「じ、実は…… 昨日の夜、春我兄さんから連絡があったの」

「「「っ!?!」」」

衝撃的な発言が飛び込んだ。織斑春我…… 秋羅の双子の兄弟で、彼と円夏の兄だ。だが、IS学園を卒業した共に謎の失踪を遂げている。その行方を暗ましている兄春我から連絡が在ったと言う話に秋羅は問いかける。

秋羅「あのバカはなんと!?!」

円夏「え? え、えつと…… //俺は命を狙われて追われているが、近々IS学園に行く」って……」

そう不安げに語る彼女に秋羅たちは哑然とする。

千冬「春我兄さんが……」

オータム「どういう……」

箒「何が……」

一夏「秋兄……」

皆不安が伝染したのか、全員が秋邏を見る。が、当の本人もまた、呑み込むのにやっとなという状態にあった。

秋邏「春我が……命を狙われている?……一体、何が……?」

自身に対するディザスターの襲撃……そして今度は兄が命を狙われているという不吉な報……一体彼の、秋邏の周りで、そしてこの世界で何が起きているのか……そして。

???
「……………」

そんな彼らを嘲笑う様に、IS学園を見下ろす謎の陰が一つ。その影はコウモリ状の角、胸や肩に煙突の如く伸びるパイプ。とても怪しく光るバイザーとマスク。

??? 「フフツ、さあ…… 最悪の実験を…… 始めようか、ハハツ♪」

続く……。

第八章 衝突

前回、実の妹である円夏、千冬の弟であり従弟でもある一夏、そして幼馴染の束の妹箒と再会した仮面ライダーエボルこと……織斑秋羅。が、その円満に終わるという中、妹円夏から兄春我からの連絡が在った事を告げられ、それどころか何と春我は、何者かに命を狙われているという。そして物語は、そんな終わりから始まる。

秋羅 「春我が…… 命を狙われている?…… 一体、何が……?」

千冬 「兄さん……」

箒 「秋羅さん……」

オータム 「秋羅……」

一夏 「秋兄……」

自身に対するディザスターの襲撃…… そして今度は兄が命を狙われているという不吉な報…… 一体彼の、秋羅の周りで、そしてこの世界で何が起きているのか。しかし秋羅は、不安な気持ちを封じ込めて千冬たちに視線を向ける。だが……

秋羅「…… 確かに春我の事は心配だ。だが奴もまた俺と同じ化け物並みの肉体能力を有している。そう安々と命を奪われないだろう、それにアイツはIS学園に来ると言ったのだろ? 円夏」

円夏「え！うん、確かに言ってた」

秋羅「… ならアイツは大丈夫だ。春我は一度言った言葉を違えた事はない。そうだろ？円夏」

円夏「兄さん… ああ！そうだ!!その通りだ!!」

そう己の妹に問う秋羅。これに円夏は共感したのか、自身の兄に対して強く頷き答える。そこに居るのは先ほどまで秋羅に抱き着き泣いていた少女ではなく、最凶の兄たちを持つその血筋を受け継ぐ者の顔であつた。

秋羅「… ならば俺たち家族はアイツが戻ってくるのを待つてるだけだ」

円夏「ああ！兄さん!!」

この二人の姿に、千冬や箒、オータム、一夏の四人も心から不安が消え、秋羅たちのように春我の事を信じようと決意する。

円夏「あ、そうだ」

円夏はもう一つ、何かを思いだしたようだ。

秋羅「… ん？どうした？」

円夏 「実は…… 春我兄さんが秋邏兄さんに頼みがあるって……」

秋邏 「頼み？何だ」

円夏 「うん、それが……」

その内容とは……。

春我 『円夏すまない、秋邏に大至急伝えてくれ！実は……』

みーさんの動画、録画をして欲しいんだよねえ。お兄ちゃんから
のお願いだお☆ウへへへえ（*≡▽≡*）』

秋羅「却下へ●へ●」

円夏「だ……だよねえ（?▽?;）」

話は終わり告げ、一夏たちは学生寮に向かう。

一夏「秋兄、俺たちもう寮に戻るよ」

秋羅「…：…そう言えばだが一夏、寮では同室の筈だ。ルームメート
は誰だ？」

そう、IS学園は完全な全寮制。そして生徒たちの全てが寮で生活する事を義務付けられている。これには理由があり、学園生徒および教師は、緊急時を除いた指定区域以外でのIS起動並びに使用は校則、国際条約で禁止されているのだ。ISという強力な兵器を扱う故、みだりに外での持込んで自己の勝手且つ、私利私欲に使用する事は決して許されない。

因みに寮では2人一組での生活が決められている。IS学園OBである秋遼は、それを知っている為、従弟である一夏との同居人が誰かを聞いたのだ。幾ら校則で義務付けられているとはいえ、思春期の男女が一つ屋根の下というのは流石に倫理上、宜しくない。

何より、IS学園は本来全寮制の女子校。そこに1人、男が居ると言うのは危険でイレギュラーな状態であり、最新の注意と警戒が絶対に必要なのだ。

もしこれを怠り、不祥事でも起きれば結果最悪の結末を辿るのは必定である。

一夏「俺のルームメイトは、箒なんだよ」

秋遼「・・・箒か、ならば問題はない、か・・・」

秋遼の言葉に箒が応え、彼を安心させようと自らを奮い立たせる。

箒「秋遼さん、どうかご安心ください！私は襲われないように日々鍛錬を積んでいますので！」

一夏「いや！襲わないし!!」

円夏「ああ、その通りだ。兄さん、箒はなあ、剣道の全国大会で優

勝したんだぞ」

秋邏「・・・ほう、すごいものだ」

箒「そ、そんなあ／＼／＼・・・」

一夏「無視かッ!!」

一夏のしようもないツッコみは無視するでしょう。淡々と賞賛する秋邏に対し、箒は赤く染まった顔を両手で包んで恥ずかしがる。

ここで説明しとこう。彼女がどうして秋邏にこうまで慕っているかというと・・・その当時、春我と秋邏、そして円夏の両親は多忙でよく家に居ない為、彼ら三人は父親の親戚・・・つまり千冬と一夏の両親に預けられた。

千冬と一夏の両親は、箒と束の両親と親交が在ったため秋邏と春我と円夏は、千冬たちと7人で居るようになった。

その中で、年長者である春我と秋邏の2人は、千冬や束、一夏や箒を、円夏と同様に自分の妹弟のように面倒を見ていた為、千冬たちは、春我と秋邏を自分達にとって掛け替えのない存在として意識するようになっていった。

一夏は秋邏や春我を、男として尊敬し、千冬や束、箒と円夏は、女性として淡い秘めたる想いを抱くようになった。特に、箒が剣道を始めた理由・・・それは秋邏が、篠ノ之道場の門下生であった事が大きい。自分もいつか彼のように強くなりたい、彼の傍らに並び立ちたいと願い、懸命に励んできたのだった。

だが、実の姉である束がISを開発した所為で、政府公認の特別保護プログラムによる強制的な引っ越しを余儀なくされた。

秋邏「・・・あの、泣き虫の箒がなあ・・・」

昔を思いだしたかのように呟く秋邏に、箒は彼の傍まで慌てて駆け寄る。

箒「む、昔のことですっ／＼／＼それにもう子供ではありませんっ／＼／＼！」

秋邏「…そう、だなあ。確かに…だが」

箒「え…？」

秋邏の手が箒の頭を撫でる。まるで親が子をあやしてやるかの如く、そんな彼のいきなりな行動に、箒は呆然と立ちつくしていた。

箒「あ／＼／＼ああ／＼／＼あ、あの／＼／＼！」

秋邏「…やはりまだまだ青い。この程度の事で気を乱しては未だ未熟だ」

箒「うう／＼／＼／＼」

そう言った後、箒の頭を撫でていた秋邏は、手を離して見下ろしながらに言う。

秋邏「…さっさと行け。明日には〃クラス代表〃を決めるからな。遅刻は決して許さん」

箒「は、はい!!」

秋邏「…円夏と一夏もだ、いいな？」

一夏「へえ〜」

余りに他人事であるがこの少年、己の立場が未だ理解できてと見える。この学園において「男」という存在は余りにもイレギュラーな存在なのだ。これを理由に晒しモノにされる事だってあり得るが、彼はそれに気づこうとしない。

秋羅「… お前、他人事だが？」

一夏「だって秋兄、俺は完全なドが付く素人なんだぜ？その俺が選ばれる訳が無いwww」

秋羅「……………」

千冬「……………」

オータム「……………」

円夏「……………」

箒「……………」

台詞に草を生やして己の選出の可能性を否定する一夏。しかし彼の返答、最早それは世に言う「フラグ」というものである。にも関わらず、この少年の笑顔は何と煌めいているのだろうか、しかしこれ

は二次小説、文章だけという形なので分からないだろう。

今の一夏の笑顔を例えるならば… 戦場で「帰ったらママが作るカレーを思いっきり食べるんだあー」っと、戦場から生き残り故郷に帰れる事を願うモブキャラ。死亡フラグが100%ヤベーイ、ハエーイ（フラグが立つ的な意味）である。

これにはもう秋瀨たちは「最早語るまい」っと内心思い、これに関して問うのはやめにした。

秋瀨 「はあ… 分かったから、早く行け！」

一夏 「う、うん！行こう」

円夏 「じゃあ兄さん、お先に！」

箒 「秋瀨さん！それじゃあ！」

秋瀨 「… 明日は寝坊するな、いいな？」

「「はい！」」

一夏たちは寮に戻っていった。それを見守った秋瀨たちもまた自らの部屋に帰ろうとする。

オータム 「んじゃあ！オレたちも行きますかあー」

千冬 「ああ」

秋瀬「・・・ そうだな」

ここでいきなりの地の文で申し訳がないが、此処でもう一度IS学園の寮についてお話ししよう。学生寮には学年別に分けられ、1年は下の階、2年は中段の階、3年は上段の階という上下関係が成されている仕組み。次に学園には生徒だけでなく教師にも寮が完備されている。そして教師たちにも連帯感を持ってほしいという想いもあつてか、当然2人一組での相部屋であるのだ。

それとだが、学生寮には寮長室というのがある。これも相部屋であり学年別に分けられている。が、1年の寮長室の住人は織斑千冬ただ一人なのだ。何故彼女が1人かと言うと……………。

千冬「(漸く兄さんとの同じ寮長室だあ！ありがとうございます！

轡木学園長！）（*≡▽≡*）」

秋羅「……………」
は……………」
なんだ、これ

学園長の計らいで、秋羅は千冬の同室相手となった。が、その事に
関して秋羅は既に轡木に聞かされている為、知っているし抵抗などし
なかった。ではなぜ今、秋羅は呆然とする発言をしたのか？それは、
今日から一緒に住む「部屋」に問題があったからだ。

千冬「ん？どうしたんだ？兄さん、元気が無いぞお♪フフツ／／／」

秋羅「……………」

エボルト『おいおい……………マジか？これ……………この部屋に住むの？ガ
チで？……………ウソだろお？秋羅（絶望）』

眼の前の「災厄」に、彼と同化している凶悪地球外生命体「エボル
ト」が、現実逃避も同然の台詞を吐いた。一体如何したというの
か……………それは。

床に散乱しているブラジャー、パンティ、テーブルにはビールの空き缶が数十本、既に食いかけらしいポテチの袋、つけっぱのテレビ。これは果たして20代の女性が住んでいるという部屋なのだろうか……。

秋羅「ん？」

その時、秋羅の視界に何かが映った。千冬の服なのだろう、しかし……。

秋羅「っ!!ぐう!!」

服から放たれたのは女性特有の甘く爽やかで、男ならずと嗅ぎたいと思うほどの健やかな香り……ではなくっ!!!

とても女性が着たとは思えない程の激臭、何日も放置したと思われる。これはもう都市を滅ぼせるバイオ兵器になれるのでは?と思える代物。これの持ち主とこれから共に過ごすのかと思うと、どの人間も「ウゾダドンドゴドーンッ!!」と叫ばずには居られないだろう……。

よって秋羅は……。

秋羅 「……………だ」

千冬 「ん？どうしたんだ？兄さん」

秋羅 「いいから掃除だあ!!」

千冬 「ひい!!」

その夜1年寮長室から、激しい怒号とホラー映画にありそうな女性のすすり泣く声が明け方まで聞えたと、生徒たちから怯えながらの証言があったそうだ……………。

そしてその翌日…… 授業を一つ潰してクラス代表を決める為の時間を設けた。

千冬「これよりクラス代表を決める！各々はソイツと思つた相手を推薦すること！それと呼ばれた本人の拒否権はない！いいな!!」（寝不足により、眼の下にクマが出来ている）

「「「「はい!!」」」」

代表を決める話し合いを主導するのは副担任の1人となつた千冬である。秋瀬はオータムと真耶と共に、千冬の傍らでそれを傍観。そして今、代表推薦が行われ、生徒たちは自分が「これだ」と思える“人物”の名を挙げた。

「織斑一夏君を推薦しますっ!」

「私もです!!」

「私もお!!」

一夏「えー!?オレエー?!」

「だってえー、せつかくの男の子IS操縦者だもん」

「そうそう！こういう時、持ち上げなきゃ♪」

当然一夏はこれに予想外だと言わんばかりに椅子を引っくり返して立ち上がり、これに異を唱える。

一夏「は、反対です!!俺は未だISの稼働時間は教官との模擬戦だけで30分未満なんですよ!!その俺がクラス代表をやるなんて無理です!!」

確かに一夏の言う通りだ。ここでISの国家代表候補生とは何か説明しよう。

国家代表候補生とは…その名の通り各国のIS操縦が卓越し、且つ優秀な腕前を持つ国の代表になれる候補者を意味する。候補生の役割としては、実戦データの収集や操縦技術の向上が主としており、国から専用のISを与えられているのだ。

そして一夏の居る1組にはその候補生が1人、それがセシリア・オルコットだ。彼女はイギリスの代表候補生なのである。専用機は「ブルー・ティアーズ」

他にも国家代表候補生は居る様だが、それはまたにしよう。そんなこんなでクラス中、一夏のクラス代表が決まったかのような流れになつており、この状況に窮地に立たされている本人は秋羅に助けを求め視線を送る……が。

秋羅「…織斑、先ほどの織斑千冬先生からの説明を聞いていなかったのか？呼ばれた者の拒否は許されん。例え稼働時間が30分未満であろうと、例え……模擬戦相手の教官が勝手に自滅して、不

戦勝したとしてもだ」

一夏「どうしてそれを!？」

秋羅「… 知らぬ訳がないだろうが、バカが！当時の模擬戦データを
見させてもらったが、お前ただつつ立って居ただけで、何も攻撃ら
しい事もしてないだろうが、ボケが!」

一夏「ううっ!」

因みにその時の一夏の模擬戦相手の教官はというと……………。

真耶「うゝ／＼／＼」

オータム「ハイハイ、恥ずかしかつたよなあゝ」

と、オータムに慰められている、その時である。

セシリア「納得できませんわ!!」

突如、セシリアが叫びながら立ち上がり、一夏の推薦に異を唱える。

セシリア「そのような選出に異議があります!!いくら珍しいから
と、無知で名ばかりのど素人に代表にするなど、恥知らずにも程がご
ざいますわ!!」

そう一夏に向かって睨みつけながら彼女のクレームは続くのだが、何故か彼女の矛先が秋邏へと向けられる。

セシリア「だいたいこんな極東の猿の国に居る事に苦痛を抱いて居るのに、その上、下等で愚かな男がわたくしの担任教師などという事態にも最悪の苦痛を抱きますわ!!最凶の男?スカーレットジエミニ?何ですか!そのくだらない異名は!!実にくだらないものですわ!!」

真耶「オルコツトさん!!秋邏先生に対して失礼ですよ!!生徒が教師に対するその態度、改めなさい!!」

先ほどまでオータムに慰められていた筈の真耶が突如、怒りに満ちた表情でセシリアに怒鳴る。これにはオータムに千冬は驚愕の表情を見せるが、それでもしつかりと生徒を叱れるくらい教師が出来る所に内心頼れると感じていた。

あと、セシリアが軽く日本をディスっていた事に関して、周りの生徒たちは確りと聞いて彼女に殺意と敵意の眼差しを送っていたのは言うまでもないだろう。

それに真耶が怒ったのは何もセシリアが生意気な態度を取ったからだけではない。自身の想い人である秋邏に対して酷い言葉を放った彼女に真耶は怒っていたのだ。それは千冬とオータムも同じ想いである。

因みに千冬とオータムの頭の中で、既にセシリアが悍ましい殺害方法で9999回以上惨殺されているという恐ろしい内容に関して、君たち読者と地の文さんとの内緒だよ(・ω・)

しかし、セシリアは尚も秋羅に対する罵詈雑言を止めようとしな
い。

セシリア「嫌ですわ!! だって事実ですもの。それに男風情が、最強
などと有り得ませんわ! 男は所詮、女にとって踏み台でしかありませ
んもの!!」

一夏「おい!! いい加減にしろ!! 俺ならともかく、秋兄をバカにする
な!!」

箒「そうだ!! 秋羅さんの事を何も知らないで知った口を叩くなっ
!!」

自分達にとつて敬愛する秋羅に対する暴言に、我慢できなくなつた
一夏と箒。しかし円夏だけは違った。必死に兄が受けている暴言に
自分も一夏と箒みたく言い返したいと思うが、その受けている本人が
冷静に腕を組んで、静かにセシリアの雑言を聞き流しているのだ、自
分も彼の様に耐えなくてはい! という思いに必死になっている。

しかし、次に放たれたセシリアの言葉で事態は一変する。

セシリア「所詮、ISに乗れるのだから何かしらの小細工でも使ったのでしょうか？それだったら正に下等で屑な男のやり口ですわね。器がしれますわぁ♪」

ブチっ!!

その時、円夏の怒りは有頂天になった……そして。

セシリア「まあ、ブリュンヒルデで在らせられる織斑千冬先生に担任の座を譲られて、ご自身は身を引いた方が宜しいのではなくて？それでしたら……ぐぶ!!」

生徒たち 「『『『『『『っ!?』『』『』『』『』』』』』」

千冬「なっ!!」

オータム「おい!!」

真耶「っ!!」

一夏「円夏!!」

箒「止め!!」

秋瀬「……………」

円夏「ハア… ハア…」

セシリア「ガハ……え……？」

何が起こったのか、それは……秋羅に対しての雑言にとうとう怒りを露わにした円夏が、彼女の鳩尾に渾身の拳を入れたからに他ならない。彼女の拳をその身に受けたセシリアは、一体何が起きたのかわからないと言った顔ではあるが、口から血を流しているのが手で触れて分かったのか、立ち上がって円夏に問い詰める。

セシリア「な、何を致しますの?!このセシリア・オルコットに対しての無礼!!許されると思ってえ!!!」

円夏「黙れえ——っ!!!」

セシリア「ひっ!!」

秋羅以外「っ!!?」

秋羅「……」

円夏「貴様は秋羅兄さんを愚弄した!!秋羅兄さんの事を知らないでイケシヤアシヤアと抜かすなあ!!」

彼女の殺意に満ち溢れた顔に、セシリアは完璧にビビッてしまったようだ。しかしそれでも円夏の怒りは収まらず、セシリアの胸倉を掴んで彼女の顔に向けて殴ろうとする。

セシリア「ひいっ!!」

円夏「きつさまあ!!!」

しかし……。

秋羅「…… やめろ円夏」

円夏とセシリア「っ!?!」

千冬「兄さん!!」

オータム「秋羅!?!」

真耶「先輩?!」

一夏と箒「秋兄!! 秋羅さんっ!!」

生徒たち「「「「「っ!!」」」」」

円夏がセシリアを殴ろうとした時、秋羅が制止の声をあげるのだった。これには皆驚き、円夏はセシリアの胸倉を掴んだまま秋羅に問いかける。

円夏「なぜだあ!?! 兄さん!! 何で!!」

秋羅「…… 何を言っても無駄なバカに、殴っても何の意味が無いからだ。だからやめろ」

円夏「だけどお!!」

秋羅「…… 俺は、やめろ」 っと言ったぞ? 円夏。直ぐに彼女を離す

んだ」

円夏「……………」

秋邏「円夏」

円夏「…………… 分かった、ごめんなさい兄さん」

秋邏の呼びかけに漸くセシリアを解放してあげた円夏は、直ぐに自分の席に戻って行った。あとだが、謝る相手を間違っていると思うのは地の文さんだけであろうか？

そんな事を思っていると、秋邏がゆつくりとセシリアに近づきながら話し掛ける。

秋邏「…………… セシリア・オルコット。貴様、男の俺が担任である事が苦痛だと言ったな？」

セシリア「え、ええー！そうですわ!!それが何か文句でも在りまして!!」

秋邏に対して毅然と対立する態度には敬服するが、相手が余りに悪い。何せ学生時代、こういう相手とは何度も遭遇し、何度も亡きも…………… 容赦がない程倒している。

秋邏「…………… 別に文句はない」

セシリア「なんですの!!」

秋邏「…………… ならば俺と、死合をしてみるか？セシリア・オルコット」

セシリア「……何ですって?」

秋羅からの宣戦布告に、セシリアは怒りを募らせる。

セシリア「男風情が!極東の猿風情があ!!このわたくしに勝負ですってえ!?!粹がるのは大概にしなさい!!」

秋羅「…そうか。ならば逃げるのか?逃げれば貴様は、その程度の無能と見なすがあ…。いいのか?」

セシリア「っ!!!いいでしょう!!やりましたよ!!決闘ですわっ!!わたくしが勝ったら、IS学園から即刻出て行って貰いますわよ!?!」

彼女の爆弾発言に、千冬たちは皆驚愕。異議を申そうとするが、秋羅はこれを…

秋羅「よかろう」

承諾したのだった。

千冬「なっ!?!兄さん!!」

オータム「秋羅!?!何考えてんだあ!!」

真耶「先輩っ!!」

一夏「秋兄っ!?!だめだあ!!」

箒「秋羅さんっ!!そんなあ!?!」

円夏「兄さん!!」

皆が慌てふためく中、秋羅は冷静に、冷徹に話す。

秋羅「……ならば宣言しよう」

セシリア「宣言?なにを?」

秋羅「仕合は明日、その時に……」

この時、千冬は内心セシリアに対して哀れんだ。何故に秋羅が最凶の男と言われたのか、そしてそれがどういう意味で付けられたのか、何も知らないセシリアに自分が出る事……それは彼女が出すかも知れない退学届を受け入れる準備だけである。

オータムと真耶も同じ思いである。もしかしたら自分たちが受け持つクラスから、退学者第一号が生まれるのではという思いが……。

だが、発した言葉とは決して消えないし取り消す事は出来ない……何故なら。

秋羅「……明日、貴様を容赦なく、慈悲なく……」

い。
秋邏の明確な殺意に満ちた瞳が、獲物を捉えているからに他ならな

秋邏「潰す」

第九章 蹂躪

前回、クラス代表を決めるという中、秋邏の予想通り一夏が選ばれた事になったのだが、それにセシリア・オルコットが異を唱え、挙句の果てには秋邏に対しても生意気な態度を取ってクラスの雰囲気をも最悪なモノへと変えてしまう。

そんな彼女に対して秋邏は決闘を提案。これにセシリアは受諾するが、何とセシリアは自分が勝てば秋邏に教師を辞めるよう要求するのだった。しかし秋邏は、冷徹に潰す宣言をする。

そして物語は、その出来事が過ぎ、夜、秋邏と千冬が同居する寮長室から始まる。

秋邏「……」

秋邏は今、自身が開いた端末からセシリア・オルコットの愛機：ブルー・テイアーズのデータを見ている。その表情はいつも通りで、唯々淡淡々として余裕すら見える。そんな秋邏に千冬はコーヒーを差し入れる。

千冬「兄さん、いきなりあんな事を言うなんてどうかしているぞ?」

秋邏「……何がだ」

千冬「何がって……」

千冬は呆れる。そんな彼女の代わりに、寮長室に来ていたオータムと真耶が口を開く。

オータム「秋邏あ、お前まさかさあ…… オルコットを本当に潰すつもりは、ないよな?」

真耶「そ、そうです!!いくら試合相手とはいえ生徒相手に、学生の時みたく容赦ない攻めで勝つ積りですか?!だったらやめてください!!そんな事をしたら間違いないなく...!」

秋邏「...オルコットはISに乗る事すら出来なくなるだろうなあ」

真耶の問い掛けに秋邏は冷たい答えをだすが、そんな冷血な彼にオータムは喰いつき、椅子に座っている彼を此方に向かせながら胸倉を掴む。

オータム「秋邏、いいか!!何でお前が春我と一緒に「スカーレットジエミニ」と呼ばれていたか、その理由をもう忘れたのかよ!!」

秋邏「...忘れてはいない。俺や兄の春我に挑んできた奴らを次々と再起不能したことから始まったのだったな」

スカーレットジエミニ... 聞くだけで中二病感溢れるが、実はこれには理由がある。だがまず、何故秋邏と春我の二人がISを動かす事になったのか、まずその理由から始めねばならない。

それは嘗て彼らが千冬たちの家に預けられた後の事である。その当時東がISを作り、千冬が白騎士に乗って世界を震撼させ変革させてしまった。

それにより見事女尊男卑の世界が完成し、その所為で女性が男を奴隷のように扱う者が現れられるようになった。

その時代の牙は、当然秋邏や春我、そして一夏や円夏の4人に向けられた。秋邏と春我は、一夏や円夏、箒を連れてISの展示会に行っていた。

この時、2人は高校3年、一夏と円夏と箒は小学2年であった。(因

みに千冬はI S学園に入学して寮に住み、束も家から居なくなっていた)

展示会は緩やかに行われたが、途中女性至上主義に染まった女たちのグループが、展示用のI Sを強奪。見学に来ていた多くの一般市民を虐殺していった。

この惨状から脱出しようとして一夏と円夏、箒を連れて逃げる秋羅と春我だが、テログループの1人が秋羅たちを見つけ、殺そうと引き金を引こうとしたが、丁度2人の後ろに、まだ奪われていない二機のI Sに接触、秋羅たちの手によって起動した。

だがどういう原理、または「何が原因」で2人がI Sを動かす事が出来たのかは、未だに誰にも・・・束でも解明できていない。

話しを戻そう。2人はぶっつけ本番で在るにも関わらず、素人とは思えぬ動きでテログループを制圧。男である筈なのにI Sを動かしたなどという前代未聞の大ニュースは世界を驚愕させた。

この事で、2人は直ぐに通っていた高校からI S学園に強制的に転校させられたのだった。

2人は高校三年生だったのだがI Sに関して知識が無い為、千冬と同じ学年に入れさせられた。しかし、学園に入れさせられたからと言って安心は出来なかった、何故ならI S学園にも女性至上主義に染まった者は居たのだ。

味方が余りに少ない彼らは、独学でI Sについての知識を学び、独力でI Sの操縦技術を極めて行った。

彼らの学園生活は、ある意味戦争だった。それは男だからと容赦なく牙を剥いて来る者が後を絶えなかったからである。その中には代表候補生なども居た。

なぜそうも敵が居たのか、それは彼らを忌み嫌う女性たちが噂を流したからだ。

ある時は、彼らを倒せば内申点が良くなる。

ある時は、彼らを倒せば専用機が貰える。

ある時は、彼らを倒せば学園で人気があつた千冬と親しくなれる。

等々、彼らを嫌う者たちは学園から2人を追い出そうとした。が、彼らは此処までの自分らに対する者達に、もう容赦はなかつた。

挑んでくる者達に、秋邏と春我の心に躊躇いは無かつた。それどころかその者たちを屠って行き、気づけば彼ら2人の手によって再起不能にされた者たちは次々に学園から辞めて行く。

これには不味いと、学園長である轡木が当時の学生たちに「今後、織斑兄弟に試合をするのはご法度である」という特別校則を設けた。

それ以降は2人に対して試合を申し込む者は居なくなつたが、彼らの手によつて学園から辞めていった生徒の数は500人まで上つた。

因みに「スカレットとジエミニ」と呼ばれるようになった原因は、待ち伏せて襲つてきた上級生10人に怪我を負わされ自身の血で濡れながらも、襲撃してきた者達を2人だけで叩き潰したことから、そう呼ばれるようになった。

オータム「あの時、マジでお前や春我の所為で学級崩壊するんじゃないかねえかつて思ったよ！」

秋邏「…懐かしいな」

オータム「バカツ!!懐かしむなっ!!いいか!決して生徒であるオル

コットの意思を壊すようなやり方はするなっ！絶対だぞ!!」

秋羅「・・・向こうの出方次第、だな」

オータムの問い詰めに秋羅は淡々と返し、再びセシリアのデータを見る。そんな秋羅の後ろ姿に千冬は不安な感覚が過る。「もしかたら秋羅は、自分に見せてくれた『あのドライバー』を使うのでは？」と・・・。

彼女の思うドライバー：：それは嘗て、自分と秋羅を襲い、彼の大切な人であるシスター、黒江愛紗を殺した凶悪な怪人、ディザスターを殺した力：：エボルドドライバー。

それが具体的にどんな力か、千冬は知らない。だがあの時見た彼女の第一印象は：：不安、そして恐れ。

あのドライバーが秋羅にどのような影響を与えるのか不安であった。それにエボルドドライバーはそもそもISじゃないと秋羅から聞かされている。

千冬「・・・」

だがそれ以上に彼女がもっと気になるのは、今の秋羅が憎しみでもってIS学園に来たのではと。。。が、それを言葉にして問う事は出来なかった。

もし今の秋羅の原動力が憎しみなのであれば、彼の進む道を妨げる事は彼の為になるのか？

それに今の彼に、亡きシスター愛紗が遺した言葉を伝えていいのかも不安であった。そんな彼女の想いを露とも知らぬ秋羅は突然立ち上がり、千冬たちに何も告げずに部屋の扉まで行こうとする。

そんないきなりの彼に、真耶が問いかけるのだった。

真耶「せ、先輩！どちらへ！」

秋羅「…少し夜風に当たってくる。あと、オータム」

「オータム「ん？何だ」

秋羅「…明日、俺が使う為の打鉄を用意しとけ」

オータム「ん、分かつ… って!!はあ!?!打鉄って!!待て!!秋羅あゝ!!」

オータムの呼び声を無視し、秋羅はそのまま外へと出て行ったのだった……。

オータム「…アイツ……」

真耶「先輩、どうしてあんな……」

千冬「………」

オータムと真耶は、今の秋羅が何かおかしいと思い始める。だがそれを口には出す事がどうしても出来ない。

千冬「………」

そして千冬はただ、秋羅が去った扉をずっと見つめていた……。

夜も更ける時間、秋羅は寮近くの噴水広場のベンチに座る。

秋羅「……………」

つと、その秋羅が1人になった事を確認したエボルトが、彼の脳内に話しかける。

エボルト『つで？どうすんだあ？明日の試合は。エボルになつて叩き潰すのかあ？』

秋羅『…その事に関しては、俺に考えがある』

エボルト『考えって…あんま良い考えとは思えねえなあ』

秋羅『…所でだ』

エボルト『ん？』

秋羅『…お前、フルボトルを使って別の形態変化は、可能か？』

秋瀬はエボルトが所有しているフルボトルに関しての質問を切り出し、それについてエボルトは答えた。

エボルト『まあ、フルボトルをそのままじゃあ出来ない。そのボトルの成分を利用した新しいエボルボトルにしなきゃならん。だが……』

秋瀬『ん?』

エボルト『……だがあ、お前がそう言うだろうと思っただけ……ほれ!』

そう言ったあと、秋瀬の体から二本のエボルボトルが光と共に出てきた、それは……。

秋瀬「……これは、不死鳥と、もう一本は……龍?」

それは嘗て、エボルトがまだビルドたちが居た地球の世界で、己の分身である万丈龍我の物になっている筈のドラゴンエボルボトルであった。これが何故エボルトの手に?(正式には、万丈の手元に在るのはグレートドラゴンフルボトルである)

エボルト『不死鳥のとは別に、そのドラゴンエボルボトルは、本来此処には無い筈の物』だ。だがどういう訳か、こいつの素であるドラゴンフルボトルが手元にあっただけだ』

秋瀬『……此処にはない筈の物、だと?エボルト、お前一体……』

エボルト『……今から話す事をよく聞いてくれ、実はな……』

エボルトは己が過去にやった事を喋りだした。自分が、こことは違う異世界の者で、その世界軸においてパンドラボックスの力を用いて火星の文明を滅ぼした。が、その文明の女王であるベルナーージュによつて一度エボルトドライバーを破壊され、肉体と精神を分離させられた。

しかしその隙に、自らの生体エネルギーをパンドラボックスに閉じ込める事で消滅は免れた。が、力を失いアメンバー状の不完全体になつてしまう。

しかし悪運が良い事に、地球から無人探査機が着陸してきたのだ。その探査機に己の分身… 遺伝子の一部をその探査機に、次の標的となる星を探す為に放つた。

その遺伝子とはある女性に憑依したつもりが、あろうことか女性の胎児に憑依してしまった。それがエボルトの分身である万丈龍我である。

残された精神は、自らの遺伝子の回収と新たな星を滅ぼす為、有人探査機で火星にやってきた石動惣一に憑依し、そのままパンドラボックスを地球に持つて行く。

その後は、原作の仮面ライダービルドを知っているだろうから省くが、数々の暗躍を行い、遂には完全体となつて己の野望を実現させようとしたが、最後は序章の冒頭で仮面ライダービルド… 桐生戦兎によつて潰えた。

（知らん人はDVDを借りて見てね（。・ω<））

エボルト『…とまあ、これが哀れな地球外生命体の話しさあ』

秋羅『…間抜けな奴だな』

エボルト『まあ、俺もよく考えればマヌケな事をしたと思ったさあ。もう少しこつちが有利になるよう……』

秋羅『そうだな……来るならこつちの世界に来て欲しかったな』

エボルト『そうだなあ……ってはい?』

秋羅『……』

エボルト『えつとおー……マジか?』

秋羅から意味不明な台詞が飛ぶ。これには聞き返すエボルトだが、秋羅は真面目に答えた。

秋羅『……当たり前だろうが。ISの所為で糞な世界になったんだからな、むしろこつちの世界に来てほしかったぐらいだ』

エボルト『そいつは、残念だったな』

秋羅『……ああ』

その時……。

???'「秋羅、さん……?」

秋羅「ん?」

彼が振り向くと、そこに居たのは……。

箒「あ…その、こんばんわ」

箒side

秋瀬さんがオルコットに対して決闘の取り決めを交わしてせいなのか、私は眠れなかった。その為、一度服装を寝間着から、ジャージ姿に着替えて噴水広場に行こうとした。

一夏「ん？箒、寝ないのか？もう遅いぞ」

箒「…ああ、どうしてか、少し夜風に当たりたいんだ。悪いが先に寝ていてくれ」

一夏「そうか…分かった。だけど余り遅くなるなよ？」

箒「ああ、分かっている。ではな？」

そう言い残して私は噴水広場に向かった。何故広場を選んだかは分からない、でも何故か行きたかったんだ。しかし噴水広場に行こうと思つて正解だったのかもしれない…。だつて！

箒「秋羅、さん…？」

秋羅「ん？」

箒「あ… その、こんばんわ」

そこには、秋羅さんが居たんだ！まさか秋羅さんが…。こ、この状況！夜空に雲一つなく星々が煌めいている中、深夜の噴水場に男と女が二人つきり!!ど、どうすれば!!

秋羅「… お前、こんな時間で… つとは言えないな。教師の俺が此処に居たんじゃなあ…」

箒「秋羅さんは… どうして…？」

秋羅「… 俺か？俺は夜風に当たりたくて来た… それだけだ。お前は？」

箒「わ、私は、そのう… 眠れなくて、それで夜風に当たりに行こうと… それで」

秋羅「…」

な、何故こんな緊張してしまうんだ!!これじゃあ変な女と思われてしまうじゃないかあー!!

秋羅「……こつちに来て座ったらどうだ?いつまでつつ立っている」

箒「へ?!いい、いいんですか!」

秋羅「……キョドるな、座るなら座れ。お前は待てをされてるか」

箒「は、はい!で、では!お言葉に甘えまして!!」

秋羅「……ああ」

私は秋羅さんの隣に座らせてもらった。嗚呼、何ていう幸運なんだろう、私は……。

箒「く／＼／＼」

秋羅「……懐かしいな」

箒「え?!何が、ですか……?」

突然、話しを始めた秋羅さんに私は聞いた。秋羅さんの横顔、素敵だ／＼／＼はあ／＼♡

秋羅「……篠ノ之道場の門下生だった時、お前、自分と同一年の子に負けたら必ず泣いて家出してたな」

箒「そ!そんな昔!!お、思い出さないでくださいっ／＼／＼」

う／＼／＼何て恥ずかしい過去を…でも確かに当時の私は負けず嫌いで、同い年の子に負けたのが悔しくてつい道場から逃げ出して、それでよく秋瀬さんが私を見つけてくれてたなあ…。

『う…グスツ…うう…』

『…箒、此処に居たか…よかった』

『あ…秋瀬おにちやあーんっ!!…う／＼！グスツ』

『…全く、心配したんだぞ？さあ、一緒に帰ろう。な？』

『うう…グスツ…うんっ！』

『…よし、手を繋いでやるから行くぞ』

『っ！うんっ♪』

必ずとって、秋瀬さんは幼かった私の手を握ってくれていたっけ…。

『…箒』

『ん？なあに？』

『…負けて悔しかったか？』

『… うん』

『そうか… ならお前は強くなれるかもしれない』

『え？ どうして？』

『… 負けた時の想いを力に変えろ。そしてそれをこれからも活かすように努力しろ。それが、俺からお前に言える言葉だ』

『うーん』

『… 出来るか？』

『うんっ！ やってみる！』

『… ああ、頑張れ。俺は応援してやる』

『ホントー!?!』

『… ああ』

そして秋羅さんの優しく暖かい手が、私を撫でてくれた。あの時の感触は今でも思い出せる。本当に温かった…。

でも、それから私は政府の保護プログラムによって引越す事になってしまった。姉さんがISを作ってしまった所為で…。

箒「…」

秋羅「ん？ どうした、箒」

箒「あ！いえ！別に！！」

昔の事を思い出したら、恥ずかしかつたなんて言えないっ!! そうだ、この際に聞いてみよう……。

箒「秋羅さん」

秋羅「……何だ」

箒「明日、本当にオルコットと試合を為さるのですよね？」

秋羅「そうだ」

箒「彼女は専用機持ちですが、秋羅さんは……？」

秋羅「明日は〃一応〃訓練機で行う」

箒「っ!？」

何だっつてっ!?! 訓練機で専用機の相手をするというのかっ!?!

箒「いくら秋羅さんでも、専用機相手では……!」

秋羅「……大丈夫だ。方法はある」

箒「秋羅さん……」

彼から漂う雰囲気、私が知っている秋羅さんのモノとは何処か違う。それが何のか分からない。でも……何故か怖い。とても人が持つて良いモノじゃない何かが、秋羅さんの中に住み巣食っているよ。うな何かが……彼を蝕んでいるように見えた。

箒「秋羅さん」

秋羅「… もう寝ろ。明日は見に来るのだろうか？」

箒「あ… はい… おやすみなさい、秋羅さん」

秋羅「ああ… おやすみ、箒」

私は… どうすれば良かったんだろう…。

そしてその翌日… 学園中に、織斑秋羅がセシリア・オルコットと対戦する事になったと、実しやかに広まってしまった。その為、アリーナにはその試合を見たいと多くの生徒たちが観客席を埋め尽く

した。アリーナに入れなかった者たちは、教室や職員室、食堂に備え付けられているモニターで観戦する。

そんなギャラリーが待っている中、ピットでは……。

千冬「……」

オータム「……」

真耶「……」

円夏「……」

箒「……」

千冬たちはピット内で秋羅が来るのを待っているが、その場の空気は何処か重い。そんな重苦しい中で一夏が口を開く。

一夏「秋兄……大丈夫だよな？」

円夏「当たり前だ！秋羅兄さんがオルコット如きに負ける訳がない！！」

オータム「まあ、円夏の言葉に同意だ。だけど秋羅の奴……って来たぞ」

千冬「兄さん……」

真耶「先輩！」

円夏「兄さん！」

一夏「秋兄、おはよう！」

秋邏「… ああ」

皆の下へ男性用のISスーツを纏った秋邏がとうとうやってきた。彼の様子は冷静そのもので、とても落ち着いている。

此处でどうでもいい話だが、ISスーツ姿からでも窺える彼の逞しい細マツチヨに、ピット内にいた女性作業員たちは皆、鼻血を垂れ流して息を荒くしていたらしい……。

それはともかくとして、オータムが彼に話しかける。

オータム「秋邏、お前のご注文通りに打鉄を用意してやったぜ」

オータムがそう言いながら、親指で自身の背後にあるIS… 打鉄を指し示す。

秋邏「… そうか、礼を言う」

オータム「なあ、秋邏よお。お前、本当に打鉄でオルコットの専用機とやり合う気か？」

秋邏「… ああ」

真耶「ですが、先輩はISに乗るのは久しぶりの筈です。だから……」

秋邏「… 負けるって？」

真耶に対して睨むように視線を向ける秋邏。それに彼女は慌てながらに弁明する。

真耶「あ、あの！ち、違います!!私ほただ、先輩が心配で…!!」

秋邏「…分かったから黙ってろ」

真耶「は…はい…」

一夏「秋兄…」

千冬「兄さん…」

秋邏の冷たい言葉に真耶は落ち込んでしまった。しかし彼はそんな彼女に、謝る処か慰めの言葉を一切掛けない。今の彼は氷の様に冷え切っている。そんな彼に、皆どう話せば分からずに居た。

彼らがそのように居る中、秋邏本人は気にせず打鉄のセッティングチェックに入っていた。

そして全ての準備が整い、彼は千冬たちを放置して打鉄に乗り込んでカタパルトに赴く。その後ろ姿を箒は不安げに見つめ、両手を胸の前で祈る様に組んでいる。

箒「…秋邏さん…」

秋邏「…」

彼がカタパルトに到達した事を確認したオペレーターが、管制室にて秋羅のISの脚部を遠隔操作してこれをロック。遂にはオペレーターから発進許可が下りる。

《発進！どうぞ!!》

秋羅「… 出撃する」

カタパルトが起動、秋羅は闘いの中へと飛び込んでいくのだった…。

アリーナに入場した秋羅は、久方ぶりのIS操縦に慣らし運転を行う。その動き、とてもブランクが在るとは思えない程の素早く鋭い。これに観客たちは大いに興奮した。

「秋羅様の動き凄い!!見た!」「うん!!やっぱり違うねえ!これがベテ

ランって奴なんだあー」

「嗚呼…一度でいいから秋瀬様のマンツーマンを受けたい〜!」

「それでもって…お前を、俺専用にしたいたい…ってえ言われたい〜!」

「「「「「きゃあああああああああ——っ♡」」」」」

観客たちの反応を管制室に移って見ていた千冬たち女性陣は…………。

千冬「(ブチっ!!)」

オータム「(イラッ!!)」

真耶「……………チツ」

箒「秋瀬さんに…………何て穢れた眼で…………<><><><>」

円夏「兄さんは…………渡さない…………<><><><>」

それを見ていた一夏はというと…………。

一夏「ヒエ〜ッ」

そして話しは再びアリーナに戻る。

秋邏が慣らし運転をしていると、そこへ漸くセシリア・オルコットが己の愛機……ブルー・テイアーズと伴いやつて来た。

セシリア「逃げずに良く来ましたわね」

秋邏「……」

セシリア「今からでも遅くはありません。降伏なさいな、そうすれば少しだけの恥になるだけでしてよ?」

秋邏「……」

セシリアのセリフに、秋邏は唯々聞き流しているのか、それとも端から聞いていないのか……。しかしそんな彼の態度に気付いたか、セシリアは激昂する。

セシリア「このわたくしが光栄に降参をお薦めしてあげたのにも関わらず、その無礼な態度!!もう許しませんわあ!!」

秋邏「……無駄話をやめろ、時間の無駄だ」

セシリア「そうですか!!では……!!」

そのセリフを合図に、セシリアは特殊レーザーライフル「スターライトMKⅢ」を構え、秋邏目掛けて発砲した。その直撃コースに対して秋邏は直ぐに上昇して回避、だがセシリアは続けてライフルを撃ち

続ける。

正確な射撃を行い、秋邏を追撃する。が、秋邏は焦る事無く一発一発を難なく躲しつづける。

セシリア「このう!!ハエのようにブンブンと!!目障りですわあ!!堕ちなさいな!!」

セシリアは秋邏の回避先を読んでの攻撃に移るが、これすらも秋邏は訓練機を操っているのにもお構いなしに眼にも止まらぬ速さで避ける。

未だ一発も当たっていない事に腹が立ったのか、セシリアは新たな攻撃手段に入る。

セシリア「許せませんわっ!!では踊りなさい!!わたくしセシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でるワルツに!!」

そう言葉を吐いた彼女の機体から、射撃特殊レーザービットを射出、すぐさま秋邏を補足し攻撃を開始。

秋邏「…データ通り、ビット兵器、か」

その攻撃に対して壁に追い込まれ、観客や千冬たちがハラハラします。だが秋邏を追い詰めた事に漸くセシリアは不敵な笑みを浮かべて勝利を確信する。

セシリア「漸く追い詰めましたわ!フフツ。さあ!無様に散りなさい!」

秋羅「……………」

その光景を管制室から見ている千冬たちは、息を呑む。

千冬「兄さん……！」

オータム「おいおい……不味いぞ！」

真耶「先輩!!」

円夏「兄さん!!」

一夏「秋兄!!にげてくれ!!」

箒「秋羅さん!!」

秋羅「……………」

セシリア「ふんっ！所詮は野蛮な男、この程度ですわ！さあ！終わりますわよ!!」

前方から一斉にレーザーが飛んでくる。このまま為す術なく秋羅はやられてしまうの……かと思っただが。

秋羅「……………馬鹿か？お前は」

セシリア「え？」

その瞬間、秋羅はセシリアの居る方向へ瞬時加速……イグニツションブーストを発動。それはISの後部スラスタ―翼からエネルギーを放出、内部に一度取り込んで圧縮して放出する。

その際得られる慣性エネルギーを爆発的に加速させて、勢いを用いて一斉射撃を回避、そのままセシリア本人に打鉄の基本武器である刀型近接ブレードを使って凄まじい速度での斬撃を繰り出す。

セシリア「がはっ!!」

秋羅「… フンツ!!」

セシリア「きゃあ!!」

秋羅「どうしたあ!!あれ程の威勢は何処へ消えたあ!!」

セシリア「ああっ!!きゃああああっ!!」

秋羅の容赦がない猛攻に晒されるセシリア。しかしなんとか反撃に移ろうとする。

セシリア「てい…… ティアーズっ!!!」

すると秋羅の背後を囲むようにビットが狙いを定め、一斉射。だが秋羅は、この反撃に対して躲しセシリアの背後に移る。

セシリア「早い!!わたくしの背後を取るなんて!?!」

秋邏「…そして、俺の前に居る貴様はビット攻撃の餌食…肉盾だ」

セシリア「っ?!?しま…:…があ!!きやあ!!!」

秋邏に背後を取られた上、更には自身のビット兵器の攻撃に真面に受けてしまい、地表に落下してしまう。彼女が落下していく中、秋邏はビットの全てを斬撃でこれを破壊。すぐさま彼女を追いかけ、地上に着陸する。

そんな状況を千冬たちは啞然としていた。

一夏「秋兄…:… 凄い」

円夏「兄さんはやっぱり最高だあ!!オルコットなんて敵にすらならない!!」

オータム「データを見た時、既にブルー・ティアーズの欠点に気付いていたってのか、流石だ」

真耶「はい。ブルー・ティアーズのビット兵器は確かに強力ですが、それは本体であるオルコットさんが相手と距離を一定に保つことで真価を発揮します。ですが…:…」

千冬「ビット兵器、最大の弱点は…:… 攻撃対象と、ビットを指揮する司令塔との位置が同一線上に並んでいた場合、それに対して正しく認識が出来ない事だ」

箒「秋邏さんはそれを利用した…:… ということですか」

千冬「ああ。兄さんはやはり凄い、そして強い。あの強さをずっと持ち続けるなんて生半可には出来ない……」

一夏「千冬姉でも無理なのか？」

千冬「兄さんと私では、体の作りが違い過ぎる。あの人と春我兄さんは、昔から何故か『異常な身体能力を持っていたのだから』」

一夏の問いに千冬はモニターを見ながら答える。その内心、彼に対して不安と心配の気持ちはどうしても消えない。

千冬「(兄さん…… お願いだから、あのドライバーは使わないで……)」

だが物事とは残酷なモノで、そう安々と形にはならない。そう彼女が願っている最中、セシリアを追い込んだ秋瀬はジワジワと詰め寄っていた。

セシリア「ハア…… ハア…… わ、わたくしが…… このセシリア・オルコットが、お、男如きに……！」

秋瀬「……………」

セシリアの満身創痍な姿に、彼は『ある判断をする』

秋羅「……もういい、か」

セシリア「え?… なっ!!?」

彼女が驚愕した。何故ならば、突然秋羅が自身が纏っていたISを降りたのだ。この異常な行動に、観客たちや、千冬たちがセシリアと同様に驚愕する。

千冬「兄さん!!」

オータム「あのバカ!!なにしてんだあ!!?」

真耶「危険です!!直ぐにでも中止を!!」

そう訴える真耶は隣に居るオペレーターに顔を向けるが、そのオペレーターも何処か困ったような表情でインカムに秋羅に連絡している。が……。

オペレーター「無理です!!秋羅先生に繋がりません!!おそらく向こうで此方からの通信を切っているものかと!!」

真耶「そんなあ!!」

オータム「んだとお!?!」

円夏「兄さん!!」

一夏「秋兄が… どうして…」

一夏と円夏も、なぜそんな事になるのかまったく理解が追いついて

いない面持ちで困惑している。そんな彼らと同じく、箒は不安げにモニターを見ながら両手を握りしめてモニターを見守る。

箒「秋羅さん……」

一方、アリーナでは打鉄から降りた秋羅にセシリアが声を荒げる。

セシリア「貴方っ!! どういう御積り!!? まさか、勝利の余裕とでも言う気ですの!!!」

秋羅「……これから、お前はただ蹂躪されればいい」

セシリア「なんですって……?」

秋羅「……エボルト、行くぞ」

エボルト『おいおい、本気でやるのかあ?』

脳内での会話で、己の生徒に情けを掛けようとしないう秋羅にエボルトが問う、だが……。

秋羅「……昨日、お前聞いてきただろうが」

エボルト『いや、そうだが……』

秋羅「……なにより、俺が試してみたいんだ」

エボルト『はあ? 試す? 何を…… って』

秋瀬『… そうだ。ISを相手に、エボルでどの程度やれるか体感してみたい』

エボルト『…:…:』

エボルトは絶句する。何れやるかとも思っていたが、自分のパートナーがここまで冷酷とは思わなかった。

しかしそんなエボルトの意思とは無縁に、秋瀬は懐からエボルドライバーを取り出す。

それに気づいたセシリアは指摘してきた。

セシリア「そ、それは…:…: 何ですか？」

秋瀬「…:…: 貴様を絶望させるものだ」

E V O L D R I V E R !!

エボルトの渋い声が響くと、同時にアジャストバインドによって巻かれ、コブラエボルボトルとライダーエボルボトル、この二つのボトルを上下に振り、振ったのち蓋の部分…: シールディングキャップを回して、それらをドライバーのボトルスロットへと差し込まれる。

COBRA!! RIDER SYSTEM!!

EVOLUTION!!

秋羅「……」

秋羅は無言でベルトに取り付けられているレバー：エボルレバーを回し、クラシックを感じさせるBGMが其の場合全体に流れ、秋羅の前後に高速ファクトリー展開装置：エボルモジュールが展開され、レバーの回転を利用してボトルをシェイク、ボトル内の物質：トランジエルソリッドをドライバーに取り込み、そこから変身用のボディが形成される。

Are You Ready?

秋羅「変：身」

彼の言葉で、前後のハーフボディがスライド、秋瀧の体と融合する。

COBRA! COBRA! EVOL COBRA!! フハハハハッ

!!

EVOL... PHASE 1

仮面ライダーエボル「...癖になるものだなあ。この感覚は... フツ」

セシリア「な! なんですよ!!」

彼が目の前で変身した事で、セシリアや観客、そして千冬たちは騒然となる。

オータム「おい!! 何だあれ!?!」

真耶「先輩の姿が変わりましたよ!?!」

一夏「秋兄が... スツゲエ!! カッコいい!! ヒーローみたいだ!!」

円夏「兄さん!! 一体、どうしたんだ!! アレは!?! 千冬姉さん!!」

円夏は、千冬に問いかける、が、その本人も.....

千冬「兄さん... アレが...」

余りの衝撃に、彼女は夢でも見ているのでは？という表情になっている。しかし千冬の隣に居る箒も、突然の事でどうしたらっていう反応だ。

箒「秋瀬さん……」

セシリア「あ、貴方!! 一体何者ですの!!?」

仮面ライダーエボルの姿に、冷静さを保つ事が出来ず問い詰める。それに対してエボルが口を開く。

仮面ライダーエボル「……そうだなあ、仮面……ライダー……エボ
ル」

【イメージBGM：仮面ライダービルド挿入歌：EVOLUTION】

セシリア「仮面ライダー……エボル」

仮面ライダーエボル「では……処刑を始めるとしよう」

エボルは回し蹴りを繰り返す。その一撃はセシリアの顔の左側に直撃、吹っ飛ばされる。その彼女をエボルはイグニッションブーストを超える様な速度でこれを追撃。壁に飛ばされている中の彼女を捕え、袋叩きにし始める。

仮面ライダーエボル「ウオオオオオオツ!!!」

セシリア「がは!!ぐぶ!!!ぎゃば!!!」

仮面ライダーエボル「グオオオオオオツつつ!!!」

セシリア「がぶつ!!ぐがあ!!!がっはあ!!!」

エボルはISを纏っている彼女に容赦なく殴り、蹴り、スレッジハンマーを叩き込み、彼女の頭上に踵落としなどを決める。この連撃にセシリアは腕を何とか動かして……。

セシリア「い……インター……セプター!!!」

彼女は接近戦用のショートブレード……インターセプターを使って反撃に入る。が……。

ガシツ!!!

セシリア「っ!!?」

彼女の反撃：… まあ、エボルにとっては犬が噛みついてきた程度のレベルなのだろうが、その攻撃は哀れにもエボルの片手：… いや、指二本で止められてしまった。

仮面ライダーエボル「：… おいおい、まさかこれで終わりか？ つくづく無能だなあ？ お前は。ISに乗っていた俺すら勝つ事ができず、その上この有様：… 俺にあれだけの威勢を振りまいておいて随分と惨めだなあ、オルコツト」

セシリア「あ：… ああ：… あ、あの：…」

彼女は恐怖に支配され、最早まともに喋る事ができない。しかしそれでもエボルは止まらない：… だがその時。

??? 「おいおい、か弱い女の子に対して随分と酷いじゃないかあゝ」

仮面ライダーエボル「ん？」

セシリア「あ：… ああ：…」

エボルと、ボロボロと成り果てたセシリアの前に現れたのは、胸や肩に煙突の如く伸びるパイプ、頭部がコウモリ状の角、とても怪しく

光るバイザーとマスク。

その謎の乱入者に、エボルは殺気を込めて問い質す。

仮面ライダーエボル「貴様……誰だ？」

??? 「あゝ！ごめんねえ、俺の名は……ローグ、ナイトローグ。以後よろしく……ハハッ♪」

しかしして乱入者……ナイトローグは、不敵に笑い声を漏らすのみである。

続く………。

第十章 怪物

前回、セシリアとの決闘に挑んだ秋羅は、訓練機打鉄で専用機持ちである彼女を圧倒する。そして彼はセシリアの前で仮面ライダーエボルに変身、一方的な蹂躪を行う。だがその途中、仮面ライダービルドの世界の怪人・・・ナイトローグが現れた。

エボルと、ボロボロと成り果てたセシリアの前に現れたのは、胸や肩に煙突の如く伸びるパイプ、頭部がコウモリ状の角、とても怪しく光るバイザーとマスク。

その謎の乱入者に、エボルは殺気を込めて問い質す。

仮面ライダーエボル「貴様・・・誰だ？」

???↓ナイトローグ「あく！ごめんねえ、俺の名は・・・ローグ、ナイトローグ。以後よろしく・・・ハハッ♪」

しかしして乱入者・・・ナイトローグは、不敵に笑い声を漏らすのみである。

この突然の事態に、皆騒然として誰も理解出来ずに居た。

オータム「おい!!誰だ!!アイツは!?!」

真耶「分かりません!! オルコツトさんのピットから現れたようすが!」

円夏「兄さんが危ない!! 中止を!!」

一夏「でも秋兄とは連絡出来ないはずだろ?! どうやって!」

箒「秋邏さん… 千冬さん!!」

箒は千冬に何とかして欲しくて彼女の方を見るが、当の本人もどうすればいいか分からずに…。

ダンツ!!

円夏たち「!!!!!!!!!!」

千冬「っ… 兄… さん…」

彼女は行き場の無い無力感を何処にぶつければいいのか分からず、壁に殴りつけ、八つ当たりをしていた。

その光景に円夏たちは呆然として、何も言葉が思い浮かばず千冬の背中を見つめるしかなかった。しかしそんな事の中で、秋邏… 仮面ライダーエボルは乱入してきたナイトローグを一瞥する。その時、エボルトが話しかけてきた。

エボルト『おい秋邏』

仮面ライダーエボル 『… 何だ』

エボルト 『実はさつきからなんだが…』

仮面ライダーエボル 『どうした早くしろ』

エボルト 『奴の体から感じるんだ…』

仮面ライダーエボル 『… 何を』

エボルト 『… “ネメシスの存在”を…』

仮面ライダーエボル 「… 何」

エボルトの言葉に呼応するかの如く、ナイトローグから全く別の声が発せられた。

??? 『いやあく、中々に良い相棒を得て、俺様超うれぴーよお♪エボちゃん♪』

エボルト 『ネメシス…！』

??? ↓ネメシス 『あー！そうだあ！お前のボトル、勝手にコピーさせて貰ったけど… まあ許してくれやあ』

エボルト 『お前!!いつのまに!!』

ネメシス 『いつって… お前に直したパンドラボックスを渡す前

さあ。でも小細工はしてないだろう?』

エボルト『コピーをしている時点で何処が小細工してないだあ!!まさか・・・他のボトルも・・・!!』

ネメシス『ああ♪そうさあ、凄いだろう?俺ってさあ〜』

エボルト『お前はどこまで・・・!』

ネメシスの話のエボルトが激昂する中、エボルトが口を開く。

仮面ライダーエボルト「今の声が・・・ネメシス、という事は・・・」

それに関してナイトローグが答える。

ナイトローグ「そう!俺こそがネメシスの・・・相棒さあ♪よろしくねえ〜エボルトくん♪」

仮面ライダーエボルト「貴様あ・・・」

ナイトローグに対して激しい殺意をぶつけるエボルト。それにナイトローグはおちよくなる様な態度で喋る。

ナイトローグ「まあまあ、そう怒るなよ〜!あ・き・ら・くん♪ハッ♪」

仮面ライダーエボルト「・・・貴様等はディザスターという怪人を知っているな」

エボルトの尋問に、ナイトローグはふぎけたような態度で思い出そうとする。それも腕や手を使ったジェスチャーめいた動きと共に・・・。

ナイトローグ「ん〜？デイズスター… デイズスター… ん〜」

ネメシス『おいおい相棒、俺たちの駒だった奴だろう〜』

ナイトローグ「あ〜！そうだそうだ！居たなあ〜、あー居た居たあ〜。俺の事を教祖様みたく崇めてたなあ〜。何でも妻や娘たちに酷い仕打ちを受けてたって言ってたし… まあ、最後は殺したらしいけでねえ。で？そいつがどつたの？」

仮面ライダーエボル「……………」

ナイトローグは全く興味なさそうに聞く姿に、エボルの拳が殺意と殺気が静かに込められていく。それを間近でみていたセシリアは更なる恐怖で悲鳴をあげるのだった。

セシリア「ヒイイイイイイイイイイイツツツ!!!」

ボタンっ!!!

そしてとうとう耐え切れなくなった彼女は気を失い、ISも強制解除された。しかしエボルは倒れた彼女の事などどうでもいいと言わんばかりに放置する。

ナイトローグ「おいおい、いいのかあ〜？大事な生徒が倒れたぞお？」

エボル「… 知らん」

ナイトローグ「そうかい… フフフツ」

千冬「急ぎ避難指示を!!早く!!」

オペレーター「は！はい!!アリーナに居る全ての学生へ！教職員の指示に従い、最寄りのゲートから避難してください！繰り返しです…」

オータム「おい!!秋羅とオルコットはどうすんだ!？」

真耶「ですがこちらの通信には…！」

一夏「だったら助けに!!」

円夏「どうやって!?既に避難は始まっている。それにピットの方に行ってもISは無いぞ!!」

一夏「だったらこのまま秋兄たちを見捨てるのかよお!!」

箒「一夏！落ち着け!!」

苛立つ一夏に箒が声を出して落ち着かせようとする。しかしそれでもこのような状況下で落ち着けと言われて納得できないのが現状である。しかし事は進んでいる。

セシリア「あああああああああああああああああああああああ
あああつつつ!!」

仮面ライダーエボル「何だ… オルコットに何をした!」

ナイトローグ「ん？どうしてそんな事を聞くんじゃあ？別にどうでもいいのだろう？それに所詮、その小娘はただの代表候補だ、国家代表じゃない。ISは元々女の為の兵器……だがあ言い換えれば、女が一匹死んでも代えは幾らでも居る。お？見ろ」

仮面ライダーエボル「ん……なに!？」

光に包まれたセシリアの体が変異していく。腕や足が植物のツタのように変わり、頭や胴体がバラの花みたく変貌する。この突然変異した姿にエボルは驚愕した。

仮面ライダーエボル「これは!？」

エボルト『こいつは……スマッシュだ』

仮面ライダーエボル「スマッシュ?！」

エボルト『スマッシュとは……』

スマッシュとは……ネビュラガスと呼ばれる特殊なガスを注入されることで生身の人間から怪人へと変貌する。一種の改造人間である。スマッシュとなった人間は基本的に一切の意思疎通が不可能であり、無差別に人間を襲い、破壊衝動に突き動かされる。

しかしスマッシュになるにしても、素体である人間のハザードレベルが虚弱であった場合、つまりハザードレベルが1の場合、ガスを注入された時点でその人間は死ぬ。

仮面ライダーエボル「何だと……?！」

エボルト『だがこの世界には、ネビュラガスは存在しない。それが……』

仮面ライダーエボル「オルコットが変異するのはあり得ないと言うのか？」

エボルト『ああ』

そう。この世界にネビュラガスは存在しない。そもそもネビュラガスとは……嘗てビルドの世界軸にて、エボルトが憑依した石動惣一がパンドラボックスを使って、火星探査の帰還セレモニーで引き起こしたスカイウォールという特殊な巨大壁から発生していたガス。本来地球には存在しない。

ナイトローグ「ああ！それは“ネビュラガスと同質の物”を使っているからさあ〜」

仮面ライダーエボル「何……？」

エボルト『一体何だそれは!!』

エボルトの問い詰めに、ナイトローグは逸らかすような態度を見せる。

ナイトローグ「うーん、どうしようかねえ…… あ！そうだ！そいつを倒したら、教えてやってもいい」

仮面ライダーエボル「貴様あ……」

千冬「兄さん!!!」

円夏「秋羅兄さん!!」

箒「秋羅さあんっ!!!」

そんなエボルの苦戦する姿に、ナイトローグは面白がる。

ナイトローグ「おいおい、このままだとプチトマトみたいにグチャつてなっちゃうぞ〜?」

ネメシス『このままデスゲームどころじゃあ無くなるなんざ、笑えないなあ〜エボちゃんw w w w』

エボルト『喧しい!!くっそ!!秋羅あ!!!』

エボルトの呼ぶ声に、苦しんでいる為まともに返事できないエボルト。しかし彼の手には、ある一本のボトルが握られている。

仮面ライダーエボル「ぐう!!」

エボルト『おい!!秋羅!!それを使う気か!!』

仮面ライダーエボル「どうせ今日使う予定だったんだ…が!ううっ!!…もしアイツを倒したら…どうなる」

レバーを回し、再び高速ファクトリー装置を出現させ、エボルの前方に新たなトランジエルソリッドが現れる。

そして……。

A r e Y o u R e a d y ?

仮面ライダーエボル「……エボルアップ」(このセリフ、考えてみました)

新たなボディがエボルと融合し、新たな姿をしたエボルが現れる。

DRAGON! DRAGON! EVOLDRAGON!! フハハハ
ハハハツ!!

E V O L . . . P H A S E 2

ローズスマツシュ「シャアアアっ!!!」

仮面ライダーエボル「……」

ドラゴンを模したデザインの新たなエボル……仮面ライダーエボル、エボルドラゴン。

ナイトローグ「おいおい、変わっちゃったよ」

ネメシス『ハザードレベル…… 285、凄いもんだあ。これなら…… フフッ』

ナイトローグ「ああ♪アイツは、スペシャルだ。だから…… これからも強くなつて貰わないと…… ハハッ♪」

まるで、エボルが新たな力に目覚めた事に対して自分の事のように嬉々としているナイトローグとネメシス。しかしそんな奴らの思惑など知らずに、エボルドラゴンになった仮面ライダーエボルはローズスマツシュに反撃に入った。

仮面ライダーエボル「ウオオオオオオオオ——っ!!!」

ローズスマツシュ「ジャアアア——ッ!!!」

ツタを使って返り討ちにしようと攻撃するがそこをエボルが寸前で躲し、それと同時に躲し際に裏拳、次に太ももへローキック、これに苦し悶えている所へ強烈なアツパーを浴びせる。

仮面ライダーエボル「ヌオオオオオオオオオ——っ!!!」

ローズスマツシュ「ジャアア!!!がはっ!!」

仮面ライダーエボル「ゼエアアアアアアア——ッ!!!」

ローズスマツシユ「ガっ!!ぐっ!!あゝ!!」

エボルの隙の無い容赦ない攻撃をローズスマツシユの胴体、頭部などを中心に叩き込む。これにたまらず逃げようとするローズスマツシユの頭部を鷲掴み、逃亡を阻止。すかさず攻撃を続行して追い込む。

ローズスマツシユ「グギャアアアアアアアア——っ!!!」

仮面ライダーエボル「…お次はこいつだ」

するとエボルが手を翳すと、そこに剣のような武器が現れた。その剣…ビートクローザーを出現させ、瞬時にローズスマツシユに斬りかかる。ビートクローザーを扱う動きがまるで刀を扱う一流剣士みたい、間断ない鋭い斬撃を奴を斬り続けた。

ローズスマツシユは反撃どころか回避すら出来ず、エボルに為す術なく斬られる。

仮面ライダーエボル「フツ!!」

ローズスマツシユ「ぎゃあ!!」

仮面ライダーエボル「オオオオツ!!!」

ローズスマツシユ「ガアアアアアッ!!!」

仮面ライダーエボル「セイヤア!!」

ローズスマツシユ「ぶぎゃあ!!」

ローズスマッシュシュを必殺技で叩き倒した。するとローズスマッシュシュが煙に包まれたと思ったら、元のセシリアの姿に戻った。

セシリア「う……うう……ん……」

彼女は気絶しているようだ。それを確認したエボルは、再びナイトローグと対峙する。

仮面ライダーエボル「条件通り、スマッシュシュを倒したぞ！さあ！答えろ！」

ナイトローグ「……『ネビュラ細胞』」

仮面ライダーエボル「なに？」

エボルト『何だ？それ』

突然のワードにエボルとエボルトは理解できていない。しかしナイトローグの話は続く。

ナイトローグ「この学園に知っている奴は居る筈だぞ？例えば……学園長」

仮面ライダーエボル「轡木さんが？何故？」

ナイトローグ「まあ、それは自分で考えてくれや。ではエボル……
See You♪」

仮面ライダーエボル「ま!!待て!!」

しかし時遅く、ナイトローグは消え去ってしまった。

エボルト『逃げられた…か』

仮面ライダーエボル「くっ！」

それから、漸く教師や上級生の部隊が突入してきて、セシリアを保護。その後、報告を受けた轡木は、千冬やオータムと真耶、そして渦中の人物である秋瀬が学園長室に呼ばれる。

セシリアに関してだが、彼女は学園に完備されている医務室にて療養中。未だ目覚めてはいない。

そんな状況の最中、学園長室では物々しい空気が漂っていた。

千冬「……………」

オータム「……………」

真耶「……………」

轡木「……………」

秋瀬「……………」

何とも居心地が最悪な雰囲気であろうか。しかしその中でも秋瀬の態度は淡々と、冷静である。その彼に轡木が口を開く。

轡木 「……では秋羅君、お答えしてくれますか……？」

秋羅 「……」

轡木 「君が見せたあの力、そして乱入してきた侵入者についても……」

秋羅 「……」

タダならぬ空気の中、秋羅に対する尋問が、始まった……続く。

第十一章 質疑

前回、セシリアとの試合に乱入してきた怪人、ナイトローグと対峙した仮面ライダーエボル。しかしナイトローグの魔の手によってセシリアはスマッシュという怪物に変貌してしまう。これに仮面ライダーエボル……織斑秋羅は、スマッシュとなってしまったセシリアと戦う。しかし凶暴となった彼女の力は計り知れず、苦戦を強いられる。

しかし、途中エボルはエボルトによって生み出されたドラゴンエボルボトルを使用。エボルドラゴンとなってローズスマッシュとなったセシリアを圧倒し、これを撃破。見届けたナイトローグは、エボルに奇妙なワード……“ネビュラ細胞”という言葉を残して消え去り、一先ずの終息……とは行かず、轡木に尋問される事となってしまうのだった。

千冬「……………」

オータム「……………」

真耶「……………」

轡木「……………」

秋羅「……………」

何とも居心地が最悪な雰囲気であろうか。しかしその中でも秋羅の態度は淡々と、冷静である。その彼に轡木が口を開く。

轡木「……では秋羅君、お答えしてくれますか……？」

秋羅「……………」

轡木「君が見せたあの力、そして乱入してきた侵入者についても……」

秋羅「……………」

これはとても有耶無耶に出来る様な状況ではないという流れ。その中で轡木は秋羅に説明求める。

轡木「秋羅君、私は学園の最高責任者として今後の学園の安全と、生徒たちを守らなければなりません。あの侵入者が今後再び現れる可能性がある以上、それを知っているであろう君に説明して欲しいのです」

秋羅「……………」

しかし秋羅は轡木から一度も眼を離さず、ただ冷静に見つめ無言を徹している。そんな彼にオータムが荒げた声を出す。

オータム「秋羅!!お前、ダンマリはやめろ!!お前状況分かってんだろ!?!このまま黙ったままでいられない事は絶対に出来ないって!!」

真耶「そうです!!お願いします、先輩!どうか話してください!!」

オータムに真耶までも秋羅に説得をする。しかしそれでも秋羅は沈黙を続ける。これに「やも無し」という表情で、轡木は他の教師たちに命じた。

轡木「…仕方ありません。先生方…織斑秋羅先生を拘束、軟禁してください」

千冬「…」

オータム「おい!!そんな!!」

真耶「学園長!!?」

オータムと真耶、そして他の教師たちは余りの事に驚愕し、轡木に問い質す。

「こ、拘束…でありますか…?」

轡木「ええ。このまま彼が素直に話してくださらないということなので、致し方ありません」

「で…ですが…!!」

轡木「これは学園長命令です！直ちに織斑秋羅を拘束しなさい！！」

この命令に誰も逆らえず、オータムと真耶、千冬以外の教師が秋羅の周りを取り囲み、今にも彼を捕獲しようとするが……。

秋羅「ほう……この俺を、捕えようとする気か……？」

彼から夥しい禍々しい殺気に、誰もそれ以上にじり寄る事が出来ず、逆に恐怖で動けずに震えだす。

「あ……あの……」「む……無理です!!」「こ、怖い!!」「ひいいいっ!!」

恐怖感漂う雰囲気を作る秋羅に、オータムと真耶が彼を止めようとする。

オータム「秋羅!!やめろ!!」

真耶「先輩!やめて!!」

つとその時である……。

千冬「……学園長」

轡木「ん?」

オータム「ち、千冬!!」

真耶「千冬先輩!」

秋羅「……」

突如、黙っていた千冬が口を開いた。その表情は決意したような面持ちである。すると彼女は語り出した。

千冬「秋羅先生……いえ、兄さんは以前にも似たような状況に襲われた事があります」

轡木「似た……状況?それは一体……?」

秋羅「おい!!千冬!!」

秋羅は声を荒げ、千冬を止めようとするが、彼女はやめず説明を続ける。

千冬「それは、私が兄さんと沖縄で再会した際の事です……実は」

彼女は説明した。秋羅が沖縄で診療所を構え、その近くの教会にて、シスターをしていたIS学園OGである黒江愛紗と共に、身寄りのない子供たちと日常を過ごしていた事を。しかしその日常を突如奪いに現れた怪人……デイザスターの襲来。

そして秋羅は怒りと憎しみによつて、エボルドライバーという力を手にし、デイザスターを殺した事。そして彼の憎しみの原因が……デイザスターによつて、殺された愛紗の死の事も……。

これを聞いた轡木とオータムたちは、皆遣る瀬無い想いをもった顔

で秋羅を見た。しかし秋羅は、それを暴露した千冬に対し怒りの表情を向ける。

秋羅 「千冬!!お前!!何を話して…!!!」

千冬 「兄さん、いい加減にしろ!!」

秋羅 「何!?!」

千冬 「今の兄さんは憎しみで可笑しくなっているのが、自分で分からないのかッ!?!」

秋羅 「俺が可笑しいだど!?!ふざけるなあ!!!」

千冬 「ふざけていない!!」

互いに譲らず、言い合いへと発展する。そこに轡木が割って入りとめた。

轡木 「お二人共、やめなさい。秋羅君、君はそのエゴルドライバーなるものを今も持っていますか?」

秋羅 「…持っていますが、どうすると言うのですか?」

未だに怒りが消えない状態の秋羅は、敵意に満ちた眼つきで轡木を睨む。

轡木 「それを…こちらに渡していただけますか?」

秋羅 「…なぜに?」

轡木「こちらで解析したいからです。報告では、そのドライバーはISでないという事なので…」

確かにエボルドライバーはISではない。そのISではないエボルドライバーの力が、世界最強の兵器であるISを簡単に凌駕するという事態に、実は千冬やオータム、真耶以外の教師たちは内心恐怖している。

この女尊男卑の世界で、女が世界の中心になる切っ掛けであり、最強の兵器でもあるISを何の支障もなく倒す力を、嘗てIS学園において最凶の男と畏れられた織斑秋羅の手に在る事に…。

しかし秋羅は、この轡木の言葉に…。

秋羅「… 断る」

千冬「兄さん!!」

オータムと真耶「秋羅!!—先輩!!」

教師たち「!!!?」

轡木「… なぜですか? 秋羅君」

秋羅「… エボルドライバーは俺の所有物だ。それを他人譲るほどお人好しではない」

轡木「ですが… !!」

しかしそんな時、秋羅の体内に同化しているエボルトが彼に話しかける。

エボルト『秋羅、エボルドライバーを渡しても大丈夫だぞ?』

秋羅『エボルト?』

エボルト『渡した所で問題はない。それに、ボトルやパンドラボックスは今、お前と同化している俺の中に在る。つまりはお前の体の中に在るのと同義だ。その為ボトルやボックスは無事だ』

秋羅『… 了解した』

エボルトの話しに納得した秋羅は、懐からエボルドライバーを取り出し轡木のデスクの上に、静かに置いたのだった。この彼の変わり身の早さに、轡木は問い質した。

轡木「秋羅君、一体何のつもりですか?」

秋羅「… 何のつて、とうとう認知症でも御成りになってしまったのですかあ? 轡木学園長。貴方がエボルドライバーの提示を求めたのでしょうか。大丈夫ですか? それとも要らなくなりましたか?」

対して辛辣な態度を見せる秋羅に、轡木は若干イラツとしながらも言う。

轡木「… いえ、ならばこちらでそのドライバーを調べさせて貰いますよ?」

秋羅「どうぞ? ご勝手に。正し調べ終えたら…」

轡木「ええ、必ずお返しますよ」

そう言い放った轡木がエボルドライバーに触れようとしたその時、秋邏が彼に質問を投げ掛ける。

秋邏「… そうでした。自分も学園長に質問があります」

轡木「ん？何でしょうか？」

秋邏「… “ネビユラ細胞”という言葉に、何か心当たりは御座いませんか？」

彼が放ったこのワードに、轡木は…。

轡木「っ!!!？」

周りの者たちは一体何のこつちや知らない顔だが、本人はかなり焦りが入り混じった驚愕の表情で、秋邏を見つめたが直ぐに眼を逸らし、誤魔化しはじめる。

轡木「な、何の話しか…ぞ、存じませんが!!し、知りません!!!」

秋邏「…。」

エボルト『おいおい、このジジイバカだろう？その顔は知ってますって言ってるもんだろが。こんな奴が学園長で大丈夫か？秋邏』

秋羅「…： しかたないさあ。何せこの糞ジジイの妻が国際IS委員会幹部の一人で、その恩恵で成り上がっただけの “名ばかり学園長” だったので、昔から付けられたあだ名だ。実際このジジイ、自分の妻には何も反抗できずに唯々従っている人形みたいな奴だからな。

まあ唯一の救いが、彼の妻が女尊男卑主義を激しく嫌って委員会を牛耳ってるってのが大きい』

エボルト『なるほど』

たしかに轡木の妻は、国際IS委員会の重要な幹部メンバーの一員であり、その権力は事実上IS委員会を支配していると言っても過言ではない、正に影の支配者。その為、轡木が学園長の地位に居る事が出来るのも、妻の存在が大きいのだ。

その所為で学生たちから陰で “名ばかり学園長” というレッテルを貼られてる。

秋羅に質問され、汗をかき始めた轡木が、エボルドライバーをそのまま千冬に預けた。

轡木「そ、それでは!!千冬先生、エボルドライバーの解析の方、頼みました」

千冬「…： 分かりました。兄さん、このドライバー事だが、 “アイツ” にも知らせて共に調べて貰うつもりだが、構わないな？」

千冬に聞かれた秋羅は、不愉快そうな眼つきで答える。まるで今の彼女の存在が、目障りと言っているような雰囲気を含ませて…。

秋羅「…： 好きにしろ。どうせお前は束が居なければ何も出来ないのだからなあ…。」

千冬「っ!!？」

オータム「秋羅!!」

オータムの怒号を無視しながら、秋羅は一人扉まで歩いて一度立ち止まり、最後こう言い放つ。

秋羅「…千冬、お前と俺では考え方が違う。俺は俺のやり方がある、それを邪魔するのがお前や束、それかオータムや真耶ならば…：潰してでも殺ルツ！」

オータム「秋羅…」

真耶「先輩…」

千冬「…」

秋羅「…俺が言いたいのほそれだけだ。ではな…」

そう言つて秋羅は学園長室から出て行ったのだつた…。残つた千冬たちはタダ静かにそれを見つめる他になく、千冬は一人静かに涙を流して…。

千冬「…兄さん…」

秋羅が去った方角を見続けることしかできなかった……………。

秋羅「……………」

秋羅は今、寮長室に向かって歩いていった。その表情は陰しく誰も彼に近づく事が出来ない。そんな彼にエボルトが話しかける。

エボルト『秋羅よお、いいのかあ？お前の女』

秋羅『…誰が俺の女だ』

エボルト『誰ってお前…千冬に決まってるだろ？』

エボルトの問いに、秋羅は嫌悪感全開な表情で答える。

秋羅『ふざけるな』

エボルト『だけどよお…………』

秋羅『俺がこの学園に来たのは……』

エボルト『復讐』

ピタっと、秋羅の歩く足が止まった。ここぞとばかりにエボルトは話を続ける。

エボルト『だと思ったよ。お前はやっぱり、あのシスターの事が……』

秋羅『黙れ!』

エボルト『……』

秋羅に遮られたエボルトは、そのまま黙ってしまった。しかし秋羅の怒りにも見える感情は消えない。

秋羅『俺とお前は、ナイトローグとネメシスを殺す事だけを考えればいい!! 違うか!?!』

エボルト『…… そうだな、そうだ。その通りだ…… 秋羅』

秋羅『…… ならば良い』

エボルトを黙れせ再び歩き始めようとした、その時である。

「秋羅さん!!」

秋羅「ん?」

背後から彼の事を呼び止める声が聞えた。そして振り向くと、そこには箒が彼の下まで走って来て、辿り着いた彼女はそのまま秋羅のスーツの袖を掴んできた。

秋羅「ほ、箒、一体何のつもりだ」

箒「秋羅さん!!いいから来てください!!」

そのまま半ば引つ張られる形で、秋羅は連れてかれる。

秋羅「お!おい!!箒!!」

「イメージBGM:オーバードⅢ:Silent Solitude」

彼女に連れて来られたのは、IS学園の正門前。そこには何故か人だかりが在り、生徒たちから不安げな声が其処ら中に聞こえる。

「ねえ、やばいよ...」「先生まだなの?」「どうしよう!」

そんな生徒たちに、ウサ耳の飾りをした女性の声が響く。

??? 「早くしてよ!!でないとしユン兄ちゃんが死んじゃうよ!!」

??? 「ハア...ハア...」

その女性に抱き上げられ、彼女の腕の中で虫の息で苦しんでいる男

が1人。彼の体中傷だらけで、出血が酷い。今にも息絶えそうである。

箒「秋邏さん!!こつちです!!」

秋邏「一体……なに……を……」

箒と秋邏の姿を確認した女性は、まるで身内に出会えたような喜びに満ちた顔で涙を流す。

??? 「っ!!?箒ちゃん!!それにアキ兄ちゃん!!」

秋邏は衝撃を受けたかのような表情で、呟く。

秋邏「馬鹿な……お前……束?」

??? ↓束「うん!!アキ兄ちゃん!!お願い!!シユン兄ちゃんを助けて!!!」

彼の視界に居たのは、箒の姉であり、ISの産みの親……篠ノ之束である。だが彼が本当に衝撃を受けたのは、彼女の腕に包まれている傷だらけの男である……なぜならその人物は……。

??? 「ハア……ハア……」

秋邏「……あ……そんな……」

騒ぎを聞きつけた千冬やオータム、真耶までもが駆けつけた。

千冬「兄さん!!何だ!!この… さわ… ぎは…」

オータム「秋邏!!まさか… アイツ…」

真耶「そんな!!あの人…!」

その傷だらけの人物を知っている者たちは皆衝撃的だった。しかしその中でも秋邏はそれ以上である。

秋邏「あ… しゅ… 春我」

???↓春我「ハア… ハア…」

傷だらけの男… 双子の兄である織斑春我がそこに居ただから… 続く。

第十二章 兄弟

前回、轡木から尋問されてしまった秋羅は、エボルドライバーを一時的に渡す事になってしまった。それどころか自身を慕ってくれている千冬と確執が生まれてしまい気まずい状況に…。

しかし事は彼に休ませないと言わんばかりに、新たな混乱を突き付ける。それは箒の姉でありISの産みの親である篠ノ之 束と、そして自分と円夏の兄で、今まで消息を絶っていた箒の織斑春我との再会であった。

秋羅 「馬鹿な… お前… 束?」

束 「うん!!アキ兄ちゃん!!お願い!!シユン兄ちゃんを助けて!!!」

彼の視界に居たのは、箒の姉であり、ISの産みの親… 篠ノ之 束である。だが彼が本当に衝撃を受けたのは、彼女の腕に包まれている傷だらけの男である…。なぜならその人物は…。

??? 「ハア… ハア…」

秋羅 「… あ… そんな…」

騒ぎを聞きつけた千冬やオータム、真耶までもが駆けつけた。

千冬「兄さん!!何だ!!この…さわ…ぎは…」

オータム「秋羅!!まさか…アイツ…」

真耶「そんな!!あの人…!」

その傷だらけの人物を知っている者たちは皆衝撃的だった。しかしその中でも秋羅はそれ以上である。

秋羅「あ…しゅ…春我」

??? ↓春我「ハア……ハア……」

傷だらけの男……双子の兄である織斑春我がそこに居たのだから……。余りの衝撃的な事に反応が遅くなったが、それでも秋羅は周りの者に指示を出した。

秋羅「オータム！真耶！急ぎ医療班の緊急要請を！！早くしろ！！」

オータム「あ、ああ！！」

真耶「は！はい！！」

秋羅「千冬はこの事を学園長に報告しておけ！！」

千冬「わ、分かった！！」

秋羅「生徒たちは直ぐに寮に戻れ！！これは見せ物ではないぞ！！失せろお！！」

「「「「は、はいい！！」」」」

彼の怒号により箒以外の生徒たちは走り去る。しかし彼女は未だ残って居る。

秋羅「箒、お前は……」

箒「秋羅さん!!この事を円夏と一夏にも教えてきます!!」

秋羅「……好きにしろ」

箒「はい!!」

そう言っただけで彼女は寮に居る一夏と円夏の下へ向かう。が、途中東に視線を向けて呟く。

箒「……姉さん」

東「箒ちゃん……」

久方ぶりの姉妹の再会である、が、今は急を要する。それ処の場合ではないのだ。

箒「姉さん、今は春我さんの事が先決です!ですから……」

東「うん!私も同じ!今はシユン兄ちゃんが大事だから!!」

箒「姉さん……分かりました!では!」

そして箒は寮に向かっていった。それを見届けた秋羅は東と春我に近寄り、彼女の代わりに兄の腕を自分の肩に担ぐ。

秋羅「春我は俺が運んでいく。東は千冬と一緒に学園長室に……」

東「いや!!東さんもシユン兄ちゃんの傍に居る!!」

しかし彼女はこれを拒否。自分も春我の傍に居る事を頑なに望んで、離れようとせず、春我のもう片方の腕に抱き着く。だが……。

春我「ハア…… ハア…… た…… ば…… ね」

東「っ!!? シュン兄ちゃん!!?」

春我「ハアハア…… 秋邏の…… 言う通りに…… するんだ……」

東「で、でも…… でも……」

息が続かない感じの喋り方で、東に言い聞かせようと春我は口を開く。しかし彼の身体は余りに酷く無残である。所々に激しい裂傷と腕や足に銃創が見受けられ、そこからドバドバと多量の出血が出ている。そんな彼の姿に東は涙を流して、しどろもどろになっている。

春我「だい…… じょう…… ぶだ……」

東「シュン兄ちゃん……」

未だに不安を拭え切れない東に、春我は力を振り絞り、彼女の頭を手を乗せて撫でた。

春我「東は…… 良い子だろ?…… なら…… な?」

自身は重傷者だと言うのに、春我は笑みを見せて東を安心させようとす。

東「……わかった」

千冬「東、私と一緒に学園長室に来てくれ」

東「分かったよ、ちーちゃん」

諭された東は千冬と共に学園長室に向かい、その後オータムと真耶が駆け戻ってきた。

真耶「先輩！」

オータム「秋邏!!直ぐにでも設備は使用できる!!早く!!」

秋邏「ああ!!」

春我「わ……るい……な?……あき……ら……」

秋邏「いいから気にするな!今はお前の怪我が先決だ!」

春我「そう……だな……ハハッ」

秋邏によって医務室へと春我は運ばれる事となった。

秋羅「……………」

オータム「秋羅、春我は大丈夫だ。きつと……………」

秋羅「……………」

医務室に運ばれた春我はすぐに治療を受けることになった。その医務室前の廊下で、秋羅は壁に寄りかかりながら腕を組んで眼を瞑って待っている。

真耶「でも、驚きました。まさか篠ノ之東博士が現れるなんて……………」

オータム「ホントだな。でもまさか、お前と春我は、あの篠ノ之東と知り合いとはな……………」

秋羅「……………ガキの頃からの腐れ縁だ」

オータムや真耶に顔を向けずに秋羅は冷たく答える。そんな彼に、オータムは在る事を聞く。

オータム「秋羅……………お前と黒江愛紗は知り合いだったのか？」

秋羅「……………」

真耶「オータム先輩は、彼女の事を知っているんですか？」

オータム「まあな、学生時代一度、試合をしたことがあるんだよ。でも勝てなかった」

秋羅「…それはいつ頃だ？」

オータム「お前と春我が学園に来る前だ」

秋羅「…そうか」

オータム「…なあ、秋羅…お前まさか彼女の為に…ん？」

オータムが何か別な事を聞こうとした時、向こう側から此方へ走ってくる者が三人。箒と一夏、そして円夏であった。三人とも無我夢中で息を切らしながら秋羅に駆け寄ってきたのだ。

円夏「兄さん!!」

一夏「秋兄!!春兄は!!?」

秋羅「…今は治療を受けている。今は待っている」

箒「秋羅さん…あの、姉さんは…?」

秋羅「…束は今、学園長室に居る。まあ、今頃あの『名ばかり学園長』から依頼されているだろうな」

真耶「それって…あのドライバーの解析をですか？」

秋羅の言葉に真耶が不安げにエボルドライバーの事を聞き当てた。人類最強の兵器であるISを軽く凌駕する存在である仮面ライダーエボルの必須アイテム…エボルドライバーの存在は正に全ての女性たちにとって、最大の天敵と言っていいだろう。

秋羅「…ああ」

円夏「兄さん、何の話だ？エボルドライバーって何だ？」

円夏は聞き慣れないワードに疑問を投げ掛ける。しかし箒は薄々気づいていた。おそらくエボルドライバーとは、秋羅がセシリアとの試合に使った、あのベルトみたいな物なのだ……。

箒「秋羅さんがオルコットとの試合に使われた、あのベルトの事でしようか……」

一夏「あく！あのベルトみたいな奴の事か！でもさ……」

エボルドライバーのことに気付いた一夏の表情が暗くなる。どうしたというのか？だがそれはすぐに彼の口から語られる。

秋羅「どうした」

一夏「秋兄さあ、その……」

秋羅「言いたい事が在ったらさっさとええっ」

口籠る一夏の態度に、若干イラツとしながらも秋羅は答えるよう促す。そうして一夏は言う。

一夏「秋兄、オルコットに対して少しばかりやり過ぎだったんじゃないかあ……って」

秋羅「……」

円夏「一夏… お前」

一夏「確かにさ、今回の一件は正直オルコットが悪い。でも！…でも…」

箒「一夏…」

一夏は、秋邏が仮面ライダーエボルになった時、素直にヒーローを見たみたいで喜んだ。自分が兄と慕い、そして男として目標にしていた位に…。だが一夏の理想、想い、信じてやまない理念、それら全てが今回の秋邏の戦いによって打ち砕かれた。

秋邏「…で？」

一夏「秋兄のアレは、ただの一方的な…」

秋邏「暴力…だとでも？」

一夏「…うん」

オータム「一夏…」

真耶「織斑君…」

一夏「秋兄、一体どうしちゃったんだよ！昔の秋兄は、そんな力に對して横暴な人じゃなかった!!」

気付けば彼の瞳は涙で濡れていた。しかし一夏は止まらない、己の信じた人が変り果てている事に彼は耐え切れず、悲しく叫ぶ…。

秋羅「……………」

一方、千冬と共に学園長室に赴いている束は、轡木と対面している。しかし彼女は何処か困ったような顔を浮かべて、在るモノを眺めていた。

束「ええつと……………これ、何？」

彼女が見ているモノ…それは秋羅から預かったエボルドライバーである。しかし彼女は、目の前の物に対して困り果て、千冬と轡木に問いかけるのだった。

千冬「それは、エボルドライバー」

束「エボルドライバー？これがどうしたの？」

千冬「束、よく聞け。そのエボルドライバーを使って、秋羅兄さんはISを倒した」

東「え!?これって何処かの企業が作った新型のISなの?東さんが知らないISが存在するなんて…」

彼女の台詞に、千冬は首を左右に振ってエボルドライバーがISでない事を否定する。

千冬「…ちがう。エボルドライバーはISではない」

東「……え」

千冬「そしてISでないそのベルトを装備した秋瀬兄さんが、突如変身してウチのクラスの専用機持ちを圧倒し、叩き潰した。そのベルトを解析する必要がある。だから……」

東「それを、この東さんに依頼したい、と……?」

東がそう聞くと、千冬は首を縦に振り、轡木も口を開く。

轡木「篠ノ之博士、私たちはそのベルトのメカニズムを解析したいのです。お願いします」

東「うーん、いいよー!東さんも少し興味があるしね♪ISでない代物がどうやって世界最強の兵器を倒す事ができるのか……」

千冬「助かる」

東が了承してくれた事で胸を撫で下ろした千冬と轡木。そんな二人に東は聞く。

東「所でさあ、解析したらどうすんの?」

千冬「今後、そのベルトの量産を頼みたいんだ」

東「いいけど……因みに今このベルトを使えるのはアキ兄ちゃんだけえ〜？」

千冬「ああ……それに」

東「ん？」

東は千冬の暗い表情を見て、内心ただ事ではないと推測した。そしてそれを裏付けるかの如く、千冬はこう言い放った。

千冬「……正直、今の秋羅兄さんに、そのベルトを持たせるのは危険なんだ……」

東「……え」

医務室前の廊下で、一夏の叫びが秋羅に向けられている。

一夏「秋兄!! 答えてくれよお!!!」

秋羅「……」

しかし、その悲しき願いは何も一夏だけではなかった。

円夏「兄さん…… 私も知りたい」

秋羅「…… 円夏」

円夏「兄さんは確かに昔から厳しかった。でも、必ず最後には優しくかった……。けどお!! 今の兄さんにはその優しさが無い……。無いんだ!! どうして!?! 何があったの!!?!」

秋羅「……」

箒「一夏や円夏の想いを無視で返さないで!! 秋羅さん!! どうしてですか!!? 答えてえ!!!」

しかし秋羅の返答は……。沈黙。しかしそれをオータムは良しとはしない。

オータム「…… 復讐、か? 秋羅」

彼女は鋭く決して揺らぐことのない瞳で秋邏を見つめ、彼の目的を言い当てた。これには真耶や、円夏たち三人は驚愕する。

真耶「復讐ってどういう!!?」

一夏「そうだよ!!オータム姉!!何で?!」

箒「秋邏さんが一体誰に復讐すると!!?」

円夏「まさか...」

円夏が何かに気付いた。オータムはそれに答えてやった。

オータム「そうだ。試合に乱入してきたあの怪人が何か関係していると見て、間違いない。それにモニターで秋邏と会話をしている素振りをしていたしな。だろ?秋邏」

秋邏「.....」

オータム「沈黙は肯定の証だぜ?」

円夏「どうして...?何故兄さんが復讐なんて...」

オータム「それはな...」

オータムは学園長室にて千冬から聞いた話を、そのまま円夏たちに聞かせた。その結果、円夏や箒は悲しみの表情で秋邏を見つめ、一夏に關しては.....

一夏「秋兄…… 復讐なんてやめてくれ!!」

秋羅「……」

一夏「秋兄はそんな事をする人じゃない!! 秋兄は!!」

秋羅「…… まれ」

一夏「秋兄？」

円夏「兄さん……？」

箒「秋羅さん……」

真耶「先輩」

オータム「……」

その時、秋羅は…… 静かな怒りの声をあげる。

秋羅「黙れ…… 俺の事を勝手に理解して知ったかぶるなっ!」

円夏「兄さん……」

その場の誰もが、彼を見つめる以外なかった……。

その頃、学園長室では……。

東「と！取り敢えず！！今から東さんが、この場で解析してあげるからさあ♪」

轡木「なんと！！この場で出来るのですか?!」

東「当然!!この天災科学者に不可能はないんだよお♪さあてつと〜」

東は両腕に着けられているキーボードみたいなブレスレットを起動して、エボルドライバーの解析を開始した。千冬は、これでようやく秋瀬だけに苦しい戦いをさせないで済むと既に自己完結して、嬉しそうな顔を見せる。

千冬「これで… 秋瀬兄さんと肩を並べる事ができる… そうだ、あとで兄さんと話合おう… うん」

轡木も嬉しそうではあるが、何処か喜びとは違う感じの顔がうかがえる。

轡木「ふうく、それにしても… 秋邏君から『あの細胞』の名を聞かされた時は驚いた。一体どこでアレの事を…。」

そんな時、束の表情が一変する。

束「… え？嘘…。」

千冬「ん？どうした？束」

束「これ… なに？こんなの…。」

千冬「どうした！」

束「これ… 本当にアキ兄さんが持っている物なの…？」

轡木「ええ、そうですが… 何か？」

轡木の問いに、束は声を荒げて答える。

束「こんな!!技術!!束さんでも作れないよお!!!」

彼女の口から信じられない言葉が出てきた。その事に、千冬と轡木も声を荒げる。

轡木「バカな!!」

千冬「本当か!!!束!!!」

束「うん… あ!でも…。」

彼女は何か思い出したように、眩く。

千冬「どうした!?!」

東「うん……これに似た奴の設計図を、見た事ある……かも」

千冬「なに!?!何処で!?!」

千冬の問い詰めに東は困ったような表情を見せる。

東「あ、あのう……」

千冬「なんだ!?!」

東「……シユン兄ちゃんの持っている端末のデータに入ってた……」

東は怯える感じで答える。それに千冬と轡木は信じられないという顔を見せるのだった……。

千冬「……春我兄さん……が……?」

何故、重傷である春我がそのようなデータを持っているのか……
続く。

第十三章 春我

前回、秋邏と円夏の実の兄、織斑春我が、篠ノ之 束と共に現れた。だが再会に喜べるような状況ではなかった。何故なら春我は重傷を負い、直ぐに治療を受けなければならなかったからだ。そんな中、秋邏に対して一夏たちが、変わり果てた彼に涙ぐみながら訴える。一方千冬は、束にエボルドライバーの解析を依頼。しかし解析を開始した束の口から出たのは、彼女でも似たモノを作れないという衝撃的な物だった。だが彼女はエボルドライバーを見て、在る事を思い出す。

それは、春我が所持している端末に、エボルドライバーと似た設計図のデータを見たと言うモノであった。

千冬「束、今の話しは本当か…？」

束「うん…」

千冬の問いに束は不安げに頷いた。尚も束に対して質問が続く。

千冬「何故春我兄さんが、そのようなデータを持っているんだ？」

束「分かんない… いきなり束さんのラボに来て、理由も言わなかったから…」

千冬「いきなり…？ 待て、春我兄さんとは一体どういう形で再会したんだ？」

束「それは…」

〈回想〉

束 s i d e

あれは、いつくんがISを動かしたってニュースが流れてから二日
が経った日の事だったんだ……。その時束さんは、ISの研究でもし
ようかなって思っていた時……。

束「ん？」

突然ラボに設置していたセキュリティがいきなり停止して、原因を
調べに行ったの、そしたら……。

束「え……？」

春我「おう♪束え〜！元気だったか〜？」

眼の前にシュン兄ちゃんが現れてビックリして、もうその時、
私……。

束「しゅ……」

春我「しゅ？」

東「シユンにいちやあああああああああああああああ
んっ!!!うわああああああん……!」

気付いたらシユン兄ちゃんの胸に飛び込んで抱き着いてたんだ……。

春我「あくつと…… 東さん?どったの?いきなり抱き着いてきて……?」

東「どうしたじゃないよおく!!IS学園を卒業してから一切行方が分からずで、こっちは心配してたんだよお!!」

シユン兄ちゃんが突然居なくなつて、方々を駆け廻つても全然見つける事ができなかつた。どれだけ探しても見つかる事はなかつた。なのにシユン兄ちゃんが今、私の目の前に……。

春我「あく、そのう悪かつたよ。東や千冬、一夏や円夏、そして秋羅に迷惑かけたくなかつたんだ」

東「グスツ…… 今まで何処にいたの……?」

春我「実はなあ……」

……親父の所で研究の手伝いをしてたんだよ」

東「……………」え」

東sideエンド

千冬「春秋叔父さんのところだと!？」

東「うん……………」

千冬は驚愕の表情で東に問いかけ、東はまたも不安げに頷くのであった。しかしそこへ轡木が声を荒げて東に問い詰めた。

轡木「し！篠ノ之博士!!」

東「ん？何……………」

轡木「あ！貴方は！！本当に春我君からそう聞いたのですか!？」

その尋常ではない反応に、東や千冬は狼狽えてしまう。

東「う、うん……そうだけど……?」

千冬「学園長……貴方は叔父さんの事を知っているのですか?」

轡木「そ、それは……」

此処で読者の方々は、織斑春秋という人物について知らないだろうから説明しましょう。

織斑春秋……春我と秋邏、円夏の実の父親である。彼は有能な科学者であり、東の恩師でもある。その頭脳は篠ノ之 東でも超える事ができないとされている程の人類最高位の鬼才。

あらゆる分野において彼の右に並ぶ者は居なかった。特に物理、機械、そして……生物。彼は科学の世界では神の様な人物であった。

しかし彼は、自身の妻であり春我と秋邏、円夏の母親、織斑冬夏^{とうか}と言う女性が病死してから忽然と姿を消してしまった。

余談ではあるが、ニュースや雑誌で彼がもし健在であれば、男女平等のISを開発できると噂されている。

つと、千冬が轡木に問いかけている為、話を戻そう。

千冬「お知り合い、だったのですか……?」

轡木「……え、ええ、彼は私の友人でした」

轡木の返答に、千冬と束は意外そうな表情を浮かべる。

束「うっそお!?あの叔父さんに友達って有り得ないよお!!」

千冬「ああ……確かに春秋叔父さんは科学者としては優秀なお人だったが……」

2人の反応は察したであろう。織斑春秋という人物は科学者としては優秀であったが、人としては難点がある者であったのだ。理由として、それは性格にあった。

彼は親しい人間以外では容赦ないぐらいの辛辣な態度や言動を見せ、刃向うならば慈悲なくその者をクビにして、仕事場から追放したり、科学の発展の為にと残酷な人体実験を何度も行うなどをするような人間だったのだ。

なら親しい人間にはどうか?と言うと、自分から明るい会話で話し掛けて和ませたりなどして接するなど、二重人格なのではと疑う程の二面性を持っている。

轡木「確かに……彼は貴方の言う通り、性格に難がある人物でした。自分が認めた人物には男女関係なく優しく接し、そうでない者には氷のように突き放す。そういう男でした……まるで、春我君と秋邏君みたいに……」

束「それは……」

確かに、春秋の明るい部分は春我に、冷たい部分は秋邏にへと受け継がれたと言って正しい。話しは脱線したが、轡木は束に春我との再

会の話しの続きを聞いた。

轡木「博士、春我君は何故春秋博士の下で研究の手伝いをしていたか、そして何の研究なのか聞きましたか？」

東「いや、それは聞かなかったよお、だってそんな事を聞く暇なかったもん」

千冬「どういう意味だ？東」

東「どうもこうも！シユン兄ちゃん追われてたんだよお!!なんかコウモリみたいな奴にさあ!!それで学園に逃げようってシユン兄ちゃんの提案で、此処に逃げ込もうとしたんだ。でも後一息ってところで……」

千冬「…… そうだったのか(秋羅兄さんとオルコットの試合に乱入してきた奴か)」

東「うん…… グスツ」

東は涙を流してしまう。それもそうだろう、何せ自身の大切な人間が重傷をおったのだから……。

東「シユン兄ちゃん…… 私だけでも守ろうと盾になって…… コウモリ野郎に…… するとシユン兄ちゃんを傷つけておいて、アイツ！いきなり学園の方へ入って行ったんだ!!」

千冬「おそらく、春我兄さんを襲った後に、秋羅兄さんに接触してきたんだろう……」

東「シユン兄ちゃん……」

彼の名を呟きながら、悲しみの表情を浮かべる東。そんな東に千冬はデータの事を聞き出す。

千冬「データに関してはどうやって知ったんだ？」

東「え？データはシユン兄ちゃんがチラツと教えてくれたんだ。その時に」

千冬「それは今も春我兄さんが…？」

東「うん、そうだけど…？」

千冬「ふむ…。」

千冬が東と話し込んでいる中、秋瀬たちは…………。

円夏「兄さん…。」

秋瀬 「黙れ……俺の事を勝手に理解して知ったかぶるなっ！」

殺気を滲ませて言う秋瀬に、誰も何も言えなかった。そんな時、医務室の自動ドアが開き、女性ドクターが出てきた。

ドクター 「織斑先生」

秋瀬 「……ん」

ドクター 「織斑春我さんの治療が完了しました。よろしければ、ご家族である貴方と妹さんがお先に入っても大丈夫です」

円夏 「春我兄さんは!？」

円夏はドクターに問いかける。

ドクター 「怪我は酷かったです、それでも本人の肉体のお陰なのでしょう、脈も安定しています。それどころか直ぐに意識が回復しました」

つと、ドクターは優しい笑みで円夏にそう告げると、彼女やオータム、真耶にそして一夏や箒も皆安堵の顔を浮かべる。そんな中、冷静な態度で秋瀬が円夏に話しかける。

秋瀬 「……円夏、行くぞ」

円夏 「兄さん……」

秋瀬 「……今は春我の事に集中しろ。いいな?」

円夏「……分かった」

円夏の返答を聞いた秋羅は、今度は一夏に視線を向ける。

秋羅「……一夏」

一夏「秋兄……俺」

秋羅「お前がどんな綺麗事を抱いていようが、そんなの俺はどうでもいいし、興味がない」

一夏「え……？」

秋羅「そうやって綺麗事を吠えてろ。俺は俺の進む道を行くだけだ」

箒「秋羅さん!!」

秋羅の冷酷な言葉に一夏は眼を丸くして呆然とし、箒は声を荒げ、真耶は悲しそうな表情を浮かべ、オータムは、険しく秋羅の事を見ている。しかしそれでも秋羅は止まらない。

秋羅「……さっさと見舞いに行くぞ」

円夏「兄さん……」

円夏や一夏たちを置いて、秋羅は医務室に入って行った。しかし秋羅の辛辣な言葉に、円夏たちや真耶は悲しみに満ちる。が、オータム

は……。

オータム「…あの、バカッ」

苦しげと怒りが混じった表情を浮かべて秋羅の背中を見つめていた。

医務室……。

春我「おう… 秋羅、円夏も元気そうだなあ… ハハッ」

ベッドに横たわっている春我の姿に、円夏は駆け寄り安堵する。

円夏「春我兄さん!!よかったあ!!」

春我「それに……一夏や箒ちゃんも元気そうだ」

一夏「春兄!!」

箒「春我さん!!」

一夏や箒の姿を見て春我は微笑む。それに対してオータムや真耶までも彼を安んずる。

オータム「まったく、相変わらずだなあ、春我は……」

真耶「春我先輩……」

春我「あれまあ!オーちゃんに真耶ちゃんまでもかあ、おひさあ」

懐かしむかのように嬉々とした表情を浮かべる春我。自分が重傷を負った患者である事を忘れているようである。

オータム「おひさあ、じゃねえ!バカが!」

真耶「そうですよお!春我先輩」

オータムと真耶の説教に、春我は苦笑を見せる

春我「あ、アハハハツ……お、大げさな……」

秋瀬「大げさじゃない」

「「「……」」」」

春我が話に割って入るように、秋邏が口を挟む。それに対しても春我は苦笑を浮かべる。しかし秋邏の凍てつくような声に、その場の空気が凍りつき寒気すら覚える。そんな実の双子の弟に春我は話しかける。

春我「お、おう！秋邏くん！げ、元気にやあ？」

秋邏「… 重傷を患っている筈なのに、皮肉のつもり、か？それは？」

春我「え、ええっとー… あ、アハハハツ（▽、；）」

秋邏「… お前、何故今まで何の連絡もしなかった？」

円夏「兄さん!!今そんなこと…」

一夏「そうだよ!!春兄は今…」

秋邏「お前らは黙ってる」

円夏と一夏に出しやばるのを許さないと言わんばかりに、二人を睨んで黙らせる秋邏。それに対して春我が異を唱える。

春我「おいおい！二人に冷た過ぎだろう、秋邏」

秋邏「そういうお前が言える立場か？もっと早く連絡していれば、こんな事にもならなかった筈だぞ？」

春我「だとしてもだ。それにお前だって言えた立場じゃないだろうが、束から聞いているぞ？お前、今まで沖縄で暮らして俺と同じく連絡の一つもしなかったそうじゃないかあ。円夏を寂しがらせてたのは何も俺だけじゃない、お前もだろう！」

秋邏「俺以上に勝手に生きておいて良く抜かすもんだなあ!？」

春我「いいやあ！俺以上に勝手なのはお前だろう！」

秋邏「何だと!？」

再会した双子の兄弟、最初のコミュニケーション……それは完全な兄弟喧嘩であった。見るに堪えないその状況に、一夏が声を出そうとした……が。

一夏「二人共……」

円夏「いい加減にしてっ!!!」

秋邏「っ!!？」

春我「っ!!!」

円夏の大声は医務室全体に響き、二人の喧嘩は止んだのだった。だが円夏の秋邏を見る眼が陰しく睨んでいた。

円夏「……っ」

秋邏「ま……円夏」

春我「お、おい……」

そんな中、千冬と束が、春我が目を覚ましたとの報を聞いて遅れてやっしてきた。

千冬「春我兄さん！……って」

束「目を覚ましたんだね!!……え？」

円夏「……」

秋邏「……」

春我「おい……円夏？」

最悪のタイミングで来てしまったようだ。そんな二人を放って、円夏は秋邏に告げる。

円夏「……出て行って」

一夏「っ!!？」

箒「円夏!!!？」

オータム「おい!!」

真耶「そんな!？」

千冬「円夏!!」

東「マドちゃん!!どうして!？」

春我「おい!!待て!!円夏、秋羅は……」

春我は何とか円夏を落ち着かせようとするが、円夏は止まらなかった。

円夏「秋羅兄さんにとって、私たちは邪魔なんですよ!!?だったらもういい!!!復讐に身を窶す^{やつ}して、兄さんなんか不幸になればいい!!!」

千冬「円夏あ!!!」

円夏「っ!…… あ…… わ…… わたし…… あの……」

秋羅「……」

言葉とは何と残酷であろう、それが愛する家族の言葉ならば尚更。しかし口にした物は一度言ってしまうと取り消す事はできない。それを言ってしまった後に気付いた円夏は涙を流し、オドオドしてしまう。

秋羅「……」

円夏「あ…… 兄さん…… あの……!」

秋羅「…… いいんだ」

円夏「え……?」

秋羅 「確かにお前の言う通りだ…… お前らは、邪魔だ」

円夏 「っ!!?」

千冬 「兄さん!!」

最早壁を作った秋羅の心に誰の声も響かない。その為か、彼は医務室から出ようと出入り口に向かう。が、一度立ち止まり…… 告げる。

秋羅 「…… これから、俺の事は一切干渉するな。お前らは俺の目的の邪魔だ」

春我 「おい待て秋羅!! 目的って一体!!」

秋羅 「…… 干渉するなっと言った…… ではな」

そう言い、秋羅は出て行ってしまった。それに円夏は涙を流して崩れ落ち、箒も円夏と同じく涙を流しているにも関わらず、彼女を支えるように傍に駆け寄る。一夏も呆然として何も出来ずに立っていた。

一夏 「秋…… 兄……」

真耶 「先輩…… 秋羅先輩……」

オータム 「秋羅!! お前自分が何を言っているのか、分かってんのか!!?」

だがオータムの叫びは、もう出て行ってしまった秋羅の耳には届か

ない。誰の心にも……。

彼の氷の様な心に、誰の声も届く事はない……そう。

千冬「……にい……さん……」

誰も……続く。

第十四章 鈴音

前回、春我と再会した秋羅たち。彼は今まで行方を暮している間、実の父であり、人類最高位の鬼才……織斑春秋博士の下で研究の手伝いをしていたらしいが、しかしその全貌は定かではない。その春秋はナイトローグに襲われた怪我を治療して貰い、その後秋羅たちとの感動の再会……とは行かなかった。

秋羅は春秋に、今まで連絡をしなかった事を咎め、春秋もそんな自身の事を棚に上げるような言動をする秋羅に対して苛立ちをぶつけてしまうという、双子の兄弟再会のコミュニケーションは最悪なモノへと繋がった。

そんな春秋に苛立ちをぶつける秋羅に対し、円夏は彼を拒絶。それが引き金となり、秋羅は絶縁とも捉えられる言葉を投げ掛けるのだった。

秋羅「……………」

円夏「あ……兄さん……あの……あのっ!!」

秋羅「……いいんだ」

円夏「え……?」

秋羅「確かにお前の言う通りだ……お前らは、邪魔だ」

円夏「っ!!？」

千冬「兄さん!!」

最早壁を作った秋羅の心に誰の声も響かない。その為か、彼は医務室から出ようと出入り口に向かう。が、一度立ち止まり……告げる。

秋羅「……これから、俺の事は一切干渉するな。お前らは俺の目的の邪魔だ」

春我「おい待て秋羅!!目的って一体!!」

秋羅「……干渉するなつと言った……ではな」

そう言い、秋羅は出て行ってしまった。それに円夏は涙を流して崩れ落ち、箒も円夏と同じく涙を流しているにも関わらず、彼女を支え

るように傍に駆け寄る。一夏も呆然として何も出来ずに立っていた。

一夏「秋……兄……」

真耶「先輩…… 秋瀬先輩……」

オータム「秋瀬!!お前自分が何を言っているのか、分かっているのか!!?」

だがオータムの叫びは、もう出て行ってしまった秋瀬の耳には届かない。誰の心にも……。

彼の氷の様な心に、誰の声も届く事はない…… そう誰も。

千冬「……に……い……さん……」

秋羅「……………」

千冬たちに決別めいたセリフを吐き捨てて、秋羅は今、寮長室に向かっている最中である。そんな彼にエボルトが話しかけてきた。

エボルト『おい秋羅』

秋羅『… 何だ』

エボルト『お前… 本気か？』

秋羅『… さっきの事か？』

エボルト『お前… 孤独になったも同然なんだぞ？』

秋羅『… 言葉一つで壊れる関係なら、その程度だ。捨て置け』

エボルト『お前… 』

エボルトはこう思う。何故に己のパートナーはここまで他人との繋がりに関してこうまで不器用なのだろうと…。つとその時、背後から声が聞えた。

??? 「もしかして…… 秋羅、さん……？」

秋羅 「ん？…… お前は……」

彼が振り向いたその先に居たのは、大きなボストンバックを持ち、小柄、ツインテールをした髪型の少女だった。その彼女の表情は嬉々とし、頬には薄らと赤く染めている。まるで気になる人間と再会したかのように……。

秋羅 「…… お前、鈴…… か？」

??? ↓鈴 「っ！はい！！鳳鈴音です！！秋羅さあん／／！！」

彼女は持っていたボストンバックを、その場に置いて秋羅の胸に飛びついた。

鈴 「秋羅さん…… 秋羅さん！！」

秋羅 「……」

彼女は鳳鈴音…… 中国の代表候補生であり、箒が引越していったのと同入れ違いな形で、小学五年生の初めに一夏と同じ小学校に転校してきた。

秋羅や春我が、IS学園の夏休みや冬休みなどによく一夏や千冬たちの家に戻っていた時、その時によく一夏や彼の親友である五反田弾と、御手洗数馬と言う少年たちと彼女を加えた四人は、秋羅や春我に

面倒を見てもらった事がある。

その時から彼女は、秋羅に対して兄を慕う感情を持っている。まあ、読者の方々はそれだけでは無いと思っっているだろう……正解！やったね！たえちゃん!!夢の国に逝けるよ!!ハハッ♪

そんないつまでも自分に引っ付いている鈴音に、秋羅はいい加減にやめさせる。

秋羅「…鈴、いい加減に離れろ。いつまでくっ付いているんだ」

鈴「ええ〜!でもお…」

秋羅「鈴」

鈴「…ハア〜イ」

名残惜しそうに秋羅の胸から離れ、ボストンバックを拾い上げる鈴音。そんな彼女の姿をよく見ると、IS学園の制服を見に纏っているではないか…。

秋羅「…お前、まさかIS学園に…」

鈴音「はい!転校してきました♪」

秋羅「…そうか」

鈴音「あの…秋羅さん」

先程の秋羅に会えた時の嬉しさから一変、彼女は複雑な表情を浮かべて何かを秋羅に伝え始める。

秋羅「…何だ」

鈴音「あの…どうして…居なくなっただんですか？」

秋羅「…」

鈴音「私…凄くショックでした！だって！あんな何も言わずに何処かに行くなんて…そんなの…私…」

秋羅「…鈴」

この時、秋羅は先程の医務室で春我に言われた言葉を思い出す。

『円夏を寂しがらせてたのは何も俺だけじゃない、お前もだろう!!』

秋羅「…」

しかし秋羅はそれでも折れる訳には行かない。ここで折れれば、彼女の…愛紗の死を無にしてしまう、秋羅はそう思っているのだ。だがそんな秋羅の想いなど露とも知らず、鈴音は話を続ける。

鈴音「私だけじゃない！弾も！数馬も！蘭もだって、私と一緒に泣いてましたよ！」

秋羅「…すまない」

鈴音「そんな…呆気なく謝らないでください…」

秋羅「…」

彼女はただ寂しかった時の辛さを少しでも秋邏に伝えたかったのだ。だが今の秋邏自身に、彼女の悲しみに寄りそえる資格は無く、そんな彼に出来るのは謝罪のみしか残されていない。それ故、彼は別の話題を出す。

秋邏「……鈴、”アイツ”は?”お前の兄貴”はどうしてる?」

鈴音「元気……です」

だがそう返す彼女の表情は余りに暗い。それが気になった秋邏は彼女に更にとしかける。

秋邏「?… お前の兄…」りゆういん 龍音”は今、K—1ファイターをやっている筈だろ?今もチャンピオンやっているのだろ?」

鈴音「……」

今度は鈴音が黙ってしまった。ここでまた、一体誰の話をしてるか分からない方々の為に説明しよう。

鳳龍音… その人物は、鈴音の実の兄であり、秋邏と春我の掛け替えのない親友でもある。

特に秋邏とは、何かと喧嘩などするが、それでも唯一の友とも言えるような男である。

秋邏や春我がIS学園に転校しても、その繋がりには切れることはな

かった。しかし龍音が突如K―1ファイターを目指し始めてから秋
羅と春我とは連絡が取れなくなっていった。

だがK―1ファイターを目指し始めてからの龍音は、目覚ましい快
進撃で次々と対戦相手を屠って行き、とても始めたばかりの人間とは思
えない”超人的な身体能力で”とうとう去年の年末に世界チャン
ピオンにまで登り詰めた程の実力者となっていった。世間は、彼を
「中国最強の男」と持て囃やす。

しかしその妹である鈴音の口から語られたのは、驚く事であった。

鈴音「… 秋羅さん、スポーツニュースは見なかったんですね…」

秋羅「ん？ どういう…」

鈴音「… 実はお兄ちゃん

…
辞めちゃったんです、K―1」

一方、秋暹から絶縁とも言える言葉を告げられた春我たちはと言うと……。

千冬「……」

束「……」

一夏「……」

オータム「……」

真耶「先輩……」

円夏「グスツ…… ウウツ…… スンツ…… にい…… さん……」

箒「円夏……」

春我「……」

最早その場の空気は、お通夜めいた雰囲気醸し出しているではないか。しかしその中で春我は落ち着いて千冬たちに話しかける。

春我「秋羅は、どうしてあんなったんだ……」

その疑問の声に、千冬たちは俯きまともに答えられない。だがオータムは違った。彼女は意を決して春我に事の内容を教える。

それを春我と束は驚愕した。特に兄である春我はそれ以上にショックだった。秋羅が1人の女性の死に、そこまで思い詰めて憎しみに走っているなどと……。

束「嘘……アキ兄ちゃんが……」

春我「秋羅……」

オータム「このままだと、秋羅はいつか必ず身を滅ぼしちまう。そんなのオレは嫌だ！アイツの事を何とかしてやりたい!!」

束「うん……でもさ、アキ兄ちゃんをどう止めるの？束さん、アキ兄ちゃんの戦闘映像を見たけど、あれはヤバいよ。ISだと絶対にエポルドライバーには勝てない」

確かに、どのISが掛かろうともエポルの前では最早ゴミと言つていいだろう。しかしこのまま秋羅の凶行を止めなければ、いつか彼は死ぬだろう。

誰かが止めねばならない。そんな時、春我が徐に懐から何かを探しながら呟き始める。

春我「俺もオーちゃんと同意見だ。このままだと秋羅は確実に死

ぬ。それにな、秋瀬がこのまま凶行を続けるってなら、”同じ土俵に立って止めればいい”」

千冬「同じってどうやって…?」

千冬の問いに答える前に、春我は円夏に向き合って在る事を告げる。

春我「そのまえに！円夏、俺は今まで親父の下で研究の手伝いをしていたんだ」

円夏「…え」

いきなりの事に彼女は眼を丸くして呆然となる。無理もない、自分の兄が今までもう会ってすらない父親の下に居たなど言われればそりやあそうなる。だが円夏は一度落ち着いてから問いかける。

円夏「父さんの…所に居たの?どうして?」

春我「それはな、親父が”ISに代わる次世代兵器の開発研究”に取りかかっていたからなんだ。それで俺に助手をお願いしてきたな…だからさ」

春我の話しに聞いていた一夏たちが口を開く。

一夏「春兄、叔父さん…元気だった?」

春我「ああ♪相変わらずだったよ」

箒「あの、叔父様は今どちらに…?」

春我「ハワイだよ」

「」「」「ハワイイ!!?」「」「」

東「あー、バカンス気分の研究してたんでしょ?」

春我「当たり前だろう。親父は昔から自分勝手にやりたい人なんだからあ♪」

オータム「あの人類最高位の鬼才にとって、今の女尊男卑の世界すらただの座興にしか見えないんだろうなあ…」

真耶「あの！ISに変わる次世代兵器って…?」

真耶の質問に、春我は「忘れる所だった!」っと言わんばかりに、懐から一つのUSBメモリーを取り出した。

千冬「あの、このUSBメモリーは…?」

春我「こん中にあるデータが入っている。あのコウモリ野郎は、これを狙ってきたんだ。まあ、何とか死守できたから感無量さあ♪」

東「だからって！もうあんなの禁止いー!」

春我「ハイハイ」

一夏「それで何のデータが入ってるの?」

春我「ああ！それはな…」

ライダーシステムっていう兵器のデータさ」

秋羅 「… 龍音が、辞めた…？」

鈴音 「… はい」

秋羅 「… 何故だ」

彼の問い掛けに鈴音は暗い顔のまま返す。

鈴音 「… それは言えません」

秋羅 「……………」

鈴音 「ごめんなさい、秋羅さん」

秋羅「……そうか、分かった。お前が言いたい時に言えばいい」

鈴音「あ、ありがとうございます」

秋羅はこれ以上、鈴音に問い詰めるのは傷つけると思いやめた。鈴音もそれが助かったのか、彼に別の話題を持ち出す。

鈴音「あ！あの！秋羅さん。一夏って本当にISを動かしたんですか？テレビで凄い騒ぎでしたよ？」

秋羅「……… ああ、本当だ」

鈴音「？」

鈴音は微かにだが、秋羅が暗い表情を浮かべるのを見た。彼女はいつも他人の表情をよく見ている故、秋羅が見せた僅かな瞬間を逃さなかった。

鈴音「あの……もしかして何か、あつたんですか……？」

秋羅「…… 何故分かる」

鈴音「秋羅さん……いつも怖い顔をするけど、実はよく見れば優しいっていうのが分かります」

秋羅「………」

鈴音「あの？秋羅さん？」

秋羅「……すまない、鈴。ここで立ち話で時間を潰してしまっ

て……」

鈴音「え？いえ！そんな！私は全然……（だって秋邏さんと会えたから……）」

秋邏「……総合受付案内は、この校舎の二階だ。階段を上ってすぐ目の前にある、1人で行けるな？」

秋邏は鈴音にそう聞くと、彼女は一瞬切なそうな表情を浮かべることが、直ぐに元の快活で元気な顔を見せて秋邏に返事するのだった。

鈴音「……っ……はい！大丈夫です♪それじゃあ秋邏さん！また明日！」

秋邏「……ああ」

そう言い残して鈴音は元気に去って行った。それをただ眺めていた秋邏に、エボルトが話しかける。

エボルト『お前、中々にモテるなあ（ニヤニヤ）』

秋邏『……俺にはもう不要の感情だ』

エボルト『……』

そうして、秋邏もまた1人寮長室に帰って行く。そんな彼とは反対方向に向かっていく途中、鈴音は悲しそうに呟く。

鈴音「……どうして……そんな悲しそうに……そして辛そうに

いるんですか……。秋瀬さん。まるでウチのお兄ちゃんと同じ……。ですよ……」

その頃、ある場所で……。

??? 「たくっ！此処に来てってあんのに、誰も居ねえぞ。ちっ！ふざけやがって!!」

その男、ワイルドな七三パーマの髪型で、身長190位、鋭い眼つきで誰かを探しているようだ。その時……。

「鳳龍音さん、ですか？」

??? ↓龍音「んあ？ああ、そうだけどよお……ぐっ!!」

その男……鈴音の兄、鳳龍音が振り向いた瞬間、いきなり何者かに首を絞められる。

龍音「て！てめえ!!ぐう!!がつ!!」

彼が見る先には……。

ナイトローグ「フフツ、さあ♪楽しい実験に付き合ってもらおう……ハハツ♪」

続く。